
God Only Knows ? !

瀬川しろろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

God Only Knows ?!

【Nコード】

N8763T

【作者名】

瀬川しろう

【あらすじ】

ある少年、竹内耕也。彼はある日、一人の少年「桂木桂馬」に出会った。

「God Only Knows !」の続編ついに登場！

？では意外な展開が巻き起こる！！

「God Only Knows !」を読んでからお読みになってください。

0 登場人物・・・（前書き）

「God Only Knows！」の続編がついに出来ました！
ついにではない気がしますが・・・。
では、タイトル通りキャラクター紹介へどうぞ。

0 登場人物・・・

竹内耕也 たけうち こうや 17歳 ジョブ…てんやわんや主人公

この作品の主人公。

桂木桂馬に一番最初に話しかけた。

人が困っていると放っておけない性格であり、温厚な人間である。
本作ではツツコミとボケの両方を使えるため、非常に扱いやすいキャラクターとなっている。

いつも桂馬をバカにしている様子があるが、

実は内心では結構、桂馬のことを尊敬している。

身寄りがなく、今はエルシイとともに桂馬の家に住んでいる。

桂木桂馬 かつらぎ けいま 17歳 ジョブ…ゲーム界の神

原作での主人公。 なお、この作品では耕也の友達。

ゲームの世界に生きる生涯孤独な男。

ネット上では「落とし神」の異名を持ち、それなりに有名である。

原作通り、ボケやツツコミを混ぜて使えるため、

耕也同様あつかいやすいキャラである。

現実の世界のことを「リアル」と呼び、完全に絶望しているが

実は困っている人を放っておけない性格。

一人称は「ボク」

エリュシア・デ・ルート・イーマ 300歳以上 ジョブ…小市民
アクマ

通称、エルシィ。桂馬と契約を交わした悪魔である。
これ以上ない天然で、日々失敗をくりかえすも、めげずに頑張っている。

地獄から派遣された駆け魂隊の一人で、桂馬と耕也を巻き込む。
本作での駆け魂の捕獲数は、現在5匹。

ハクア・ド・ロット・ヘルミニウム 300歳以上 ジョブ…ド
メステイックジーニアス

通称、ハクア。エルシィの同級生。

元々は優等生だったが、現在は成績が伸びず、
昔との差にギャップを感じ、悩んでいた。

しかし、エルシィのおかげで自分を取り戻す。

本作での駆け魂の捕獲数は、現在1匹。

スロア・ライン・フエクシミリ 300歳以上 ジョブ…やる気
ナッシングデビル

通称、スロア。耕也と契約を交わした駆け魂隊の悪魔。

耕也にメールを送ったが、エルシィが返信してしまったために

耕也の協力者^{パディー}となった。

本作での駆け魂の捕獲数は、現在2匹。

^{たかはら あゆみ}
高原歩美 17歳 ジョブ…陸上部

桂馬が一番最初に攻略した少女。

元気がよく、桂馬のことを「オタメガネ」と呼んでいた。
よく壁にぶつかる。

青山美生 あおやま みお 16歳 ジョブ…元セレブ

桂馬の二人目の攻略相手。

お金持ちのフリを続けていた。

好物はオムそばパンらしい。

中川かのん なかがわ 16歳 ジョブ…ローラーコースターアイドル

桂馬の三人目の攻略相手。

人気アイドルだが、本人にはその自覚がなく落ち込んでいた。

ある秘密がある。

汐宮栞 しおみや しおり 16歳 ジョブ…雄弁図書委員

桂馬の四人目の攻略相手。

図書委員。人と話すのが苦手で、いつも本を読んでいた。

ある秘密がある。

春日楠 かすが くすのき 18歳 ジョブ…ファンシー拳法家

桂馬の五人目の攻略相手。

幼少期に女を捨て、春日流道場の跡継ぎとなった。

じつはかわいいものの、軟弱なものが好きだが、本人はそれを拒んでいる。

小阪ちひろ こさか 16歳 ジョブ…ふつーの人

桂馬の六人目の攻略相手(?)。

耕也、桂馬たちの同級生。

エルシィをエリーと呼んでいる。

桂馬曰く、モブキャラでヒロインを引き立てるための存在らしい。

そんな彼女のスキマの原因とは・・・？

雨宮真紀 あまみや まり 17歳 ジョブ…不器用な少女

耕也が初めて攻略をした相手。

ある日舞島学園に編入してきた女の子。

第一期で駆け魂が入っていることが明らかになった。

何においても不器用で、弁当すらカバンから出せない。

それが心のスキマの原因となっていた。

岡本縁 おかもと ゆかり 16歳 ジョブ…天然恥じらいっ子

耕也が2番目に攻略をした相手。

本を読むのが好きで、常に図書館にいる。

少々天然が混じっていて、極度の恥ずかしがり屋。

攻略の前から耕也に好意を抱いていて、それが心のスキマの原因となっていた。

白川雄二 しらかわ ゆうじ 16歳 ジョブ…迷惑な親友

耕也の親友。

いざとなったら頼りになるクラスメイト。

いざとならないと頼りにならないけど。

耕也はこいつを煙たがっているが、実は結構大切に思っている。

悪いやつではない。

桂木麻里 かつらぎ まり 年齢不明 ジョブ…元不良のお母さん

原作での主人公である桂木桂馬の母親。

耕也とエルシィを引き取り、家に住まわせている。

開いている「カフェ グランパ」は桂馬の祖父からもらったもの。
ちなみに、父親は出張中。

二階堂由梨 にかいどう ゆり 年齢不明 ジョブ…怖い高校教師
国語の先生。耕也、桂馬のいる2年B組の担任。桂馬にはいろいろ
とやられている。
ある秘密がある。

児玉一郎 こだま いちろう 年齢不明 ジョブ…ウザい高校教師
英語の先生。3年D組の担任。桂馬は個人的に嫌いらしい。

0 登場人物・・・（後書き）

これから登場したキャラクターがいれば、その度
に上書きをしますのでお楽しみに。

では、「God Only Knows?」をよろしく願
います！

1 一華繚乱……。 (前書き)

ついに？が連載開始です。

お読みになってくださっている皆様、ありがとうございます。

では、楠編第1弾です。

どうぞ、お楽しみください。

1 一華繚乱・・・

（ある日）

目覚めのいい朝だ。

俺は制服に着替える。

舞島学園の制服だ。

・・・俺はある日、一人の少年と出会った。

「桂木桂馬」

俺が知り合った友達。

そして「落とし神」の異名を持っていた。

そんな時、一通の契約書から桂馬のゲームライフが変わってしまう。

「エリュシア・デ・ルート・イーマ」

桂馬と契約を交わし、協力者^{バディ}となった駆け魂隊の悪魔だ。

そして俺は何かというと、

この二人と同居をしている駆け魂隊の関係者（と、いうことになっ

ている」だ。

・・・あ、まだ名前を言ってなかったな。
俺の名前は竹内耕也。

・・・まあ、桂馬の友達さ。

（ある日の舞島学園）

「すごいですー！ もう4匹も駆け魂捕まえましたー！」
エルシイこと、エリュシア・デ・ルート・イーマがペンを持っ
てはしゃいでいる。

そして桂馬が言う。

「・・・冗談じゃない！ 一体いつになったら終わるんだ！
毎回毎回、厄介なやつばかり！」

まあそんなこんなで攻略してきたこいつを
俺はすごいと思う。

「まあ確かに駆け魂持ちの娘は変な子が多いよな・・・。
何でだろうな・・・？」

「・・・エルシイ・・・貸せ」

桂馬はエルシイにペンを要求する。

「考えたんだが・・・もしかしたら駆け魂と関係しているのかもしれ
ない」

「どういことだよ？」

「・・・いてて」

「いてーな、どこ見てんだお前・・・」
うおおお！ 思い切り不良じゃないか！

「あわー！ す、すみません！」
エルシイは柱の後ろに隠れる。

「お前ら楽しそうにしてんじゃねーか」
「おおいに水差してやろうか？」
「ああん？」

「ど、どーしましょう・・・怖そうな人たちですー・・・」
「フン、怖いもんか。こんな絵に描いたような連中。
パセリみたいなもんだ」
「！」

「お前の絵のほうがよくぽど・・・プツ！」
「だ、黙れ！」
だって、ホントにあの絵おかしいもんな。

「何だ、誰がパセリじゃ！ この！」
「コノヤロー！」
ドコッ！

桂馬が殴られた。
ボスカボスカ・・・
あーあ、タコ殴りだ。
そりゃパセリ発言してたらなあ・・・。

すると桂馬が言った。

「・・・待て・・・ルートを変更する・・・」

「あぁー？」

「選択は『謝る』だ・・・」

「だから許せ」

超偉そーーーっ！

しかし、この発言に不良が賛成するわけもなく当然のごとく、批評した。

「あんなア・・・」

上から目線で下手に出るなアアアー！」

ごもっともです。

「お前たち、やめろ」

どこからか声がした。

声の方を向くと、ロングヘアーの少女が立っていた。どこことなく男に劣らないオーラが出ている。

「無抵抗な者を痛めつけるなど・・・」

「真の男のすることではないぞ」

「ヒューー・・・」

「かっこいいーじゃん」

「なにぃー？ 俺たちとやるつもりー？」

「まさか。」

下衆な男と交える拳は持たない」

うおお、すごいこと言うなこの人・・・。
見た感じ年上っぽいけど・・・。

「見逃してやるから早く去れ」

ていうか、この人の存在感が強すぎて
桂馬やエルシイもじーっと黙り込んでいる。
まあ、俺もだけど。

「・・・ならこっちも、拳なんか使わんわ」
そういつて不良は、何やら武器を取り出した。

「出たー！リョーくん特製、特殊警棒ー！」

こ、こいつら・・・汚すぎる・・・！
女一人相手に警棒だと・・・！

そして不良は少女に飛び掛った。

「衝撃的に痛い目にあってもらおうかー！！！」
・・・フツ・・・

え？ 消えた？

・・・と思ったら、不良の後ろに！
・・・と思ったら、また前に！？
スゴイ・・・。

そして、彼女は不良の顔面スレスレでパンチを寸止めした。
・・だが、おそらく・・・
風圧で不良は吹っ飛んだ・。

そして少女は一言。

「去れ・・」

不良たちは立ち去った。

・・・カッコイイなあ・・・。

・・なんとか助かった桂馬だったが、
桂馬はお礼も言わずに立ち去ろうとした。
そのとき。

「おい、待て」

・・ホラ。

「・・あ、助けてくれてどうも・・」

「お前それでも男なのか？　なぜ立ち向かわない？」
少女は桂馬に問い詰める。

「あーよかった。セーブデータは大丈夫だった」
「聞け！」

もう桂馬となら誰でも漫才ができるな。

「お前のようなヤツが下衆の肥やしになるんだ。
・・・分かってるのか？」

「いででででででで！」

桂馬が少女に絡まれている。

「軟弱が・・・はびこりすぎている！」

少女の力はさらに強くなった。

・・・あれ？

何か、桂馬の状況悪くなってないか？

さっきの不良よりも強いし・・・。

するとどこからか声がした。

「こ、ここに、こらーーーー！」

にーさまから離れなさーーーーーい！

このパセリたちーーーーー！」

声のしたほうを見ると、

テケテケテケとエルシイが駆けて来た。

「うーーーーー！ おりゃーーーー！」

「わーーーーー！ ボ、ボクを殴ってどうするーーーー！」

もう誰とでも漫才できるわ、こいつ。

あと、エルシイやけくそだな。

すると、やっと攻撃している相手が桂馬だと気づいたのか

「・・・あ、あれ？ パセリさんたちは・・・？」

「そんなシーン、とづくに終わったわあっ！」

桂馬がつっこむ。

「こんのボロ悪魔あああつ!!」

「だいたい今までどこにいた! 何してた!
出てくるタイミングが遅すぎるだろおお!!」
「うううー、すみませーん!」

「……………」

少女はただ見つめていた……

ドロドロドロドロドロ……

「!」

「駆け魂!」

えっと……この付近にいる女……
女……

女………

おん………な……?

3人一斉に少女を見つめた。

「な、軟弱な連中だ!

二度と会いたくないものだな……!」
そして、少女はその場を立ち去った。

〈教室〉

「ま、また駆け魂の持ち主ですよ！」

「・・・まさかあいつと闘うルートにならないだろうな・・・。
昔のゲームで時々あったんだよ・・・。
勝負して勝つのが落ちる条件って・・・。」

「・・・い、今から体、鍛えるか・・・？」

「・・・頼むぞ・・・。」

どうか違う展開であってくれえ・・・。」

落とし神、再び降臨・・・。

1 一華繚乱……。 (後書き)

作者「『God Only Knows?』 連載開始だー
っ!」

耕也「言わんでも分かるっての」

作者「?を記念して、何かやりたいと思います」

耕也「何かって何だよ」

作者「フツ、はっきり言おう。

まだ何も考え付いていない!!!」

耕也「偉そうに言うな!!」

次回、楠編 第2弾です。

2 異心分心・・・（前書き）

作者「待望の2話目だぁぁっ!!」

耕也「えーと・・・これで合計22話だな」

作者「一期と合わせるのはやめろ」

耕也「フッ、気にするな」

作者「お前、マジで大変な目に合わせるよ?」

耕也「・・・え?」

2 異心分心・・・。

「さらにある日の舞島学園」

エルシィが毎度のごとく、攻略対象の説明を始める。

「春日 楠くすのき・・・、4月10日生まれ、

3年A組18歳、175cm、55kg・・・」

やっぱり年上だったのか。

同じ年であのオーラだったら、

絶対に近寄らないからな。

まあ、年上でも年下でも近づかないけど。

「古式武術、春日流 羅新活殺術らしんかつさつじゆつの伝承者で、
女子空手部の主将もやってます・・・」

「何でも、空手部はこの人が主将になってから
2日で部員がゼロになったそうですよ・・・」
おっかねー・・・。

「怖そうな人ですー・・・」

「お、瓦割りをやるみたいだな」

「・・・・・・・・フッ!!!!」

ドカドカドガッ!

・・・・・・・・瓦は割れず、

すべて貫通し、大穴が開いた・・・。

「瓦割りなのに・・・割れないときもあるんだな・・・」
桂馬は思わず口にだしていた。

「・・・今回は近づくのも大変そうです・・・

ゲームとか絶対キライそうですし・・・

先輩だし・・・接点がありませんよ・・・」

「確かに・・・・・・・・ってあれ?

桂馬は・・・?

ところが、桂馬はいつのまにか武道場の中に入っていた。

「主将! ボクを弟子にしてください!」

「「はい!!」」

いつもながら行動力が強すぎるな・・・。

「・・・お前は昨日の・・・。

うちは女子部だよ。男子空手部に行きなさい」

「先日の叱責しっせき・・・身に染みました!

先輩の下で、武のココロを極めたいのです!」

そして楠が返す。

「武のココロ・・・？」

簡単に言うじゃないか・・・」

「そんな簡単に極められる世界だと思っているのか・・・？」

うおおお！

何か楠の背景に竜神みたいなのが見える！

・・・そして桂馬はこう言い返した。

「・・・お言葉ですが・・・」

『違う世界』なら・・・すでに極めております・・・」
うん。

違う世界ってのは間違いなくアレだね。

・・・すると、この生き方の沸点が楠に通じたのか・・・。

「修羅場を潜り抜けてきているようだな・・・」

・・・楠は桂馬の顔を見るや否や、顔をそらし、

「軟弱そうなヤツだ・・・気に食わない。

ここで少しは直していけ・・・」

「では・・・！」

「・・・特に・・・顔を直せ・・・」

「？」

・・・それは顔の輪郭から変えろってことか？

なんかかんやで、桂馬は
男子マネージャーとして女子空手部に入部した。

『主将と弟子』 ナレーション…桂木桂馬

壹

「オタメガ、女子空手部に入ったんだってさー」

「通信空手よりかっこわりーなー」

ドゴー！！

・主将は・・・軟弱なものが嫌いだ。

「入りたいればお前たちも来い。

いつでも歓迎してやる」

おやつは堅焼きセンベイ。

男だ。

「つーかジジイだ」

貳

「主将ー、また道場に猫が来てますよー」

・・・・・。

・・・・・。

「・・・・・。

・・・・・。」

「・・・捨ててこい」

参・

「桂木ー、何やってるー！ー！

このセンベイ湿気ってるじゃないかー！ー！」

「濡れセンベイですよ。

たまには違うものかどうかと」

「・・・軟らかいセンベイ？

言語道断だ！」

じゅううううー・・・

「なるほど、意外とイケるな。

乾かせば」

「・・・ま、意味は無くなりましたが」

」で、またある日の道場」

「わー、すごいですー！

神様、床拭きのプロですねー！」

「フツ、床拭きはとあるゲームでさんざんやったからな」

またゲームかよ。

ていうか、床拭きをさんざんやるゲームってどんなゲームだよ！

・・・そういえば、パ○ポ○のミニゲームでそんなのがあった気が・・・。

「どうですかー神様。武のココロは身につきましたかー？」

「そんな簡単に身につくもんじゃ・・・」

「・・・どうもルートが安定しない・・・」

武の河に棹^{さお}さし、軟弱を憎む・・・。

強力に一本やりなキャラクターなんだけどなあー・・・」

「確かに・・・当てはまらない部分が今までより多いかもな・・・」

「・・・猫が嫌い・・・不良が嫌い・・・軟弱者が嫌い・・・」

センベイが好き・・・統一性があるようで何か違う・・・」

桂馬は部室の扉を開ける。

ガラッ・・・

「・・・」

・・・そこには猫を抱いている楠がいた。

「・・・そうか・・・単純な話だったんだ・・・」

楠は俺たちに気づく。

「え、あ・・・か、桂木・・・!?」

無期の後に・・・

「こ、これはだな・・・その・・・」

・・・バ、バカ者ーっ！入るときはノックをしてから・・・

「！」

そう怒鳴りかけた楠は桂馬の顔を見ると・・
怒鳴るのをやめ、

「？」

「・・・何だその顔はぁーっ！っ！！！」

「ブフォオオッ！？」

桂馬を殴り飛ばした。

痛そー・・・。

＼教室のベランダ＼

楠は猫をつかみ、今にも落としそうな体勢で構えていた。
いや、落とすと決心した、だろうか。

「・・・捨てなきゃいけない・・・こんな気持ち、捨てなきゃいけない・・・」

楠は猫に向かって語りかけている。

・・・ちなみに、俺たちはエルシィの羽衣の中で隠れているのだが、

「ホントにこれで聞こえないのか？」

「シー、しずかにー」

これで本当に音が漏れないのか・・・？

再び楠は語る。

「・・・お前のおかげで、アイツにあんな恥ずかしいところを見られた・・・！」

アイツとは、やはり桂馬のことか。

「アイツの顔は特に軟弱だ。」

「今度、2・3発殴って顔の形かえてやる」

怖
っ
！
！

怖すぎじゃないか？

桂馬もア然としている。

そして、
ついに楠は・
・
・
・

ブンツ！！

猫を放り投げ
・
・
・
・
・
・
・

「・・やっちゃったか・・!？」

[illegible]

地面に落ちた音が聞こえないな・・・？

ふと楠の方を見る。

!!

そこには分裂をした楠が二人いた。

「・・・主将が・・・二人に・・・！」

（道場）

桂馬と楠が向かい合って話していた。

「確かにいました・・・主将が二人！」

桂馬は楠に迫った。

楠は答える。

「・・・以前から違和感はあった・・・。
心がざわめく度に体が引き裂かれるような・・・。
だが、あんなにハッキリ分裂したのは初めてだ・・・。」

・・・。

すると桂馬はサッと猫を取り出し、
楠の目の前にやった。

すると・・・。

ブウウン・・・

『・・・かわいい・・・』

ま、また分裂したぞ！
これは・・・。

「いよいよ間違いない・・・駆け魂は人間に強い影響を与えるんだ・・・。」

主将のなかの軟弱なものに惹かれる気持ちが・・・、
形となって現れてるんだ・・・！」

「で、でたらめだ！」

私は軟弱じゃ・・・ない・・・！」

楠は必死に否定する。

「そうじゃないと・・・いけないんだ・・・。」

さて、どう慰めるのか・・・。

・・・そして桂馬は言った。

「主将！ これはむしろ潜在一隅のチャンスでは!？」

・・・え？

「どんな強い人間にも弱い心があります！」

お釈迦さまだって！

プロレスラーだって！

パンダだって！

熱帯魚だって！」

うおおお・・・いつもながら何言ってるのコイツー・・・？

「しかし、弱点は普通は見えない。
だから皆苦労する。」

しかし、今回はその弱い心が、見える！
弱い自分と対決してねじ伏せられれば・・・

弱い自分を、克服できます！」

あー、なるほどそういうことね。

ただ、最初のくだりはいらなかったと思うけど・・・。

そして楠は

「・・・なるほど・・・そうか・・・！」

ドガッ！

納得しながら桂馬を殴った。

多分、「弱い」って何回も言われたからだろうなあ・・・。

「・・・そのために今から、『軟弱』なことをしましょう」

「え・・・な、なぜ・・・？」

楠は問い返す。

「『弱い主将』をときめかせるのです。

猫ぐらいじゃまだ弱い・・・もっと軟弱なこと・・・」

「・・・なにかないですか。

『主将にとってこの上なく軟弱なこと』！」

桂馬は楠に迫った。

「そ、そんな急に・・・考えたことも・・・」

・・軟弱なことか・・。

よく分からんが・・・ひとまず
いろいろ試してみたりするとか・・・。

「エルシイはどう思う・・・アレ？」

エルシイは俺の隣にはいなかった。

そして、

「デートとかどーでしょーっ!!」

あーっ、アイツいつの間に！

「二人でかわいい服着てデートして・・

これは軟弱ですよーっ!!」

即、桂馬が言う。

「そ、そこまでしなくていい！」

即、楠も言う。

「だ、誰だお前！ 急に出てきて！」

楠については一理ある。

「だってー、見てるだけだとつまんないですよー」

「お前は見守るのが仕事だろーっ！」

・・うっかり俺も出てしまった。

「・・と、とにかく却下だ！」

大体なんで・・・

・・こ、こいつとデートを・・・

そう言いながら楠は桂馬の方を見る。

ボヒユウウン・

『・・・・・・・・』

「・・・・・・・・」

また分裂!!

楠はすぐさま弱楠を攻撃する。

だが、失敗したようだ。

「くそ！ ガードされた！」

でも・

「もう一人も相当動揺してますー！」

「・・これは・・決定だな桂馬・・」

くそして・・・・

桂馬と楠は二人で歩いていた。

俺とエルシィは近くで見ている。

「・・い、いいか桂木・・これはデートではない・・」

「はい」

「これは・・弱い心を克服するための・・」

・・そ、そう、作戦だ！」

「・・さ、作戦だから・・お前も・・」

別に私を意識することはないのだぞ・・」

楠は桂馬に言う。

まあ桂馬は現実の女に興味はないだろうからな・・。
で、案の定桂馬は

「はい。　ボクは別に」

「！」

ボコッ！！

桂馬は殴られた。

「・・フン・・」

「・・・・な、何で・・・？」

・・大丈夫だろうか・・こんなんで・・・。

2 異心分心・・・（後書き）

桂馬「どこかからの要望だが・・・お前に攻略をやってほしいとかいう要望が届いてたぞ」

耕也「・・・何？」

桂馬「ボクとしてもその方が助かる。
というわけで決定だ」

耕也「いやいやいやいや！！ 待て！」

作者「いいな、それ！ 採用！！」

耕也「うおおーっ！っ！っ！！！！」

3 優勝劣敗・・・（前書き）

作者「さて、楠編第3弾！」

桂馬「さて、耕也が攻略するという話はどうなったんだ？」

耕也「そうだそうだ」

作者「ああ、あれは採用」

耕也「やっぱりですかー！ー！！！」

3 優勝劣敗・・・。

（引き続きデート中の桂馬と楠）

「・・・し、しかし・・・この服はいけない・・・

学校の制服でよかったと思うが・・・」

楠が着ている服は、ピンク色のワンピースのような服装で、いかにも軟弱そうな・・・服装だった。

そして楠の質問に対し、桂馬は答えた。

「できるだけ、軟弱なほうがいいと思って・・・」

「・・・な、なるほど・・・」

・・・でも、この服 実はエルシィの羽衣で作ったものなんだよなあ・・・。

エルシィが「かわいいの作ります」とか言ってたけど・・・。
ま、気にしない気にしない。

しかし、楠は桂馬に詰め寄る。

「・・・だが・・・げ、限度があるだろ！ 限度が！」
ザワッ

楠が大声を出すので、周りが騒ぐ。

「・・・は、恥だ・・・！」

みんな私を見て・・・笑っているんだ・・・」

そう言う楠に桂馬が言う。

「違いますよ。みんな、主将がかわいいから、見てるんですよ」

ボヒユウウウ・

今の桂馬の発言で、楠はまた分裂した。

よし、叩きのめすチャンス！

だが……。

「桂木！ いい加減なことを言うなああ！」

楠は弱楠ではなく、桂馬を殴っていた。

桂馬は必死に楠に伝える。

「しゅ、主将ーっ！」

出てる、出てるーっ！！」

「！」

桂馬の発言で楠はようやく気づき、攻撃したが弱楠は戻ってしまった。

桂馬はつぶやく。

「……くそ……エルシイが余計なこと言うから……」

「おいエルシイ、何か言ってるぞ」

「そうですねー、私たちも応援しましょう！

神様、ファイトオー！」

「……あいつ……いつか倒す……」

桂馬はエルシィに復讐を誓ったとか誓わなかったとか。

くでく

・ここは・桂馬がよく来てるゲームショップだな。
そうそう、ここでエルシィが桂馬を説得してたっけ・。
妹にしてくれとかどうか・。

そんな説得をしていたエルシィが言う。

「うわぁー、かのんちゃんの曲ですー！」

「え？　・あ、ホントだ」

そう、店内にはアイドル「中川かのん」の曲、
『ハッピークレセント』が流れていた。

・言っとくが作者の勝手な設定じゃないぞ？
アニメ本編でもちゃんと流れてるんだからな？

・・・かのんか・・。

実を言うと、俺にはかのん攻略時に気になることがあった。

・攻略した女子の記憶は消える。

実際、歩美や美生^{みお}、栞^{しおり}もそうだった。

楠もそうなるだろう。

・でも・かのんの時だけ・・・ほかの娘^ことは違う気がした。

なんと言うか・・攻略の後も、かのんは桂馬のことを

覚えているんじゃないかなあ・と。

なぜかは分からないが、そんな気がした。

「・まあ、そんなはずねえか」

俺は一人で納得した。

「うわぁー、かのんちゃんのゲームー！」

「・・・はあ？」

そんなものあるわけないだろ？

俺はエルシィのもとへ、そうつつこみに行った。

だが・・・

『かのんの挑戦状』

ありやがったああーっ！

なんて事だ！　ありやがった！

あのアイドル、いやスタンガン女。

どこまで手を広げてやる！

・・・言つとくが、これも作者の勝手な設定じゃないからな？
アニメ第1期、栞攻略時に出てるんだからな？

『ぽっぽっぽー、鳩ぽっぽー』って。

「つか、何で桂馬のやつ・・・よりによってこんなところに・・・」

「何か神様なりの考えがあるんじゃないでしょうか・・・」

うーむ、やはりそうなのか。

俺たちは桂馬たちを見張っていると桂馬はとある場所で立ち止まった。

そして。

「あれ？・・・これって・・・PFP版あったんだ・・・」

まだ残ってた。　ラッキー★」

・・・どうやら考えなんてこれっぽっちも無いようだな・・・

そして楠が言う。

「・・・お前はバカか？」

「え？」

「ゲームショップなんか来て・・・私にどうしろというんだ」
ごもつともですね。

「・・・でもボク、この店しか知らないから」
マジで!?

それはそれでどうかと思うよ?

「・・・軟弱の極みだな・・・まったく・・・」
・・・そこまで言う・・・?

「・・・じゃあ、次は主将が行きたいトコにでも行きましょう」
「!」

くでく

・・・しかし、なぜよりもよってスポーツショップ・・・?
「おおおっ! 見る桂木! テーピングがセール中だぞ!
お前何個買う? ソフト? ハード?」

・・・なんじゃこの会話は・・・。
これじゃあなあ・・・。

そしてエルシイが言う。

「・・・なんだか全然デートっぽくありません・・・」
「・・・だろ? 俺もそう思ってた・・・」

くでく

「・・・どうも我々は接点が無さ過ぎるようだな・・・」

我々って・・・アンタ誰っすか？

「接点ですか・・・じゃ、手でも繋がります？」
「！」

ブウウウウン・・・

「・・・バ、バ、バカかお前は！　そういう意味の接点ではない・・・！
・・・第一、早すぎるだろ・・・！」
・・・あのう・・・分裂してるんですけど・・・。

そして、いつのまにかエルシィが虫取り網を持って
弱楠のところへ行っていた。

「・・・おいおい、まさか虫取り網で捕まえる気じゃ・・・」

・・・案の定エルシィは、虫取り網を振り回した。

「・・・えい！」

・・・うわあ！」

ドテッ！

正真正銘のアホだ、こいつは・・・。

見ろ、桂馬がため息ついてる。

「・・・と、とにかく・・・お前と私の精神的な接点だ・・・
・・・な、何か考えろ！」

「・・・うーん・・・」

ゲーマーと武道家の接点探すなんて、
エルシィに東大行けって言うてるのと同じだ。

「で、ゲームセンター」

「・・・では、これなんかどうです？」

桂馬と楠の前には、一台のゲーム台があった。

『エビエビパニック』って書いてあるな・・・。

「出てくるエビを叩くゲームか・・・。

なるほど・・・これなら武道とゲームの要素が組み合わさっている・・・。

「見事な接点だな！」

要はモグラ叩きとか、ワニ叩きとかと一緒に。

・・・ってか、どの辺が武道？

「では行くぞ！」

「は、はい・・・」

おお、楠気合入ってるな。

・・・でも、ゲームで桂馬に勝つなんて簡単じゃないぞ・・・。

俺が身をもって体験しているからな・・・。

ゲームスタート

『はっじめー！』という機械の声を合図にゲームが始まった。

楠はドンドンドンエビを叩いていく！

おお、これならいけるのでは！？

「悪いがこの勝負、武道の勝ちだ。

春日流は、獲物も使えるからな！」

ドスン！ ドスンドスン！

ドンドンドンドン叩いていく楠。

『しゅうりょー！』

そしてスコアは「728」

その下には「エビ大王」と書いてある。
これはいったか？

「フッフッフ、本日の一番のようだぞ、桂木！」

さて、いっぽう桂馬は・・・

「999」

・・・その下には「エビ神」と書いてある・・・
・・・さすがはゲーム界の神だな・・・

しばらくすると、また楠がゲームをやっていた。
桂馬も疲れたようで・・・

「・・・もう行きましようー・・・？」

「・・・イヤだ！ お前を抜くまで・・・やる！！」
・・・この人、負けず嫌いなあ・・・。

「エルシィ・・・あれ？ いない・・・」

「・・・ううー！ できませんーっ！」

・・・クレインゲームやってるよ・・・。
ホントにこいつ、悪魔かあ・・・？

くで、なぜか映画館く

・・・凍え死にそうな少年が名前を呼ぶ。

そして「豚」のパトラッシュが少年に寄り添う。
・・・あれ？

これって豚だったっけ？

なんか違う気がする・・・。

『パトラッシュ・・・お前、僕を探しに来てくれたんだね・・・』
『ブモオ』

・・・豚だったかなあ・・・？

『パトラッシュ・・・疲れたろ・・・？　僕も疲れたよ・・・』
『ブモオ』

・・・犬じゃなかったかなあ・・・？

『なんだか・・・とっても寒いんだ・・・』
『ブモオ』

・・・いや、間違いなく犬だったよなあ・・・？

そして、映画を見ている方たちの反応。

楠「軟弱なやつめ・・・寒さなど気合いだ！

気合いで乗り切れ！」

桂馬「・・・・・・・・・・」　↑ゲームしている。

エルシィ「うう・・・うつ・・・ううう・・・」　↑号泣している。

俺「・・・犬だったよなあ・・・絶対・・・」　↑どうも納得できないでいる。

くそしてく

・・・その後も、デートらしき行動を行った桂馬たちだったが、

いずれも、楠は分裂せず、そのまま一日が終わろうとしていた。

（公園）

「・・・出ませんねえ・・・」

「・・・ああ・・・」

「かなり軟弱なこと・・・したと思うんですが・・・」
確かに。

桂馬は言う。

「・・・やっぱり、デートじゃなかったのかなあ・・・」
所詮エルシイの案だしなあ。

しかし、楠は・・・

「いや・・・まだだ！」

あいつを追い出すまでは・・・私はやめない！」

「まだあきらめないぞ・・・何か・・・何かないのか・・・」
・・・あいつを押し出せる・・・
・・・究極に軟弱なこと・・・！」

「！」

楠は何かを発見したようだ。

「・・・か、桂木・・・あ、あれだ！！！」

楠が指差すほうを見る。
・・・そこには。

「もうなーに？ やめてよサミー☆」

「いいだろ？ キッキー★」

一組のカップルがいた。

そして二人で一つのソフトクリームを舐めていた。

・・・ぬおおおおおお！

見てるだけでムカつく！

なんだあのバカップルはああ！

あんな奴らはいっぺん死ねエエエツ！

ちなみに俺が怒ってるのは、作者は関係ないぞ！

作者が恋で悩んでるとか、ぜんぜん関係ないぞ！

俺の今の発言は作者の真意だなんて事はぜんぜんないぞ！

・・・ふう・・・落ち着いた・・・。

「・・・あ、あれをやるぞ・・・！」

↓数分後↓

二人はベンチに座り、一つのソフトクリームを見つめていた。

「・・・こ、これを二人で・・・」

「そ、そうだ・・・。並みの神経の人間ができることではない・・・！」

これぞ・・・軟弱の頂点・・・！」

ホントのことでも、ここまで言うとはドイナ・・・。

「・・・で、では・・・行くぞ・・・」

「・・・は、はい・・・」

しばらくの沈黙が続く・・。

そして・・・・・

ペロ・・・・。

ボヒユウウウウウ・・・・・
ボウウンッ！

出た！

しかも今回はハッキリと！

「・・・・や、やった！ はっきり分離したぞ！」

「・・・・お前の正体は分かっている・・・・。
・・・・捨てたはずの・・・・

女の私！」

「・・・勝負だ！」

・・・・そろそろ来る頃だ。

桂馬はいつもこういうときに言うんだ。

何て言うかって？
すぐに分かるさ。

「・・・どっちが勝つかは分からんが・・・

エンディングは見た・・・！」

ちなみに桂馬は・・・甘いものが苦手だ。

3 優勝劣敗・・・（後書き）

耕也「さて、いよいよ楠編ラストか」

作者「楠編の後・・・耕也が大変なことに・・・クククク・・・」

耕也「なんか怖いわ、お前・・・！」

4 一拳絡着……。(前書き)

作者「赤いキツネと緑のタヌキ」

耕也「な、なんか問題が発生しそうだからそれ以上はやめとけ。
てかいきなりどうした・・・？」

作者「俺の通ってる学校にそう呼ばれてるやつがいるんだよ」

耕也「ひでえ・・・」

作者「では、楠編ラストです！」

4 一拳絡着・・・。

二人の楠の闘いが始まったと同時に、俺とエルシィは草陰から出てきた。

「・・・どうするんだ桂馬・・・、二人を止めないと・・・。」
「冗談だろ。 あんな中に入ってみろ。」
間違はなく『死ぬ』ぞ」
「・・・確かに・・・。」

「じゃあどうすれば・・・。」

「あ、そーだ！」

エルシィが何かを思いついたようだ。

そして、機織り機はたおきで何かを織り始めた。

「一つ織っては神様のためー、二つ織っては・・・。」
何か歌いだしたぞ・・・。

隣で乱闘が行われているというのに、気楽なやつだ。

「神様！ 羽衣で戦闘服作りました！」

これなら爆弾に当たっても大丈夫です！ 多分！」

えええええ！？

機織り機で戦闘服を作ったとおーっ！？

いや、その・・・生地にもよるが・・・。

・・・機織り機なのに・・・明らかに生地が鉄製の戦闘服を作り
おった！

しかも、多分って！

そこ結構重要だよね！？

もちろん桂馬の返事は、

「いらん」

「ええええっ？」

「いや、そりゃそうだって・・・」

「そもそも、止める必要なんかない」

「え？　　どういことだ？」

「・・・決着を着けない限り、主将の心のスキマは埋まらない・・・」

・・・そして、二人の楠の闘いが始まった。

『・・・子供の時からずっと・・・私は我慢していた・・・』

・・・ずっと私は・・・男だった・・・！

・・・男でいるしか・・・なかった・・・！

・・・・・・もう・・・ウンザリだ！！』

「黙れ黙れ黙れええっ！」

楠は弱楠につかみかかる。

だがしかし、逆に弱楠に捕まってしまった。

うわ、あいつも強ええ・・・。

『武道なんてくそくらえ・・・！

今日から私が・・・本当の楠よ！』

「・・・く・・・っ、強い・・・！」

軟弱な私のくせに・・・！」

『・・・さあ・・・負けを認めなさい・・・！』

・・・どこぞのバトルマンガですか、これは・・・。

「負けるわけには・・・いかない・・・！」

私がしっかりしないと・・・春日流は・・・潰れる！

・・・終わってしまう！」

楠が言うと、弱楠は・・・

『あんな道場・・・潰れてしまええーっ！』
うわっ！

楠を投げ飛ばしたぞ！

な、なんつー闘いだ・・・。

「・・・桂馬。本当に止めなくて・・・。」

・・・また桂馬の姿はなかった。

何でいつもいないんだ？

つか、エルシイもないし。

すると、桂馬はいつの間にか楠の側にいた。

「苦戦してますね」

「！・・・う、うるさい！」

楠は桂馬を振り払う。

「よろしければ、勝つ方法を教えてあげましょうか？」

「・・・何？」

「しかも瞬殺」
マジで？

そんな超次元な必殺技が？

神だけにゴッ○ハ○ドとか使うのか？

「・・・い、いらん。余計な口出しをするな」
・・・弱楠が段々と迫る。

「・・・簡単ですよ・・・」

『・・・！』

「・・・！・・・な、ななな・・・何だこれは！」

桂馬は楠の頭に、きれいな、武道家のイメージとはかけ離れた花を付けた。

「そもそも闘う必要、あるんでしょうか。

いっそ・・・彼女を受け入れればいいんです。

女の子らしく、しかも強い・・・

かわいい武道家を目指しましょう！」

ドカアッ！！！！

うお、殴られた。

「・・・簡単に言うな・・・お前は武道を舐めてる！
チャラチャラしてて・・・強くなれるか！」

ドサアッ！！！！

投げ飛ばされた・・・！

さらに弱楠も・

『そうよ楠・こんなやつの中車に乗るな・

私は女の道を極める・・！

道場で過ごす時間はない！』

桂馬は髪を捕まれている。

痛そー・・・。

・・ていうか、あなたも楠ですよ？

「何かを極めるということは・・」

『何かを犠牲にすること・・』

・・なぜこういうときは息が合うんだろうか？
人間って不思議だなあ。

そして桂馬がいつものように
挑発する。

「なあんだ、両立できないのか。

偉そうなこと言ってるけど、大したことないな」

『「なあにいい・・！？」』

おっかねえー・・。

「！ う・・あ・・えと・・

よ、世の中には、強くてかわいいものもある・・。

例えば猫。 猫だって、鼠を狩る立派なハンターです！」
なるほど。

「・・人と猫は違うだろ！」

『そうよ！ 人と猫を一緒にするな！』

「いいえ！ 人だって、かわいくて強くなれる！
アレを見ろ！」

桂馬が指差す。

指差す先には、ジャングルジムの頂点に立つエルシイの姿が。

「神様ぁー！ 行きますよぉーっ！
ハッ！」

エルシイが飛び降りる。

「つおおりゃぁぁーっ！」
ドゴオオッ！

ビキビキビキイイイ・・・！！

・・・ハンパねえ・・・。

b y トータルテンボス 藤田

エルシイは自慢げに言う。

「すごいでしょーっ！ 羽衣戦闘服！」

「・・・も、もういい早くいけ。」

シッシッシ・・・」

「えええーっっ？」

予想を超える威力に桂馬も驚いたのだろうか。

でもこのままいても攻略の邪魔なので

ひとまず退散させることに。

「ハイ、ご迷惑かけましたぁー」
「ううううっ！」

俺はエルシイを連れて草陰へ戻った。

「・・・ばかばかしい・・・。

こんなおふざけに付き合うことが・・・そもそも無駄！」

「ふざけてなんかいない！」

「！」「！」

「何かを犠牲にして手に入れたものは・・・結局何かが欠けている・
・！」

・・・そもそもなぜ・・・猫が好きだったら弱くなるのですか・・・？
・・・もしかしたら、もっと強くなれるかもしれないのに・・・」

「自分の強さに・・・自分で限界を決めるなんて武道家じゃない！
あなたはもっと、大きな強さを追うべきです！ 主将！」

・・・。

いつもながら、こういうときの桂馬のことばは・・・身にしみる・・・。

「今日のこの『軟弱極まりないデート』も・・・主将にとってはまったくの無駄だったのですか？」

「・・・そんなの無駄に・・・『いや・・・』」

『無駄ではなかった・・・楽しかったよ・・・』

弱楠はそう言った。

「・・・お前、何言ってるんだ・・・。裏切る気か・・・！」

『裏切ってるじゃないよ・・・だってお前も、楽しかったはずだ。』

同じ・・・「私」なんだから・・・』

「・・・」

そして弱楠は桂馬の側に行く。

『・・・かわいくて、強い武道家か・・・いいな、それ』

『でも・・・まだまだ不器用なんだ・・・私たちは。』

・・・私は諦めるよ』

「・・・え？」

『今日一日で満足した。・・・ひとまずお前に譲るよ。』

・・・もし・・・お前が武道家として、充分に強くなったら・・・

・
女の私を呼んでくれ・・・』

「・・・ああ」

よし、これで駆け魂が出るか・・・？

『・・・最後に一つだけ・・・いいかな・・・』

「えっ・・・？」

弱楠は、楠の中へと戻る。

そして楠は桂馬の肩を掴む。

・・・どうやら、弱楠が操ってるようだな・・・。

「・・・！・・・な、何だ・・・体が・・・勝手に・・・！！」

桂馬と楠（操られている）の距離がどんどん近づく・・・。

『・・・思い出作りだよ・・・』

弱楠は言う。

「お前・・・何勝手なことやってんだよ・・・！」

「主将・・・死ぬ・・・死ぬう・・・！！」

「・・・あ・・・！」

桂馬は今にも死にそうにもがく。

・・・抵抗する楠に、弱楠は言う。

『桂木のこと・・・嫌いか・・・？』

「・・・！」

・ ・ ・そして、
・ ・ ・ ・桂馬と楠はキスをした。

ボヒユウウウウウツ！

「よし、出た！ 2期初めての駆け魂だ！」

「何のことですかー？」

「気にするな、いいから行け。逃げちまうぞ！」

「は、はい！」

そして、エルシィは無事、駆け魂を拘留した。

その後の楠の様子を見ると、
ちゃんと武道に勤しんでいるようだ。
・ ・ ・何か、道場に猫がいるけど・ ・ ・。
・ ・ ・とにかく、一件落着だな。

くそして屋上く

「・ ・ ・それにしてもびっくりしましたー。
人が分裂するなんて・ ・ ・」

「感心している場合か。
知ってたはずだろ？」

「あ、そういえば確かマニュアルに書いてあったような……
へーそうか、マニュアルに……
……え？ マニュアル……だと？」

「……マ、マニュアルなんてあったのか……？」

「ええ、駆け魂隊の！」
「早く言ええ！」

あるならもつと早く言えって話だ。
でもマニュアルはいいぞ。

「検索してみましょー！ えーつと……か……け……た……ま……
……」

……かけ玉汁……ネハンウズラの卵でおいしい料理……？」

……か、かけ玉汁……？」

「ああーっ！ ど、どうしようーっ！

ま、間違えて料理の本持ってきたーっ！」
「……はあ……」

……歩く悪夢だ、こいつは……」

「……残念だったな桂馬。 ま、謎は自分で確かめろってことだ」
「くそお……」

俺はこのとき思っても見なかっただろう……。

まさか……その言葉を

自分に言う羽目になろうとは……。

4 一拳絡着……。 (後書き)

〔雑談〕

作者「いやあ、人生に飽きた」

耕也「初っ端からスゲーこと言うなお前！」

作者「いやー、言葉に詰まったら言わない？ 飽きたって」

耕也「言わねえよ！ どんな人生だよ！」

作者「言うやつだっているんだよ！！ お前は黙ってろおお！！！！」

耕也「な……。なにがあったんだ……。？」

5 世界は犠牲で動いてる・・・（前書き）

作者「さて、ついに耕也が大変な目に・・・ククク・・・」

耕也「なんかお前、最近怖いぞ・・・何かあったのか・・・」

作者「・・・はあ・・・なんか・・・辛いわ・・・」

耕也「うおい！！ 思いっきりマジの声で言うな！！」

作者「どうせ生きててもいいことなんかないよな・・・」

耕也「だから口調がマジだって！！！！」

5 世界は犠牲で動いてる・・・

俺の名前は竹内耕也、舞島学園に通う高校2年生。

わけあって今は、悪魔のエルシィとともに桂木桂馬の家でくらしている。

・・・俺の自己紹介はここまでだ。

・・・なぜなら俺は今、とても自己紹介なんかできる状況なんかではないのだ・・・。

なぜかって？

フフ・・・それはな・・・。

いいか、聞いて驚くなよ・・・俺の方が驚いたんだからな・・・。

なぜか、俺の首に、首輪がついていたからだ。

・・・首輪っていったって、犬や猫やホワイトタイガー猫がつ

けてるような
首輪じゃない。

まあ、その辺に関しては第一期を読んでくれ。

・・・で、まあアレだ。朝、起きて、飯食って、
んで、歯を磨こうと洗面所へ行き、
鏡を見た。そのときに気づいたんだ。

「・・・地獄に確認してみたところですが・・・

確かに、耕也さんは誰かの協力者^{バディー}に登録されています」

「となると・・・この首輪はやはりボクやエルシイがつけてるのと

同じ首輪ってことか・・・」

うそだろ・・・マジかよ・・・。

誰か嘘だと言ってくれええ！

ヘルプミイイイイーッ！

「うるさいっ！」

・・・桂馬の母さんに怒鳴られてしまった。

くそ・・・ついちゃった以上は仕方ないな・・・。

だが・・・

「何で首輪がついたんだ？ 首輪って、契約をしないとつかないんだろ？」

「は、はい・・・そのはずなんですけど・・・」

第一、契約をしたとするなら、俺の協力者^{バディー}の悪魔はどこにいるんだ？
うーむ・・・。

「・・・」

「・・・桂馬、お前なんか妙に機嫌いいな・・・？」

「そうかい？ そんなことはないよ☆」

絶対機嫌いいな・・・。

もしや・・・

「お前、まさか身近に自分以外の被害者が出たもんだから
内心喜んでるんじゃないだろうな？」

「・・・な、なぜバレたんだ・・・？」

当たりか。

ていうか、そこは嘘でも「違う」って言えよ・・・。

結構、シヨック大きいんだから。

そのとき、上から何か声が聞こえた。

「遅れてすみませえええー！！！！んっ！

・・・きやあっ！」

「グエッ！」

上から降ってきた女の子は、桂馬を巻き込んで地面に不時着した。

「あいたた・・・この羽衣、まだ慣れないなあ・・・あ、もしや君
が竹内耕也？」

少女が桂馬の方を見ていったので、
俺は正直に答えた。

「いや、竹内耕也は俺だけど・・・」

「え？ ああ、こっちだったの？ いやあ、私ドジが多くて・・・」
・・・悪魔ってのは皆、こんなのばっかなのか・・・？

「では、改めて！ 私、『スロア・ライン・フェクシミリ』と言います！

えっと・・・駆け魂隊の・・・あ、駆け魂っていうのは・・・」

すかさず俺は答えた。

「知ってるよ、地獄から抜け出した悪人の魂、だろ？」

「・・・え？何で知ってるの？ もしや、超能力者・・・！？」

「安心しろ、それはない」

ひとまず、俺はこれまで起こった出来事（桂馬に）をスロアに話してみた。

「なるほど、だからいろいろ詳しくかったんだ」

「まあな」

「へえ・・・でもエルシイって・・・知ってるよ・・・」

地獄じゃ一番掃除が上手かった三等公務魔でしょー？」

「え・・・あ、はい」

「私も三等公務魔だったんだけど・・・掃除すらまともにできなくて・・・」

だから全然駆け魂隊にも選ばれなかったんだ・・・」

すると、桂馬が言った。

「・・・ひ、ひとまず話は・・・ボクの上から降りてからにしてくれないか・・・」

「あつ、ご、ごめんなさい！」

ってか、まだ上に乗ってたのね・・・。

（桂馬宅）

「スロア、ひとまず聞きたいことがある」

「何？」

俺は地獄の契約について聞いた。

「地獄の契約っていつの間にかされているものなのか？」

「え？ いやあ・・・確か、何らかの方法で協力者の候補パディーに伝えて・

・・・」

「・・・俺・・・連絡来てないんだけど・・・」

「え？ あれ・・・アドレス間違えたかな・・・」
アドレス？

「どういうことだ？」

桂馬がスロアに問う。

「ちゃんと竹内耕也のメールアドレスを調べて送ったんだけどなあ・
」

「・・・で、でも届いてないし、返事も出してないし・・・」

・・・ん？

すると、桂馬が言った。

「待て、エルシィ」

え？ エルシィ？

見ると、エルシィが逃げるように扉を開けて、今にも外へ出るというところだった。

「こっちに来い」

「えっと・・・神様・・・今から・・・えと・・・ケーキの材料を買いに・
・・・」

「いいから来い。」

ていうか、その理由ならなおさら来い」

エルシィはおずおずと桂馬の前に座った。

「耕也、携帯貸せ」

「お、おう・・・」

「・・・な、何？ 何なの、こいつ・・・」

突然のことに驚くスロア。

無理も無い、桂馬の洞察力を目の当たりにするのは初めてなんだからな。

俺の携帯をいじる桂馬はピタッと、指を止めた。

何かを見つけたのか。

「・・・エルシィ、これは何だ？」

俺も携帯を覗く。

「こ、これは・・・！」

そのメールにはこう書いてあった。

『竹内耕也へ』

すでに駆け魂隊の関係者と化している君に

駆け魂狩りを手伝ってほしい。

できるならメールを送ってくれ。

無理なら絶対にメールを送らないように。

ドクロウ・スカール』

「き、来てるじゃないか、メール！」

「ほら、だから言ったでしょ」

「そして・・・このメールに対する返信が・・・これだ」

『お断りいたします』

・・・あれ？

断るって書いてあるぞ・・・。

「これは・・・お前が返信したんだろ・・・？ エルシイ」

桂馬が問うと・・・

「・・・はい・・・」

ぬおおお！ こいつが犯人か！ ・・・でも・・・

「断るって書いてあるのに、なんで契約が結ばれたんだ？」

「その点については私もおかしいと思った」

桂馬は答える。

「このメールには、『契約をするならメールを送れ』と書いてあるな？」

ということとは、そのメールの内容がどんな内容であろうと、

メールさえ送ってしまえば、それは契約するというサインになる・

・というわけだ」

おおお・・・すごいな桂馬・・・天才だ！

そして、エルシイは俺に謝った。

「すみませんでした・・・きつと返事はNOだろうなと思って・・・

それでメールを・・・」

「まあ送っちゃったもんはしょうがねえや。

気にすんなよ」

「うう・・・すみません・・・」

「ところで、お前はエルシイみたいに舞島学園には来ないのか？」

「えっと・・・非常に言いづらいんだけど・・・私・・・正直、仕事の成績とかどうでもいいんだよね・・・」
何？

「だけど、仕事をやらなさすぎると首がもげちゃうから・・・死なない程度に仕事をこなす・・・みたいな・・・？」
・・・なんて・・・なんて適当な悪魔なんだ・・・。

悪魔って・・・こんなのばっかなの？
俺は自分の人生を呪った。

そして、早くも俺の出番が来ることになる・・・。

5 世界は犠牲で動いてる・・・（後書き）

耕也「はぁ・・・」

作者「はぁ・・・」

桂馬「馬鹿が二人で何を悩んでいるんだ？」

耕也「なんか・・・辛い・・・」

作者「お前なんか架空の悩みだろ、俺は現実世界の悩みなんだよ・・・」

桂馬「フン、現実リアルの悩みなんて、ゲームしてれば吹っ飛ぶさ」

作者「簡単に言うなぁー！！！！！！！！」

耕也「マジでこいつ怖い・・・」

桂馬「次回から、耕也の攻略がスタートするぞ」

6 とある少女の事情・・・（前書き）

作者「ついに耕也が攻略か・・・クククク・・・」

耕也「お前最近怖いわ！ 何かあったんか！？」

作者「大したことはない。 ホント・・・人生に絶望しただけだから・・・」

耕也「大したことだよ！ 何がどうなってそうだったんだよ！」

作者「サアネ、モウドウデモイイヤ・・・」

耕也「精神崩壊！！」

桂馬「これでしばらく休めるな」

6 とある少女の事情・・・

以前から気にはなっていた。
そして、今日・・・ついに来る。

『一瞬だけ・・・センサーが鳴った気がしたんです・・・』
確かエルシィはこう言ってたな・・・。
そして、

『次にセンサーが鳴ったら、そのときがサインですよ！』
とも言っていた。

確かめるのには・・・この状況は丁度いい。

俺はさっそく桂馬に持ちかけた。

「桂馬、今日あいつのところに行くぞ」

「・・・あいつ？」

あまみやまね
「雨宮真紀のところだ」

「・・・ああ、あの怪力女か・・・」

詳しくは第一期を読んでね。

「ボクはあいつだけは攻略せん」

「なんだよ、楠だって結構強かっただろ？」

「主将は違う。主将は力をコントロールできるが、

あの女は完全に制御不能状態だ！

あんな現実女^{リアル}、攻略できるか！」

う……。俺もそう思ったけど……。

「駆け魂がいる以上、放っておけないだろ！」

「……。ちっ、分かったよ……」

「エルシイも連れて来いよ」

「……もう一人の悪魔はいいのか？」

「スロアか？ あいつは仕事したくないんだとき」

「ふうん……。なんとうらやましい……」

おいおい……。

～放課後～

……。

「よし、つけるぞ」

……。

……。

……。お、止まった。

で……。かがんで……。

……。

「……。なんだまた靴紐か……」

「……。おい、もういいだろ？ ボクは帰りたい」

「いや、よくないから」

「まったく、ボクは現実^{リアル}には関わりたくないのに……

……。早く帰ってゲームがやりたいよ」

「今もやってんだろ？」

「モニターでやりたいんだ」
あっそーですか・・・。

・・・。

「また結べないらしい・・・」

「不器用な娘むすめですね・・・」

「はっきり言うね、エルシイ君・・・」
そして・・・。

「・・・もう・・・！　なんでよ・・・！」

彼女は腕をたたき付けた。

もちろん、軽く、だ。

・・・だが・・・

ドゴッ！

うお、ヒビ入った・・・。

「・・・も、もうイヤダ・・・ボクは帰る！」

「ま、待てって・・・」

そのときだった。

ドロドロドロドロドロ・・・

「！」

鳴った！

「センサーが反応した・・・」

「や、やっぱり気のせいじゃなかったんだ・・！
神様、さっそく攻略しましょう！」

エルシイは桂馬に持ちかける。
だが、桂馬はエルシイに言った。

「待て・・・ここは・・・」

「・・・耕也、お前がやれ」
・・・・・・・・・

「・・・はあああああっ!？」

「聞こえなかったのか？ お前がアイツの心のスキマを埋めるんだ」

「いやいやいや、何で!？ 何で俺!？」

「お前が一番、面識があるだろ？」

「くっ・・・」

「そーいやそーうだ・・・」

「でも、攻略の経験はお前のほうが・・」

「ボクは一刻も早くゲームがやりたいからムリだ」
言い切りやがった・・・。

「・・・くそお、乗りがかった船だ！」

「あーもう、じゃあ俺がやってやるよ！」
半分ヤケだった。

そして桂馬は・・

「ふー、これでしばらくゲームに勤しめる・・」

結局それが真の狙いか・・・。

てか、いつもやってただろ・・・！

くで

「えええ？ さっそく仕事おー？」

「仕方ないだろ・・・桂馬がそういつてきたんだから」

「・・・はあ・・・まあ・・・一回くらいは実践積んでおかないとだしね・・・」

やる気ねえなあ・・・同じ悪魔でも
エルシイとはなんか違うな・・・。

「・・・で、どうやって彼女の心のスキマを埋める気なの？」

「え？ どうやってって・・・？」

恋愛しかないだろ・・・？

「・・・もしかして知らない？」

・・・何をだ？ 俺はスロアに尋ねた。

「ハア・・・だから要は、心のスキマさえ埋めればいいんだから
方法はなんでもいいわけだよ」

「ふうん」

「で？ どうするの？」

・・・ここは・・・。

「・・・よし、俺も恋愛で行こう。

桂馬ので、見慣れてるし」

「な、なんて適当な理由でやる気なの・・・。
ま、まあ別に構わないけどね・・・」

「ただし、俺はパワポケ理論で行く！」

作者が「面倒だからもうパワポケに○は入れない」らしい。

「パ、パワポケ・・・？」

「そう、パワポケの彼女攻略部分を参考にする」

「そ、そんなので上手くいくの・・・？」

「絶対いける！ 多分！」

「どっちなの・・・？」

（攻略開始 舞島学園）

「雨宮真紀、2年B組の転校生・・・」

16歳、156cm、57kg・・・か・・・」

俺はエルシィ風に読み上げる。

・・・さて、パワポケ理論でいくと・・・

・・・見た感じあいつ不器用だったよな・・・

エルシィもそう言ってたし・・・。

「おー、やってるねえ」

「いや、まだ何もやってないから」

スロアが様子を見に来た。

「どう順調？」

「いや、だからまだ何もやってないから」

とりあえず・・・桂馬曰く・・・

『恋愛は出会いの数に比例する・・・』だったよな。

よし、ひとまずイベントを重ねていくか。

「で、次の日」

「・・・パワポケ理論・・・だど？」

「そう」

俺は、桂馬にプランを打ち明けていた。

「・・・やめとけ、いくらなんでも

あれは所詮『野球ゲーム』だ。ギャルゲーにはかなわない」

「えええええ？ 結構いい理論だと思うんだが・・・」

「フッ、なんと愚かな。パワポケの理論など、当てにならん。

だいたい、お前はもう少しエルシィを恨んだっていいんだぞ？」

「なんでだよ？」

「ボクが同じ目にあったら、まずあの悪魔を殺す」

なるほど・・・ん？

・・・いや、でもさ・・・。

「エルシィを殺したら、お前も死ぬんじゃないの？」

当然の疑問。

「・・・今日は木曜日か・・・放課後、ゲーム買いに行くか」

いつかと同じ方法でごまかしやがった・・・。

「そして教室」

・・・よし、ひとまず。

話しかけてみるか。

A・話しかける

B・話しかけない

・・・いや、なに考えてんだ作者。
今から話しかけるって言ってるの！

「よう」

俺は真紀に話しかけた。

「！・・・あ・・・え・・・と・・・」

・・・

「・・・た、竹内だけど・・・」

「・・・あ、そうそう竹内くんだ」

ハハ・・・初めて口利いたの俺なのにな・・・。

「えっと・・・」

・・・

・・・はい？

・・・いやいやいやいや、何か話そうぜ？

俺は『あの人』みたいにココロの声なんて聞こえねえよ？

「・・・い、いいお天気ですね」

「え・・・あ、そうだな・・・」

・・・話し辛ッ！！！！

しかも今、晴れてないし！

曇りだし！　曇天だし！

「・・・い、一時間目は数学です・・・」

「あ、そ、そうですか・・・」

つい敬語になるんだが・・・。

「・・・・・・・・い、いいお天気ですね」

「・・・・・・・・いや、だから曇りだって・・・・・・・・」

・・・・・・・・あーもう、イライラする！

40過ぎた頃からかな。

イライラする！

「そういえば、ま・・雨宮って成績はどれくらいなの？」

「・・・・・・・・えっと・・・・・・・・これくらいかな・・・・・・・・」

・・・・・・・・えと・・・・・・・・

「な、何してんの？」

「え・・・・・・・・？」

え・・・・・・・・？じゃねえし。

「いや、だから何で手を広げてるの？」

「え・・・・・・・・だって、どれくらいって・・・・・・・・」

・・・・・・・・あ、そ、そういうことですか・・・・・・・・」

なんてこった・・・・・・・・。

いったい何なんだこの娘は・・・・・・・・。

俺は誓った。

恋愛で攻略するのはやめよう！！！！

おそろくムリだろうけど！！！！

6 とある少女の事情・・・（後書き）

桂馬「ゲームキャラは架空の存在だ。

だがしかし存在しないものといって

侮辱することはよくない。

あのキャラがいい、このキャラがいいなんて区別はつけるな。

すべてのキャラに個性があるように

すべてのゲームにも個性があるのだから・・・」

エルシィ「私の個性はなんですか？」

作者「はぁ・・・」

耕也「ああ！ 作者が病んでいる！」

作者「ま、気にするでなイ。俺はなんとモ

なっていないカラナ」

耕也「語尾がカタカナになっているぞ・・・」

桂馬（こいつらが忙しい間は、ボクがいろいろ繋ぐんだろうな・・・）

7 とある彼女の失望・・・（前書き）

作者「あー・・・・・・・・くっそお・・・・・・・・」

耕也「最近のお前はネガティブ発言が多いから喋るな」

作者「まったく・・・・・・・・今日、俺はとんでもない後悔をしてしまった・・・・・・・・」

耕也「何かあったのか？」

作者「・・・・・・・・ハア・・・・・・・・」

耕也「・・・・・・・・もうお前、前書きにも後書きにも出てくんな」

7 とある彼女の失望・・・

〜で、二時間目の体育〜

くそお・また児玉が授業見るのかよ・・。
ちなみに児玉とは俺たちの英語の先生である。

「桂馬あ・・大丈夫か？」

「・・・フ・・・フフ・・・何を言っているんだ・・・？
ボクは・・・ゲーム世界の・・・か・・・み・・・」
バタン！

あーあ、倒れた・・。

ちなみに女子はあっちでやっているらしい。

くそ・なんで男子だけ児玉なんだ！

休むなよ、木村先生！！

「あああ……疲れた……桂馬、大丈夫かあ……？」

「・・・フ・・・ボクは・・・か・・・み・・・だぞ・・・
 こんなも・・・の・・・大した・・・ことは・・・」
 バッタアンツ！！！！

あーあ、死んだなこりゃ・・。

「……けい……い……ま……大丈……夫か……？」

「アハハハハハハハハハハ！！！！！！！」

ベリーグウーッド！！ アイ アム ア ペエンツ！！！！」
壊れたあ！！！！

これがランナーズハイってやつなのか・・・。

「ふう・・・やっと休憩かぁ・・・」

「ふう・・・やっとゆっくりゲームができる・・・」

お前はそればっかか。

・・・さて、真紀はどうしてるかな？

「・・・・・・」

・・・うつわぁ・・・靴紐むすんでるう・・・。

なぜ君は紐が結べないのだ・・・？

・・・頼むから地面だけは殴るなよ・・・。

～三時間目 現代国語～

さて・・・ちなみに二階堂の適当な席配置により、

真紀の席は俺と桂馬の間という、なんとも必然極まりない席位置で・・・。

・・・まあ、エルシィの斜め前ってことだ。

え？よく分からんだと？

「よし・・・このページの漢字を五分間、書き取りしておけ」

ああああああ・・・漢字の書き取りなんかだりいなぁ・・・。

「なあ桂馬？」

「フハハハハ・・・ボクは来たぞ・・・ゲームの世界に・・・！！！！」

お前はいいねえ・・・。

そして、隣の席の真紀を見る。

「・・・・・・」

（昼食）

ふう・・・ようやく昼食か。

お弁当を出すやつもいれば

外パンを買いに行くやつもいるし・・・

「にーさまぁー！ー！！ 食べてくださいー！！！！」

「いらん！！ 誰がお前の作った弁当なんか食べるかぁぁぁぁー！
ーっ！！！」

「ううううう、そんなぁぁー！！！」

食べてくださいよおおー！！！！！！」

・・・地獄のような光景の連中もいる・・・

よし、俺はオムそばパンでも買いに・・・
って、もう間に合わないか。

「じゃあない、今日は学食だな。 超高えけど・・・」

ん？ 真紀は弁当か。

・・・まあ、どうせ弁当のふたを開けられないとかそんなミス
を・・・

「・・・

・・・

・・・」

バ・・・バカな・・・！

べ、弁当を・・・鞆から出せないだと・・・！？

ふたを開けられないよりもひどいじゃないか！！！！

（学食）

・・・マジかよ・・・あれを攻略するのかぁ・・・。

「はぁ・・・」

「お、耕也じゃねえか！！」

「・・・」

「つ、ついにシカトですか・・・！？」

こいつは白川雄二。

・・・まあ、第一期を読んでいる人は分かると思うけど・・・。
俺の親友・・・残念ながら。

あと、根っからの「中川かのん」ファンだ。

「お前は、俺に話しかけるときはいつつもそれだな」

「ハハハ、オーイエ、ユアウェルカム」

別にお礼を言ったわけじゃないのだが・・・。

ま、こいつも意味が分かってて言ってる訳じゃないだろ、多分。

「つか、お前みた！？」

あの『鳴沢臨海ホール』でのかのんちゃんのライブ！

「・・・ま、まあ一応見たよ」

超近くで。

「すごかったよなあ」

「まあな、さすが星だ^{スター}よなあ・・・」

「すたー？ かのんちゃんはアイドルだぞ」

「どうでもいいよ・・・」

五時間目 英語

また兎玉あ・・？

もう嫌だあ
・
・
○

「んーふふ．．ではまたテストを返しますよー。

竹内耕也くん

「はい・・・」

な、やっただぞ！！

勉強の効果がでたあ！！

「桂木エルシィ」

「はい」

エルシイがテスト用紙を取りに行く。

「よ、エルシィ。何点だった？」

「えーと、私は12点でした・・」

フツ、勝った！

俺は29点だぜ！！

フハハハハ！ 赤点だけど勝った！

「次、桂木桂馬くん。桂木くーん。・・・桂木ーっ!!!!」

・チツ、また100点か。あいつは・・。

「雨宮真紀さん」

「はい・・」

!!!!!!!!!!!!

何!?

ま、真紀のやつ、100点だぞ・・・！

何てことなの！！

あんなに不器用なのに!!
不器用は関係ないけど。

〽六時間目 家庭科〽

「今日は調理実習だな」

「フン、料理は作るもんじゃない。
作ってもらうものだ」

「どーせゲームの話だろ」

「だから何だ？」

桂馬に何を言っても無駄だったか。

席で班を作っているの、俺と真紀と桂馬は同じ班だ。
あ、ついでに小阪も。

「桂馬、ゲームばっかしてないで手伝えよ」

「ボクは料理はしない」

「それは料理に限ったことじゃないだろ」

・ ・ ・
なんかエルシイがいる班の鍋が爆発したけど・ ・ ・
気にしない気にしない。

「じゃあ、これ二つ割つといて」

「・ ・ ・」

小阪は真紀に卵を二つ渡した。

・ ・ ・ ・ ・
卵!?

待て! こいつに卵を渡すなんて自爆行為・ ・ ・!!

ガシャン

・・・ものの見事にぶちまけやがった・・・。

「フン、とんだ現実リアル女だな」

「あんたは何かしたの？ オタメガ！」

「フツ、ボクは現実リアルに関わってやれるほど暇じゃない」
いや、思いつきり暇だろ。

ひとまず・・・データはそろった。

あとはこのデータから、心のスキマの原因を割り出すだけだが・・・。

「やっぱり、不器用 だよな・・・」

それしか考えられないし・・・。

・・・よし、明日からは本格的に行くぞ！

（桂馬宅）

「ええええ？ 何で私も行くのー？」

ブーブー文句をいうスロア。

「お前は羽衣を使って手伝ってくれりゃいいの。あとは俺がなんとかするから」

「・・・なんとかできるの？」

「分かん。でもやるしかないだろ」

（で、さらに次の日）

「よ、雨宮」

俺は真紀に話しかけた。

「あ・・・えっと・・・竹内くん」

「よし、覚えてたな」

これで覚えてなかったらぶん殴ってたぞ。 白川を。

「・・・ところで何してるんだ？」

「あ、これは・・・絵を書いてるんだ」

「絵・・・？」

「うん、妖精の絵」

「・・・妖怪の絵の間違いだろ・・・」

「こんなとこにまで不器用の影響が・・・」

「・・・ねえ竹内くん。」

「私って、不器用なのかな？」

「今さらぁ！！！？？」

「いや、今自覚したの！？」

「・・・とは思ったものの。」

「やっぱりそういうのに自覚はないよな。」

「・・・何でそう思うんだ？」

「・・・な、なんとなく・・・？」

「な・・・なんとなくだと・・・」

「く・・・パワポケのヒロインはこんな曖昧な理由でそんなことを言わないぞ・・・」

「・・・待てよ？」

「・・・不器用なんじゃね？」

「俺は思ったまま、言った。」

「・・・やっぱりそう思うか・・・」

「なんか、不器用というか、手先が器用じゃないんだよな」

「・・・それを不器用って言うんじゃない・・・」

「え？ そうなの・・・？」

「初めて知った・・・」

「・・・ふ・・・ふふ・・・」

「あ、笑ったな。なんか、笑ったところは初めて見た気がするよ」

「・・・そうかな・・・？」

そうそう。

「いつも悩んでるような感じだったし・・・

やっぱり人は笑顔のほうが似合ってるよな」

「・・・うん・・・そうだよね」

「不器用なところだって、見方によっては長所にもなるさ」

「本当？ 例えば？」

・・・えっと・・・・・・だから・・・・・・
・・・。。。

「と、とにかく長所にもなりうるんだよ」

「ふふ・・・そうだね・・・！」

・・・これを桂馬は5回もやったのか・・・。

桂馬ってやっぱりすごいのかな・・・？

攻略は終盤へ・・・。

7 とある彼女の失望・・・（後書き）

桂馬「ルビーとサファイアの原石は

まったくもって同じだ。

だが今の形が違うように

ギャルゲーの歴史もゲームによって違う。

共通点があるならそう・・・

どのギャルゲーも作者の愛が込められているところだ・・・」

エルシィ「私も愛を込めてケーキを作りましたよ！」

耕也「えー、前書きにて作者が減んだので、

ここからしばらく作者抜きでやっていきまーす」

桂馬「まったく、ボクは静かにゲームがしたいのに」

耕也「お前ホントにそればっかだな。 逆に怖いぞ」

桂馬「ゲームがあれば何だってできる」

耕也「ああ・・・そう・・・」

8 とある事件の解決・・・（前書き）

作者「お久しぶりだな」

耕也「出てくんなったろカス」

作者「お前作者に対して何てこと言うんだよ！」

耕也「はぁ、だって出てくるたびにこの景気を落としていくだけだろ」

作者「ハッハッハ、余は機嫌が良いぞよ」

耕也「誰だよ、お前！」

8 とある事件の解決・・・

〱桂馬宅〱

「よし、攻略は順調だな」

「ねえ？ 何で不器用か聞かれたときに、『不器用だ』って答えたの？

あんなこと言ったら逆効果になるんじゃない・・・」

尋ねてくるスロアに俺は答える。

「ここがギャルゲー理論との違いだ。ギャルゲーと違い、パワポケでは時に「相手を完全否定する選択肢」も必要になってくるんだ。

だからあえて、「不器用」だと言ったんだ」

「ふうん・・・そういうことかぁ・・・」

どうやらこれで納得したらしい。

〱で、さらにさらに次の日〱

その日から、俺たちはよく話すようになった。

「明日の一時間目って何だったっけ？」

「うーんと・・・あ、英語だ」

よく話すといっても

「部活って何入ってるの？」

「あー・・・えーと、入ってない・・・かな・・・」

それはもう他愛もない内容で

「この単語ってどういう意味なの？」

「俺に聞いたところで無駄だ。そこのゲーマーに聞きなさい」

結構続いた・・・。

（桂馬宅）

「・・・攻略は順調・・・だろう、多分」

「ん？　なんだ、お前まだ起きてるのか？」

「いや、お前も起きてんじゃん・・・」

「フッ、睡眠など取らなくてもボクは平気だ。」

「寝ている暇などあれば、ボクはすべてその時間をゲームに回す」

・・・へー・・・そうですか・・・。

こいつテストはいつも100点だったよな・・・。

・・・いつ勉強してるんだ・・・？

（ある日の舞島学園）

「・・・ねえ・・・私って人より少し不器用すぎじゃない・・・？」
真紀が話しかける。

・・・少しじゃないけどね・・・。

「・・・まあ、そうかもしれないな。

でもそういうところがあった方が良かったりするんだよ」

「うん・・・そうだけど・・・」

・・・あれ？

今までならこれで元気が出てたはずなのに。

「・・・やっぱり、靴紐も結べないなんて、

普通じゃないよ・・・」

「・・・」

俺もそう思う、とは言えないよな・・・さすがに。

「いや・・・でも・・・」

「・・・あ、ご、ごめんね・・・自分から話しかけてこんな・・・

・

じゃ、じゃあね・・・」

・・・真紀は走って行った・・・。

・・・これは・・・着実にイベントが進んでいる証拠・・・・・・・・・・と願
いたい。

あとは、このあとどうするか・・・。

（再び桂馬宅）

「……どうすれば、いいやら……。
……桂馬なら……どうしたんだろうか……。」

『順位ならとっくに一番とつてるよ……ボクの中で』

『それでも、君の笑顔が見たいんだ!!』

『君は君自身の力で、輝ける!』

『栞は今、本を守りたいのか？ それとも、外の世界からの逃げ場所を守りたいのか?』

『何かを犠牲にして手に入れたものは……結局何かが欠けている!』

「……」

上手いくかは分からないが……。

「……スロア、明日学校に来い」

「え？ 何で？」

「……明日、駆け魂を出す」

「？」

スロアは不思議そうな顔をしている。
どういふことかって？

まあ、桂馬みたいに言うところ……

エンディングが見えた、ってことさ。

〜で、舞島学園〜

俺は真紀に話しかける。

「よ、何かシヨボくれた顔してんな」

「あ、竹内くんか。」

「・・・ひょっとして、昨日言ってたこと、気にしてんのか？」

「
・
・
・
・
・
うん
・
・
」

やはりか。

「……よし、じゃあちよつと来いよ」

「え？
・
・
う、
うん
・
・」

俺は真紀をある場所へ呼ぶ。

場所というか
・
・
・
○

「……あれを見ろ！」

⋮

俺が指指したのは・・○

「うううううう！無理ですー！ー！できませんー！ー！ー！ー！ー！」

「うるさい、静かにしろ!!!」

「うううー！でもー！！」

「でもない！！
だいたい、お前はいつもうるさいんだよ！！！！

少しは何か仕事しろ！ ゲームのヒロインを見習え！！！」

「・・・えっと・・・あれが何か・・・?」

「あんな風に、とてもとても能天気に行き続けている方もいらっしゃるんだ。」

不器用なだけで悩まず、ああいう方みたいに
もっと気楽に行きがいはいんだよ」

「・・・だよ・・・」

え? 何だって・・・?

「・・・無理だよ・・・、私が気楽でいろって・・・
気楽でいたらこんなに悩んでない・・・!
気楽に生きていけないから悩んでるの・・・!!!!」

・・・真紀は走って行ってしまった。

・・・。

「あちゃー・・・失敗したんじゃないの?」
スロアが降りてきて俺に聞く。

「・・・いや、これでいい。」

今はあえて後を追いかけていないだけだ」

「パワポケ理論では、こういう鬱的なイベントは必須。」

いわばこのイベントこそ、エンディングへの必須フラグだ」

「・・・なんか、しゃべり方が桂木みたいになってない・・・?」

そう?

やはり知らずのうちに桂馬の影響を受けてしまっていたのか・・・。
・・・いや、今はそんなことどうでもいいんだよ。

そして、俺はスロアに言った。

「・・・決着は今夜だ・・・。」

今夜中には駆け魂をだしてやる」

「フーン、がんばれー」

「何言ってるんだ？ お前が勾留するんだろ？」

「え？ ・・・ああ、私が勾留するんだ・・・！！！」

頼むからしつかりしてくれ・・・

少なくともエルシィよりは・・・。

）・・・・・・・・）

さて、ここはどこでしょうか？

・・・というのは置いて、ここは真紀の家の前だ。

どうやって突き止めたかって？

スロア曰く、『企業秘密』だそうだ。

どいつもこいつも同じことを言いやがって・・・。

そして、真紀はまだ帰ってきていないらしい。

「そりゃそうだ。 まだ六時だし。

高校生なら帰ってなくてもおかしくはない」

「何を一人で言ってるの？」

「気にするな」

そして、しばらくした後、

「あ……」

「お……」

真紀が帰ってきた。

「遅かったな、何の部活にも入っていないお前が、
どうしてこんなに帰ってくるのが遅かったんだ？」

「……な、なんでも……ないよ……」

「ふうん……なんでもないのに、もう六時半だぞ？」

「……それは……」

「今日、五時間目から授業に出てなかったろ」

「……分かってたんだ」

「そりゃ、席が隣だからな」

「……授業にでて、どうせ上手く書けないし、

ページも間違えるし……教科書をまともに読むことすらできない
し……」

出たって無駄だって思ったから……」

自覚はあったのか……。

……俺は真紀に言った。

「要はただの現実逃避だろ？」
「！」

「事実じゃないか。この世の中がいやになったからほかのことに逃げ込んでるだけなんだろう？」
「・・・・・・・・・・」

「教科書を読めない？ 字が書けないだど？」
「・・・・・・・・そんなもの不器用でもなんでもない。
やるまえから諦めてるだけの・・・・・・・・ただの現実逃避だ！」
「というかそもそも誰でもできる！」

「！！！」

「ただお前が不器用のせいになっているだけだ・・」
「・・・・・・・・だって・・やれるって信じたところで
できるって言うの？」

私は誰にも相談しなかった・・。
こんなことで悩んでるなんてバカみたいだって思われたくなかったから・・。
でも・・・・・・・・

「信じれば必ずできる！」

「・・俺の友達に、ひどくこの現実の世界を嫌ってるやつがいる。
そいつは現実と関わることをすら嫌がっていた。
・・でもそいつは、今、限りなく、昔よりは確実に

現実の世界に前向きに向き合っている！」

「・・・そんなの・・・人それぞれだよ・・・
誰もが簡単にできるってわけじゃ・・・」

「簡単？」

「簡単に物事が解決すれば、問題にはならない。

人は誰しも、どうしようもない悩みを一つは抱えているもんなんだ。

陸上部だって、お金持ちだって、アイドルだって、
図書委員だって、武道家だって、悪魔だって、神だって！
そして俺も、みんな悩みを抱えている」

「人は悩みがあるから生きていけるんだ。
悩みがない人間なんて・・・ただの屍しかばねだよ・・・」

でも君は違う。君はちゃんと悩みを抱えている。
悩みを抱えて生きてる！」

「・・・でも、やっぱりだめだよ・・・。
不安だよ・・・もしその悩みが解決できなかったら・・・」

「・・・解決できなくてもいいじゃないか」

「悩みの解決するためにあるものじゃない。
ただ、悩む為だけにあるものだよ」

「・・・」

「悩んで、また悩んで、悩み抜けばいい」

「もし、これでも不安だっというなら・
俺がちゃんと手伝ってやる・」

「・・・・・本当に・・？」

真紀は俺に聞く。

「ああ」

「嘘じゃない・・？」

「最後まで手伝ってやる」

「・・・・・」

・・・・・分かった・・。

ありがとう」

そして・・・

俺と真紀はキスをした。

ボヒュウウウウウツ！！！！
出た！

「わ！ホントにでた！

えーっと・・・勾留ビンは・・・あつた！
えと・・・こ、勾留ーっ！！！！」

シュウウウウウツ・・・
ボムッ！！

「・・・ふう・・・勾留完了・・・！

あー、これ結構きついなあ・・・」

文句言うな、俺の方が数倍きついぞ。

～次の日～

「今日の雨宮は、授業中の発言が多かったな」

「え？ 何でお前が授業中の様子を？」

「フツ、ゲームをしながらでも、授業内容は入ってくるんだよ」
そうですか。

「それにしても耕也さんが駆け魂を出すなんて思ってませんでした
！」

「誰のせいでこうなったんだよ、誰の」

「う・・・うう・・・すみません・・・」

ドロドロドロドロド r・・・

「・・・ん？ 今、センサー鳴ったよな？」

「は、はい・・・確かに鳴りました・・・」

でもすぐに鳴り止んだな・
何だったんだ・？

その時、何やら上の方から声が・・。

「そこどいてー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

え？

「きやあああつ！！」

え え え え え え え ! ?

エルシイが中に浮かんだ!?

いや、もともと飛べるか・・。

見ると、エルシイは「ビンらしきもの」の中に入っていた。

そしてまた上の方から声が。

「もう、絶好のチャンスだったのに……邪魔しないでよ!!」

逆ギレかよ、絶対に俺たちは悪くないし、あとゲームやめろ桂馬。

またまた上の方から声が。

「
・
・
あれ？
エルシイじゃない」

え？
エルシイの知り合い？

そのとき、エルシイが叫んだ。

8 とある事件の解決・・・（後書き）

桂馬「現実リアルの女は分らない。

しかし、ゲームキャラの考えることは分かる。

ほら、君にも聞こえてくるだろう？

彼女たちの心の叫びが・・・」

エルシィ「分かりませんっ！」

作者「あー、何か機嫌がよろしいですよ俺」

耕也「逆に怖いから喋るな」

作者「何なんだよお前は」

耕也「知るか。大体、何であんな風に壊れてたんだ？」

作者「聞くでない。人間生きてりゃ辛いことだってある」

耕也「辛いことがあったのか・・・？」

9 地区長、来たれ・・・（前書き）

作者「あー気分がいい」

耕也「お前、この前とは打って変わってアレだな・・・」

作者「いや気分がいいんだよマジで」

耕也「何があったんだよ一体・・・」

作者「いろいろあったんだよ、うん」

耕也「s i g h・・・」

9 地区長、来たれ・・・

上を見ると、エルシイとは色違いの羽衣を身にまとった一人の少女・・・いや間違いなく悪魔だろう。てか、なんでエルシイがビンの中に入ってるんだ？

「おい、桂馬・・・あれ見ろよ」

「待て、ボクは忙しい」

いや、絶対忙しくないよね？
ゲームしてるし。もう慣れたけれども。

「勾留ビンの中に自分が入るなんて、お前授業でも同じことやってたわね」

マジで？

何をどうやってたらそのような事態に陥るの？

「悪魔同士はなかなか出会わないのに、それが同級生とはね」
同級生・・・エルシイの同級生か・・・。

「ハクアーーーーッ!!!!」

エルシィはその悪魔に飛びつく。

・・・だが

「離れて!」

「・・・きやああああー!!!!」

その悪魔はエルシィが入った勾留ビンを地面に・・・

お、落っことしやがったよこいつ!!

ヒドッ!!

ガァァンッ!!

あ、落ちてきた。

そして、その悪魔も降りてきた。

「私たちもう一人前の公務魔よ?

もう少しピリッとしたらどう?」

エルシィが、一人前の、公務魔ア?

・・・ないないないないない。

そんなことは天と地がひっくり返っても絶対はない。

そして、そんな話を聞いていなかったのか

エルシィはまたその悪魔に飛びついた。

「ハクアーーーー!!!!」

久しぶりだーーーー、ハクアーーーー!!!!」

「!!!!!!」

もう、成長してないなあ!」

「わーーーー、嬉しいなあ!!!!」

高等学校の卒業式以来だーーーー!!!!」

さ、300歳超えて中学校に通ってたのか・・・。

な、なんかすごい絵だな。

「あ、その羽衣！　ハクアも駆け魂隊なんだ！！！」
ふうん、やっぱいろいろ派遣されてるんだな。

「ちょ、ちょっと待って！　『も』じゃないわ」

・・・どういことだ？

その悪魔は腕に付けている輪・・・らしきものを見せて

「ほら、この腕章！　討伐隊極東支部 第32地区長、どうぼつたいきよくとうしぶ

ハクア・ド・ロット・ヘルミニウム！！

私、地区長なんだから！！」

「地区長ー！？　すごい！

ハクア、一等公務魔だもんね！！　いいな、いいなーっ！！」

「フフン、まあね」

なんだこいつら。

ていうか、エルシィに「プライド」という言葉はないのか。

あと、ゲームやめる桂馬。

そしてハクアが言う。

「握手してあげてもいいわよ」

「わー、地区長ありがとうございまーす！！」

何なんだこいつらは・・・。

漫才でもやりにきたのか？

なぜこのハクアとかいうやつは上から目線なんだ？

あと、ゲームやめる桂馬。

てか、俺と桂馬がさっきから会話からはずされてない？
おい作者、どういことだよ！！

「すごいなーハクアはー！ 卒業しても一等公務魔で、いきなり地区長だもん！」

・・・あれ？ ついに作者にも見放されたか、俺？

「それに比べて私は、成績悪くて・・・今でも三等公務魔・・・」

「ダメダメだったのは今に始まったことじゃなかったのか」

「ま、まあ・・・そういうことにもなりますね」

他にどういふことになると言うんだ・・・。

するとハクアが言う。

「全然すごくないわ。」

私には一番がフツーなんだから」

・・・なぜだろう。

今、ものすごい殺意が沸いたんだけど・・・？

「わー、かっこいいー！ 神様みたいー！！！」

ハクアは不思議そうに聞く。

「神様？」

「あ、そうだ、紹介するね」

エルシイは俺と桂馬を指差し、

「この人、神様！ 私の協力者バディなの！」

あ、この人もある悪魔の協力者バディで・・・」

「ふうん・・・お前、名前は？」

「あ？ えと、竹内耕也・・・」

「そう。握手してあげてもいいわよ」

「いや、別にいいです」

なぜ常に上から目線なんだ・・・。

「あの・・・ちなみにお前も300歳以上・・・なのか？」

「ええそうよ？ 何かおかしいことある？」

いや、何でもないっす。

「・・・でもう一人のほうだけど・・・

・・・エルシィ・・・お前、悪魔なのに神様が協力者バディなの？」

「すごい人なんだよー！ー！！！」

「エルシィよ、スゴイなんて言ったら大抵の人が勘違いするからやめろ。

確かにスゴイっちゃスゴイけど・・・」

そしてハクアは桂馬をしばらく観察するが・・・

「・・・なんだ、普通の人間じゃない。これがすごいのか・・・？」

『これ』って・・・

せめて『こいつ』って言ってあげろよ・・・

そして、またしても上から目線で・・・

「ま、いいわ。握手してあげてもいいわよ」

「お前、なんで常に上からなの？」

「！」

そのとき桂馬は突然立ち上がり、両手を上に掲げた。

その手にはPFPが・・・。

・・・なんかの儀式か、これ？

「！ な、なんなの！？」

「・・・くそ！ 電波が悪い！！」

・・・電波？

PFPを上に掲げる桂馬にエルシイが言う。

「あ、あの・・・神様・・・、私の同級生のハクア・・・」

「静かにしろ！！！」

・・・今、空から・・・イベントが降ってくる・・・！！」
「・・・空？」

俺たちはいっせいに空を見上げる。

するとハクアが言った。

「・・・前言撤回ね。ただの『イカれてる』人間じゃない」
「お前！ イカれてたら『ただの人間』じゃねえだろ！」

『ピコオン』

ん？

『うれしい！ 私の誕生日、覚えててくれたの！？』

「ふー、無事イベント回収！！」

てか、いい加減にゲームやめろ。

そして桂馬は勝手にキレだした。

「誕生日の12きっかりにネットに繋ぐイベントなんて作るなよ！」

学生ゲーマーを何だと思ってる！！」

最近のゲームはそんなイベントがあるのかい。

そりゃ、すごいねえー。

「・・・もうこの会社のゲームは買わん！！ 通常版しか」
あ、通常版は買うんだ。

そして今までは限定版と通常版を二つ買ってたんだ。
すると、ハクアがわらいだす。

「ツフ・・・た、確かにすごいね！」

「もう・・・神様のバカ・・・バカバカ・・・」

「桂馬はいつつもあんなだろ。スゴイなんて言ったお前が悪いぞ」

「えーーーーー！ スゴイですよーーーーっ！」

「駆け魂もう『5匹』出してますしーーーーー！！」

「！！！！！！」

エルシイがそう言った途端にハクアがすごい反応を見せた。

「え、あいつが・・・？ 駆け魂を5匹も出したの・・・？」

「ああそうだぜ。ホントに二ヶ月ちよいで

あんなに出しちまうんだもんな。ビックリしちまうよな」

ハクアは少し黙り込むとまた発した。

「・・・ああ、出したは出したけど勾留に失敗したとかね！

エルシイならやりかねないけど！」

・・・？

エルシイってそんなに信用ないの？

・・・ひとまず俺はハクアに真相を伝えた。

「いや、エルシイはちゃんと5匹とも勾留してるけど・・・」

「え・・・」

・・・そして深く黙り込んだハクアは
しばらくして、笑い出した。

「プ・・・アハハハ！　いいわよ二人でグルになって嘘つかなくとも！」

お前は0匹でもぜんっぜん不思議じゃないんだから！」

「うー！　本当なんだよー！　！」

エルシイってホントに信用ないなあ・・・。

こいつここに来る前に何かやらかしたのか・・・？

つか、グルになってまでウソはつかないだろ、普通は。

「二ヶ月で5匹はウソでも言いすぎよ！」

あくまじゅうくんしょう

それ悪魔重勲章がもらえるレベルじゃない！」

「え・・・？」

あのエルシイの表情が変わった・・・。

・・・なんだかよく分からんが・・・

とりあえず『スゴイこと』だったのは、俺でもすぐに分かった。

「ほ、ホントに・・・？」

「え・・・うん・・・」

・・・エルシイがすごいのはよく分かった。

・・・だが、俺はこの悪魔『ハクア』の態度に不信感を持っていた。
俺はハクアに聞いてみた。

「・・・ハクア、お前は何匹捕まえたんだ？」

「・・・え？　・・・わ、私・・・？」

「・・・そ、そうねえ・・・」

？

何を考える必要があるんだ？

捕まえた数を言えればいいだけだろうに・・・。

ますます俺の疑いが深くなる。

「・・・じゅ、10匹・・・かな」

「10匹ー!?　すごーい!!」

「・・・と、当然よ!」

「・・・本当か?」

「・・・も、もちろんよ!　当たり前じゃない!」

「・・・ひとまず、今はよそう・・・」

あと、忘れていたが・・・桂馬、ゲームをやめなさい。

そして不信感を持つ俺とは対象的にエルシィは尊敬の目で言った。

「10匹かぁ・・・じゃ、じゃあハクアは勲章二つだ!　やっぱ
りすごーい!!」

「えっ?　・・・」

そのとき、エルシィのセンサーが鳴った。

ドロドロドロドロドロドロ

・・・でもいつもと音が違うな。

『エルシィ、緊急の要件だ!』

「・・・ドクロウ室長?」

『そっちの方面に、駆け魂が1匹逃げた。

他の地区のバカが、心のスキマから追い出したのを

捕獲に失敗したのだ!』

その駆け魂は、隠れている間にかなり力を溜め込んでいる!

強い駆け魂だ、用心してかかるように!!』

・・・駆け魂が逃げ出した・・・か。

「おい、桂馬、駆け魂だぞ」

「聞いてたよ」

聞いてたんだ。

ゲームばっかしてるのによく聞こえるな。

「そういえば、一瞬だけセンサーが鳴りました。

あれは、駆け魂が通り過ぎた瞬間だったんです!!」

しかも強い駆け魂だって言ってたな・・・。

・・・ん？　そういえば、エルシィに連絡がきたのに、
どうしてハクアには連絡が来なかったんだ？

・・・ますます不信だな・・・。

「まったくこのバカが逃がしたのかしらね・・・追うわ！」
ハクアが飛び上がる。

「まだ近くにいる・・・ハクア！　一緒に行こう！」
「やだ」

「私、地区長よ？　ヒラの悪魔の力なんて必要ないわ」
そう言い残して、ハクアは飛んでいった。

「・・・か、神様、私たちも・・・」
「待て！　あと30分以内にまたネットに繋ぐイベントがある！
電波の悪いところには行かん!!」
なんて理由だ！

「うーっ！　っ、今日の神様嫌いーっ！　!!」
そしてエルシィも立ち去った。

「・・・桂馬・・・そろそろゲームはやめようぜ。駆け魂が逃げてる
んだぞ？」

「・・・ここは電波が悪い。移動するぞ」
「え？　どこに？」

「電波がいいところだ」
電波がいいところって・・・。

〽舞島学園 校舎内〽

「どこに行く気だよ？ 電波のいい場所っていつでもいろいろ・・・」

「まあ待て、・・・・・・静かにしろ」

「え？」

桂馬は指差す。

桂馬の指差す方を見ると、ハクアがいた。

「・・・ハクア？」

「何やってるんだろうな・・・」

あいつ、駆け魂を探してるんじゃないのか？

そしてハクアがつぶやく。

「あーあ・・・ヨーロッパの配属にしてほしかったなあ・・・。

私、西の生まれなのに。

・・・こんなはずじゃ・・・なかったのに・・・」

「手伝ってやろうか？」

桂馬はいつの間にかハクアの隣にいた。

「あ、お前、いつの間に・・・」

「お！　ここは電波がいいぞ！　ヒヤッホオオウツ！！！」

結局ゲームかよ！

ハクアが呆れた顔で見ているぞ！

そして桂馬が言う。

「この学校のことは詳しい。　ボクが駆け魂を捕まえる手助けをしてやる」

「・・・フ・・・アハハハハ！！」

人間に何ができるっていうの？」

「分からないぞ。　情報さえあれば」

「・・・誰に向かって言ってるの？」

ハクアは鎌を桂馬に突きつける。

ひとまず、俺はハクアをなだめる。

「まあまあ、ひとまず桂馬の話を聞けって、な？」

「・・・桂馬ってこいつのこと・・・？」

・・・ま、いいわ。　私、上級悪魔よ？

エルシイのところに帰りなさい！」

そんなハクアに桂馬は言った。

「安心しろ。

駆け魂を逃がしたのがお前だってことは、エルシイには言わない」

「!」

「…………え？」

「ど、どういうことだ桂馬？」

「今逃げている駆け魂はハクアが逃がしたんだ。
そしてそれを誰にも知られたくない」

「…………そうなのか、ハクア？」

俺はハクアに聞いた。

「…………な、何適当なことやってんのよ!」

ピコオオン
ん？

「ふうー、よし、無事イベント回収できた」
結構大事な話してると思っただけだね……

ねえ、ゲームやめない？

…………こうなったら。

バツ!

俺はPFPを取り上げた。

「うおっ!？ 何をする! 返せ!」

「話が終わったら返してやるよ」

「…………くそ…………じゃあ早めに話を済ませてやる」

そして、ついに桂馬の名推理が披露される。

「お前は、上司から連絡が来る前から何かを追っていた……。
でも、そのことをエルシィには言わなかった。」

連携したほうがスムーズに事が進むはずなのに・・」

「何か、不都合があったからだ」

おお、すごい名推理。

コ○ンくんみたいだな、メガネかけてるし。

「い、言わなかったのは・・・その・・・ご・・・」

「極秘の命令だった？」

その可能性は、さっきの連絡で消えたよ」

やっぱり犯人を追いつめてる見たいな感じだな。

ハクアも驚いている。

そのとき、何やら上のほうから声が。

「きゃあああああああああー！ー！ー！ー！！！！！！」

「・・・ん？　ブフォオッ！？」

ドスン！！

あーあ、桂馬に直撃した。

上から落ちてきたのはもちろん、エルシィだ。

「いてて・・・あ、あれ、神様？　何でここに・・・？」

「いいからどいてやれ。　桂馬が死ぬ」

「は、はい。　あ、ハクア！　駆け魂、あっちにはいなかったよ！
するとハクアはエルシィをあっちへ遠ざけた。」

「エ、エルシィこっちはいいから、別の校舎を見てきて！」
「え？」

「桂馬くん、大丈夫ですかー？」

「な、何でボクばかりがこんな目に・・・」
「ハハハ・・・」

「まあPFPは俺が持つてるから大丈夫だ。
よかったな、お前が持ってたらぶっ壊れてたぞ」

「・・・ケガの巧妙だろ・・・」
それ言われたら言い返せないし・・・。

「それにしても、あいかわらず着地ヘタね。
減速のコツ、何度も教えてあげたでしょ？」

あと、羽衣の目隠しオンにしてる？」
す、すげーなその羽衣。

そんな機能もあるのか・・・。

「あ、あはは・・・忘れてた・・・」

「昼飛ぶときは目隠ししないと、人の記憶に残るでしょ？
管理局の手間が増えるじゃない。出世に響くわよ」
か、管理局？

駆け魂隊つてもしかして、結構規模が大きいのか・・・？

「・・・ハクアは今も昔もすごいな・・・。

私なんて全然かなわないよ。

駆け魂だって、10匹も捕まえてるし・・・」

「！・・・ま、まあね・・・」

？

ここでまた俺のハクアに対する不信感が募る。

「完璧な悪魔だよ！！」

「・・・」

エルシィはハクアを心から尊敬しているのだろう。
それは目を見れば分かる。

だが、俺にはその目が、ハクアを苦しめているように見えた。
・・・で、またあのオタメガが余計な事を・・・。

「優等生衝撃の真事実、その耳寄りな情報をワンクリックでご提供
しましょう・・・」

エルシイに囁く。

ボカツ!!!

「グアッ!!!?」

俺は桂馬の頭を思いっきり殴った。

「何すんだ!」

「うるせえ! 今ちょっと感動的な感じだっただろうが! いらん
水差すな!」

しかもお前を助けてやったんだぞ!
ハクアが持っている鎌を今にも振り回そうとしていたからな!

「こ、耕也・・・さん・・・?」

「エルシイ! あんたはあっち搜して! 見つけたら通信!」

「う、うん・・・」

エルシイは飛んでいった。

「・・・・・・・・ふうー・・・」

「認めるんだな? 駆け魂逃がしたこと」

「・・・ちょ、ちょっと油断しただけよ・・・」

「お前をどうこうする気はない。」

ボクが置かれている状況が知りたいだけだ。

エルシイからの情報は、どうも頼りないからな」

まあ、エルシィはバカだからなあ・・・。
俺もバカなんだけど。

「ボクはいい刻も早く、このゲームから開放されたい。
それには情報が必要なんだ。」

エンディングにたどりつくための情報が・・・」

ひとまず、桂馬が次に何かを口走ったら
即、蹴る！

9 地区長、来たれ・・・（後書き）

桂馬「ロボットの戦闘も一種のゲームだ。

一歩間違えると、後には戻れない。

キャラの心を考え、しっかりと

攻略することが大事だと言うことが分かるか？」

エルシィ「あゝとくもくどくりく」

耕也「作者が怖い・・・」

作者「いやあ、けっこう気分がいいよ」

耕也「もうお前、それしか言っただけだな！」

桂馬「最近、作者いじりばかりだな」

10 地区長、地獄を語れ……。 (前書き)

作者「最近、いいことが続くんだよ★」

耕也「初めて作者の発言に★が使われた!!」

作者「愉快だ愉快★」

耕也「またついた!」

作者「マジでいいことばかりだよ★」

渡る世間は鬼ばかりっていうけど、あれはウソだね☆」

耕也「色まで使い分けた!!」

10 地区長、地獄を語れ・・・

〔舞島学園 中庭〕

「ここが、この学校で一番人通りが多い場所だな。
今は昼休み終わりで少ないけど」

「おい、ボクのPFP返せ」

「え？ ああ、わり。ハイ」

「まったく・・・」

ゲーム命かお前は！

「・・・ちょっと待って！」

ハクアが俺たちを止めた。

「・・・かすかに駆け魂の痕跡が残ってる・・・。ちょっと調べてみる
わね」

ハクアは羽衣を画面のように広げる。

はあ・・・すごいな・・・。

「・・・あ、画面に何か映ったぞ。スゲーな、iPadみたいだ」

「・・・エルシイはこんな技、使ってなかったな」

「あの子にはまだムリね」

「そりゃそうだな」

羽衣を伸ばすくらいしかできないだろ、エルシイには。
そしてハクアがグチる。

「まったく、悪魔を脅迫するなんて……なんて人間なの」
桂馬が言い返す。

「人間に脅迫されるなんて、なんて悪魔だ」
「！」

あーあ、見事に言い返されたな。

するとハクアは桂馬に鎌を突きつけた。

「お、おい！ 下手すりゃ死ぬって……」

「結構！ 駆け魂を捕まえたら、殺してやる！」

「それはできない」

「おい、いいのか余裕こいてて？」

「お前、今、命の危機が迫ってるんだぞ？」

「問題ない。ボクが死ぬとエルシイも死ぬ。

お前は親友を殺すようなやつじゃない」

なるほど、そういうことか。

「あ、あんなの別に親友じゃない！」

ここまでしといてよく言うな。

「ほー。親しくもないやつに、減速のコツを何度も教えるのか」
ドガッ！

「ボヘッ！！」

あ、鎌で殴られた。

……いや、鎌って！ 結構痛いんじゃない？

「わ、私、お前キライ！ 握手してあげないわ！」
「いらん」

お前と握手して何か得があるならやってあげてもいいが。

「なんでお前、常に上からなんだ？」

「何か文句あるの？」

ハクアがさらりと、鎌を抱えて言ったので・・・

俺は

「・・・いえ」

と答えるほかなかった。

そしてハクアが歩き出した。

「お、おい。 駆け魂の痕跡は？」

「なかったわ。 次行くわよ」

「勝手なやつだなあ・・・」

「下手なこと言うともた殴られるぞ？」

冗談抜きで。

「なあ、もう一度心のスキマに逃げてるんじゃないのか」

「それはないと思う。 今回はだいぶ育ってるから体に合うスキマがないもの。」

早く捕まえないと、力をつけてて危ないわ・・・」

危ない？

「危ないわけではないだろう？」

桂馬が言った。

「駆け魂は悪人の魂だってエルシイはいつてたぞ。

力をつけてても所詮は人間・・・お前ら悪魔なら・・・」

「違うわ」

ハクアは桂馬の言葉を遮り、言った。

「駆け魂は、『悪魔にとっての悪人』・

悪魔の魂なの・・・」

「私たちとは違う・・・本物の悪魔・・・」
本物の・・・？

エルシィたちは本物じゃないってことか？
いや、そういうことじゃないのか・・・。

「え、何？　じゃあお前らは偽者ってことか？
なんだ。　通りで悪魔っぽくないと思っただぜ」
「そういうことじゃないの！　いい？」

そしてハクアは、地獄について語り始めた。
「古いにしえの地獄・・・人の悪を育て、その邪よこしまな魂を糧とする悪魔・・・
かつて地獄はそんな悪魔たちの住処だった・・・。　しかしそれを良しとしないものがいた・・・

「違う」悪魔たち・・・。
彼らは古い悪魔を封印追放し・・・新しい地獄を作った・・・。
理性と秩序が守られる地獄・・・私たち「新しい悪魔」の時代
がやってきた・・・」

「うーん・・・なんか難しい話だ。
古くても新しくても悪魔は悪魔だろ？　なあ桂馬？」

ピコ、ピコ・・・

ゲ、ゲームしとる・・・!

「同じ悪魔なんかじゃないわ・・・」

力の差もあったし・・・それにやつらは惨忍すぎるもの・・・」

「力の差・・・?　じゃあどうやって古い悪魔を封印したんだよ?」

「さあ・・・それはちよつと・・・」

俺たちがそう話していると、桂馬が言った。

「・・・だが、今の話で基本設定はわかったぞ」

「マジでかよ?　き、基本設定・・・って・・・?」

「・・・何分かった気になってるの?」

ここからが本題よ。　それでその駆け魂っていう・・・」

「要するに・・・」

復活を画策する古い悪魔の魂、それが駆け魂だろ」

「えっ・・・」

桂馬はなにか風船的なものをつかい、説明し始めた。

「地獄を抜け出した悪魔は、まだ弱いし肉体も持ってない。　そこで人間の女を使う」

「ほうほう」

「古い悪魔の食料は負のエネルギーだ。　だから心のスキマに隠れる」

「お前本当に今日はコ○ンくんみたいだな」

「心のスキマの負のパワーで駆け魂は育ち・・・」

そして、それを引っ張りだし、勾留するのがエルシイたち駆け魂隊、というわけだ」

「おおおおお」

俺は桂馬に惜しめない拍手を送った。
だって本当にスゲーもん。

「・・・知ってたの!? エルシィから聞いてたのね!」

「聞いてないけど、今までのイベントとお前の話を合わせるところなるだろ。意外と簡単な設定だな」

「スゲーなお前は。で、最後に隠れた女の子として転生するってわけか」

「そういうことになるな。・・・これでまた、一つ説明がつく・・・」

かのんの透明化・・・
栞しおりの並外れた読書力・・・

そして楠主将の分裂・・・今考えれば、あれは悪魔の力だったのかもしれない・・・」

「それはまだ悪魔が弱いレベルの話ね。
逆に人間が悪魔の力を引き出してるのよ」

「悪魔の力が強くなったらどうなるんだ?」

「そうね・・・普通はそうなる前に勾留するんだけど、駆け魂が実体化するわ」

「実体化・・・? つまりどういうことだ?」

「え・・・? そ・・・それは・・・」

・・・。

「怪しいな。お前、ホントに優等生『だった』のか?」

俺はあえてそう聞いたが、

「・・・」

返事はなかった。

そしてハクアは俺と桂馬に言う。

「野蛮な時代はもう終わったの。」

「私たち新悪魔は知的で理性的な存在なんだから!!」

「なるほど・・・」

「どおりでエルシィのキャラが悪魔として弱いわけだな」

「あ、あの子を私たちの代表として見ないでよ？」

さ、分かったでしょ。今このあたりには危険な悪魔がうろついているの」

「お前が逃がした悪魔だろ」

ドゴッ!!

「ブハアッ!!!」

野蛮な時代は終わったんじゃないのか・・・？

というか、今回の桂馬の殴られ率高すぎだろ！

俺も一回殴ったけどさ！

「負のエネルギーがある場所に行けばいいんだよね？」

「うーん・・・負のエネルギーか・・・」

＼野球部 グラウンド＼

・・・。

よわっ!!!!!!

ここの野球部よわっ!!!!!!

もうすでに100点差以上ついているし!!

「うちの野球部はいつも負のオーラが漂っているぞ」

「・・・ただ弱いだけじゃない・・・」

「なあ、これってワールドゲームなんじゃ・・・」

「それに関してはやんやん言うもんじゃない」
「は、はあ・・・」

（校舎裏）

「あーん？ 何見てんだ、殺すぞ？」
「うわ、いつかの不良だ。」

あの時はブザマだったなあ・・・プツ・・・
おっとつい笑ってしまった。

「こいつら単に負の存在なだけよ。」

エネルギーは大したことないわ」

お前今すごく失礼なことを言いましたよね！？
俺も人のことは言えないが！

（2年B組）

「お、耕也。 どうしたんだよ？」

「・・・お前も負の存在なだけだな」

「・・・え？ どういうことだよ？」

白川は俺にとって負の存在以外の何でもない。

「いないわねえ・・・どこ行っちゃったのよ・・・駆け魂のやつ・・・」

「まあ、あいつらも捕まりたくはないだろうしなあ」
「捕まってくれないと困るのよ！」

「・・・なあ、負のエネルギーは、生きてる人間じゃなくてもいいのか？」

「・・・え、ええ・・・まあ・・・」
「・・・」

「・・・ここは？」

「劇場だよ。元々、墓地とか古戦場とかで・・・」

「ふうん・・・なんか肝試しとかで使えそうだな。オバケとか出そうだし」

「オバケってまた古風ねえ・・・居やしないわよ、そんな漠然としたもの」

悪魔に言われりゃ世話ないな。

俺たちは劇場に入る。

「・・・い、言われると多少不気味ね・・・」

「意外と怖がってるじゃねえかよ」

ドロドロドロドロドロ・・・

ハクアのセンサーが反応している。

エルシイの音と違うな・・・。

・・・センサーの音って、悪魔によって違うのか？

・・・今度、スロアのも聞いてみるか。

「反応がある・・・いるかもしれない・・・」

ここからは油断できないわ！ 離れずについてきなさい！」

「じゃ、ボクはこれで」

うおい！？

帰るのかよ！？

「え、ちよつ、ちよつと待って・・・！ 何で帰っちゃうのよ・・・」

「ボクがいたって仕方ないだろ？ あとはお前の仕事だ」
確かに。

「そ、そりゃそうだけど・・・あ、ホラ、私この建物の構造とかよく知らないし・・・」
・・・ここだ。

俺はあえて言ってみた。

「まあそんなの大した問題じゃないだろ。」

「ハクアはもう『10匹も駆け魂を捕まえてる』んだからな」
「そういうことだ。 じゃ、ボクはこれで・・・」

「ま、待って・・・あ、あの・・・」

「・・・・・・・・捕まえてないの」

「・・・・・・・・私、駆け魂1匹も捕まえてないのよ!!」
・・・・・・・・やはりか。

「他のみんなは捕まえてる・・・あのエルシィだって・・・
なのに私・・・何もできてない・・・」

「学校じゃできたの・・・・・・・・なのに・・・・・・・・」

「何もかも上手くいく人間なんていないんだよ。

いや、人間じゃないか・・・。

とにかく、今のお前はただ現実から逃げてるだけだ」

「・・・う、うるさい・・・！」

その時。

ハクアのセンサーから反応が・・・。

『ハクアーー！ 大変だよ！ 劇場で人が・・・、ハクア！ 早く来てーっ！！！！』

ハクアのセンサーからだけでなく、その扉の向こうからもエルシイの声が聞こえた。

間違いない、駆け魂はすぐそこにいる。

「桂馬、ハクア、エルシイのところへ行くぞ！」

「でも・・・駆け魂が・・・」

「でもない！ エルシイが危ないぞ！

どちらにせよ駆け魂を捕まえに行かないといけないんだからな！」

バタン！

「エルシイ！！」

「・・・ハクア！」

俺たちは駆け魂がいるであろう場所に来た。
そして・・・俺たちが見た光景は・・・

たぐさんの人が倒れていて・・・
その上には・・・

見たこともない、巨大な駆け魂がいる光景だった・・・。

10 地区長、地獄を語れ……。 (後書き)

作者「俺が後書きに戻ってきたよ★」

耕也「いや、前からいただろ」

作者「はっはっはっはっはっはっは☆」

耕也「うるさいなア、何があったんだよ」

作者「お前なんぞに言うか、カス★」

耕也「自分の作品のキャラに向かって何言ってるんだお前!!」

桂馬「次回、ハクア編完結だぞ」

11 地区長、誇りを取り戻せ・・・。

「こいつが・・・ハクアが逃がした駆け魂か・・・」
「・・・デカいな・・・」
今まで見た駆け魂よりデカいぞ・・・。

エルシィはハクアに言う。

「ハクア・・・この駆け魂、顔がある・・・。
魂^{レベル}度3じゃないかな・・・。」

「駆け魂ってレベルがあるのか？」

「はい・・・あれ、耕也さん？ 何でハクアと一緒に・・・？」

「細かいことは後でいい。それよりハクア、どうするんだ？」

「・・・やるしかないでしょ！ 勾留ビン！！」

ハクアが手を上に掲げると、そこに勾留ビンが現れた。

そして、駆け魂を吸い始めた。

「すごい、さすがハクア！」

「フン、まあね」

「油断するなよ」

のんきなもんだ。 さっきまでおびえてたのに。

まあ、でもこれならいけるかな。

俺がこんなことを考えているときだった。

カッ

！ 駆け魂の目が開いた・・・。

『つかまらないぞー・・・ つかまらないぞー・・・』
ハクアやエルシィを気絶していたはずの生徒が襲う。

・・・ってええ？ 俺もかよ！？
なんで俺ってこういうときに巻き込まれるんだよ！？

「・・・か、駆け魂だわ！ 駆け魂が、みんなの心のスキマを使
って操ってるのよ！」

「原因が分かっているならどうにかしろよ！」
「ムリ言わないで！ こんな数どうしようもないわよ！」

くそう、これじゃ身動きとれん！
・・・あれ？ そういえば桂馬は？

見ると、桂馬は地面に倒れていた。

「ボクは、無関係ですよー」
まさかの被害者のフリ！？
しかも結局踏まれてるし！

「・・・ハクア・・・どうすればみんなを元に戻せるかな・・・」
「・・・決まってるじゃない・・・、駆け魂を勾留すれば、元に戻るわ
よ！ エルシィ、駆け魂を抑えて！」

そして、エルシィは人を手で抑えていた。

「ハクアー、抑えたよー・・・、今のうちに、駆け魂を・・・」
「バカ！ 手で抑えても追いつかないでしょ！ 羽衣で一気に抑え

込みなさいよ!」

「ええーっ! こんなにたくさんの標的ターゲットを抑えるの・
私、まだできないよーっ!」

「・・・なんでよーっ!」

今のなんでは完全に逆ギレじゃね?

って、今はそんなこと言ってる場合じゃなかった。

・・・そうだ!

「スロアに応援を頼んだらどうだ?」

「え・・・? スロアって何・・・?」

「俺の協力者バディだよ。どうだ、エルシィ!?

「・・・ダメです・・・繋がりません!」

くそ・・・ダメか・・・。

じゃあどうすれば・・・。

ガタガタガタガタ・・・

あ、駆け魂が・・・

ギョルルルルルッ・・・

シュオオオ・・・。

・・・に、逃げたか・・・。

「・・・何やってんの! 羽衣の複数制御なんて、初歩中の初歩で
しょー!」

「ご、ごめん・・・」

「ならお前が一人で抑えればよかったんじゃないのか?

エルシィの実力は知っていただろうし・・・」

「言われなくても一人でやるわよ。 エルシィの助けなんて、い
らないわ」

「あ、おい待てよ・・・!」

ハクアは駆け魂を追いかけようとする・・・
だが桂馬が言う。

「一人じゃまた・・・失敗するぞ・・・」

「!」

おい、それは禁句・・・。

「エルシィと行け。こいつはもう、駆け魂を5匹も捕まえている。
これは本当の話だ」

「・・・またその話? そんなのありえないわ! エルシィは羽衣も
ロクに使えない落ちこぼれなのよ!

私のほうができたのよ・・・優秀だったの・・・学校じゃ・・・」

「また学校か? 今のお前は上級悪魔なんだろう?

一人でできないことだって、二人でなら・・・」

「・・・!!!!!!」

「エルシィなんかの助けがいると思う!? 一人で十分よ!!」

ハクアは飛び去ってしまった・・・。

「おい! 待てよ! ...エルシィ、あいつと一緒に・・・」

ゴチイン!!

「グワァ!!」

バタリ。

桂馬がエルシィにホウキで殴られた。

・・・こいつ、今日殴られすぎだろ・・・。

「どーして神様たち、ハクアと一緒にいるんですかー！私にはいつも冷たいのにー！ー！ー！」

「あ、アレにはいろいろと事情が……」

・・それより、早くハクアと行け！」

「どーせ足手まといですよー、私なんか……」

あーあ、スネたわ。

「ブッブー……」

だいじょーぶですよー、ハクアは優秀だから一人で……」
消防車の絵を描きながらスネるエルシィ。

子供か、こいつは。

「いーから来い！ 耕也、行くぞ！」

「お、おう」

俺は、エルシィを引っ張りながら歩く桂馬の後を追った。

く 劇場 屋根の上く

いるとしたらこの辺かも……。

あ……。

「桂馬、あれじゃないか……？」

「……ああ、あれだな」

そこにはハクアがいた。

「おい、エルシィを連れてきたぞ。 駆け魂はどこだ？」

「……」

・・反応しない……？」

「おい、話、聞いているのか？」

「・・・誰ダ、オ前？」

「！！！！」

「ジャマヲスルナアーーーーッ！！！！」

ハクアは思い切り鎌を振り回した。

ジャキィイン！！

・見ると、鎌の先に桂馬が引っかかっていた・・・。

「ハ、ハクア・・・操られてるのか？」

「悪魔のくせに、心のスキマ使われてどーする・・・」

「・・・神様どーしましよーーーー！！！！」

「たまには自分で考えろーーーー！！！！」

「え、えっと・・・駆け魂に操られてるんだから・・・と、とりあえず勾留を・・・」

エルシィは勾留ビンを取り出す。が。

「きゃあああああ、やめてー！！放してくださいーーーーい！！！！」

「あっさり取られちまったな・・・」

しかしどうすればいいんだ？

「神様ーーーー、ハクアと生徒さんを相手しながら駆け魂を捕まえるなんてムリですーーーー！！」

「落ち着け！ お前が今、相手をしなきゃいけないのは・・・たった一人、

ハクアだ！」

「ハクアは今、悩んでいる。その気持ちを駆け魂に利用されていくんだ。

・・・ハクアの心のスキマを・・・埋めるんだ！！」

「ハクアの・・・？ でもどうすれば・・・」

「こういうときはひとまず因数分解だ！」

「い、いんすーぶんかい・・・ですか・・・？」

その時、桂馬が・・・

ボウツ！！

「ワチャチャチャチャ！！！！！！！！！！」
も、燃えた！！

「お、おいハクア！ 桂馬が燃えてるって！」

「私に触るな・・・私に近づくな・・・」

だめだ、完全に操られてる・・・！

「・・・ハクアーーっ、どうしちゃったのー！？

駆け魂に操られるなんて、ハクアらしくないよーーっ！！！！」

・・・。。。

「気安く言わないでよ・・・」

「・・・え？」

「気安く言わないでよ!!」

そのために・・・どれだけ勉強してたと思ってるの・・・!?
努力してた・・・努力してたのよ!!

でも・・・少しも役に立たない・・・
学校の勉強がどれだけできたって・・・

自分が逃がした駆け魂を・・・捕まえることもできない・・・」

「!!」

ついに言ったか・・・。

「・・・ハクアが・・・ハクアがこの駆け魂を・・・？」

「・・・エルシイになんか・・・会いたくなかった・・・。

誰にも、会いたくなかった・・・。

私なんか・・・なんにもできやしない・・・。」

悪魔にもやっぱり悩みはあったのか・・・。

そりゃそうか・・・。

『悩みがない人間なんていない』もんな・・・。

・・・。

「え・・・な、何するの! ハクア・・・やめてよ・・・!」

気がつくと、エルシイの周りの人間がエルシイを抑えている。

「し、しまった・・・くそ・・・でも身動きがとれない・・・!」

助けに行こうにも、身動きがとれない!

どうすれば・・・。

「エルシィ、どうにかできないのか！ お前しか知らないハクアの内面とか！」

「うーっ、そんなの・・・」

「……もう取り戻せない……。私は……。おしまいよーっ！……………！」

ジャキインツ!!!!

ハクアは鎌を振る・・・。

からうじて、エルシイは無事だったようだ・・・。

・ ・ ・そして、エルシイは言った。

「大丈夫だよ。」

「……………何が……………何が大丈夫なのよ……………!!!!!!」

バツ
・
・
・
!!

エルシイがハクアに飛びつく。

「・ ・ 私の中では、ハクアはすごい悪魔だよ！」

ハクアが羽衣の使い方を教えてくれたから、こうして飛べる！

ハクアをお手本にして・・・ハクアのマネをして・・・私、一人前になれたんだよ・・・！

だから・もしハクアに何があっても・

ハクアがすごいってこと、私死ぬまで信じてる・・・！

だから・・・大丈夫だよ・・・」

「・・・ガツカリよ・・・」
「！」

シュウウウウ・・・

「エルシィに励まされるなんて・・・私、本当にゼロに戻ったのね・・・。」

「・・・でも、少し身軽になれた・・・」

「・・・ハクア・・・元に戻ったーーーー！！！！」

飛びついてくるエルシィをハクアは片手で止めた。

「て、手間かけさせたわね、エルシィ！」

「さあ・・・さっさと片付けましょう！！！」

「うん！」

「でもなあ・・・下手するとさっきの二の舞だぞ？ どうする気だ？」

「大丈夫よ、さっきとは逆で行くわ」

「え？」

「私が羽衣で抑えるから、今度はエルシィが駆け魂を吸って！」

「え・・・私が？」

「お前の方が慣れてるわ・・・。」

い、言ってなかったけど・・・私・・・駆け魂・・・まだ1匹も捕まえてないのよ・・・」

「・・・・・・」

ハクアが羽衣で人を抑え、そこをエルシイが通りぬける。
このままならいけそうだ。

・・・あれ？ 桂馬は？

「ボクは無関係ですよー」

まだやってたよ、被害者のフリ！

・・・ん？ いや、今回は本当に被害者か・・・？
でも結局、踏まれてるけどな・・・。

その時、エルシイが勾留ビンを落とす。

「あ」

「おい！」

勾留ビンが落ちてゆく。

「エルシイ、羽衣！」

「え・・・？ あ、そっか・・・！・・・えい！」

エルシイは落としたビンを、上手く羽衣でキャッチした。

そして、エルシイは人の大群をくぐり抜け、ついに駆け魂との一騎打ちに入る・・・。

・・・あれ？

こんなバトルマンガっぽい感じだったっけ？

ビシュウウウウ！！

駆け魂がエルシイを捕まえに行く。
そして・・・

ギュルルルルル・・・

「・・・うええー！ー！いつ！！」

シュウウウ・・・

ボムッ！！

お・・・やった・・・。

「駆け魂勾留ー！っ！！！」

「ホントに私がもらっていいの？ 捕まえたのエルシイじゃない」

「ううんっ、それハクアのだよっ！ もともとスキマから追い出したのはハクアだもん！」

「そりゃそうか。 ていうか、よくあんな心のスキマから追い出したな」

「まあ、それなりに・・・ね。

・・・これが私の初めての成果か・・・あーあ、もっと華麗に捕まえる予定だったのに・・・」

「これからこれからっ！！！」

「エルシイの方が上に見えるな・・・」

「・・・おい」

どこからか桂馬の声が。

見ると、ハクアの羽衣に捕まっていた。

・・・間違って捕まったのか。

「お前にも迷惑かけたわね、お詫びに握手してあげてもいいわよ」

「それより早く外せ」

「いや、罰としてこのままでもいい。俺が責任取る」

「おい！ ボクに何の恨みがあるんだ！」

はつきり言っつけてっこうあるよ。

「・・・お前、案外いいやつね。私が駆け魂捕まえてないこと、ずつと言わなかったもの」

まあ、桂馬は根はいいやつだからな。

根『は』ね。

そして、桂馬とハクアは握手を交わした。

「あ、お前もいろいろありがとね・・・えっと・・・竹内」

「おう」

俺も握手しといた。

「また会いましょう」

ハクアは飛んでいった。

・・・。

「さあて、続き続き」

「お前はゲームのことしか頭がないんだよな、うん」

「神様ー、ハクアと何コソコソ話してたんですかー？」

「何でもいいだろ」

「・・・もう・・・私ばっか・仲間外れ・・・」

「ごめん」

「今日はお前に助けられたよ。よくハクアを説得してくれた」

・桂馬が人にお礼を言った・・・！
て、天変地異の前触れか・・・！？

「あ、神様、お腹すいてませんか？ 私、オムそばパンおごりますよ！！」

「今何時だと思ってる？ とっくに閉店してるだろ」

「じゃ、じゃあ明日！！」

そういえば、前にエルシィにパンおごる約束してたけど・・・おごってないな。

明日、買ってやるか。

くで、次の日く

「私、オムそばパンね」

・・・え？

・・・ハクア？

「
・
・
・
・
・
まだ、
居る・
・?
」

12 Light Right Night・・・

ある一夜の物語・・・

「ふぁーあ、眠いなぁ・・・」

俺はこの日、1時まで起きていた。

明日は休みだし、ちょうど眠れなかったからな。

で、ついにゲームに飽きて、今こうして暇している。

というわけだ。

ま、昨日が昨日だったしなぁ・・・。

。「あーあ、話し相手がほしいけど、みんなもう寝ちまったよなぁ・・・」

・・・いや、一人だけ起きてるか・・・」

俺は二階へ行き、桂馬の部屋の前に立った。

絶対にこいつは起きてる。徹夜は普通だって言ってたし、あいつが1時ぐらいで寝ているわけがない。

ガチャ・・・

部屋の扉を開けようとする俺だったが・・・

ガチャ・・・ガチャ・・・

くそ・・・鍵かけてやる。

やっぱり部屋に鍵かけるよな。 年頃の男だし。

・・・まあ、桂馬は全てにおいてゲームだと思うが・・・。

・・・そうだ、羽衣だ。

エルシイがやったみたいに羽衣を鍵の形に変形させれば・・・。

エルシイに借りるか。

数分後、エルシイの部屋の前に立っている俺であった。

・・・いや、待てよ。

さすがに女の子の部屋の扉を勝手に開けるのはどうなんだ？

いやでも女の子といっても300歳だし・・・。

でもでも容姿・性格ともに子供っぽいし・・・。

・・・いや、羽衣を借りるだけだ。

大丈夫。 のはず。

ガチャ・・・

ガチャ・・・ガチャ・・・

・・・なんてこった。 エルシイも鍵をかけている。

まあ、この場合は仕方ないな。

「うーむ……ハクアに借りるか……？」

いや、あいつがどこにいるか分かんないし、

こんなことでこんな時間に行ったら、絶対に怒られるよな・・」

なんで桂馬の部屋にはいるだけでこんなに困ってるんだ？

今、冷静に考えたらノックすりゃ開けてくれるんじゃない？

・
・
・
・
開けてくれるはずがない。

少なくとも、ゲームがお友達の桂馬がそんなことするはずがない。

•
•
•
•
!

そんなとき、俺は一人の存在を思い出した。

「スロアがいるじゃないか！」

そうだよ、スロアに借りればいいんだ。

あいっなら俺の協力者だし。

よし、そうと決まればスロアの部屋に……

あれ？ あいつの部屋なんてあったか？

俺は廊下を見わたした。

えーと、俺の部屋、エルシイの部屋、桂馬の部屋、桂馬のゲーム部屋……。

……これだけだよな？

あれ・・・？ スロアはいないのか？

昼はいつもいるのに・・・。

・下に下りてみるか。

で、一階へと舞い戻ってきた俺。

「・・・・やっぱりスロアの部屋はないぞ・・・・どこにあるんだ？」

・・・・仕方ない。

ダメ元で部屋をノックしてみるか・・・・。

もしかしたら出てきてくれるかも・・・・。

そう思って、俺が諦めて二階に戻ろうとした、そのとき。

コッソ

「ん？」

何かが足にぶつかった・・・・。

ふと足元を見る・・・・が

「・・・・何もない・・・・？」

気にせず歩こうとすると、また

コッソ

・え？ え？ ええ？

何このポルターガイスト染みた現象！？

え、ここ幽霊でるの？

出ちゃうの！？

何もないのにぶつかるなんて、そんなことが・・・・。

・・・・。

「・・・まさか・・・」

俺の頭にある思考がよぎった。

そして俺は、何もないであろう空間で、何かをつかみ、上へ引っ張った。

すると、俺が掴んでいた『何か』は羽衣へと変わり、何もなかったはずの場所に、眠っているスロアが出現した。

やはりな。

こいつは、羽衣を使って、姿と気配を消していたんだ。

ほら、楠の攻略のときにやったヤツな。

なるほど・・・だから気配がなかったんだな。

「・・・ま、いいや。スロア、羽衣借りるぞ」

俺はスロアに毛布をかけてやり、

二階へ向かった。

さて、再び桂馬の部屋の前だ。

よし、前にエルシイがやってたみたいに羽衣を鍵の形に変形させれば・・・

やってやるぜ！

・・・

・・・ど、どうやるんだ？

なんてこった・・・。ここへ来てやり方が分からないだなんて・・・。

・・・ええい、適当にやってみよう。

「おい・・・」

「・・・話しかけるな。　気が散る」

ムッカー！！！！

何だこいつは！

「・・・それより、どうやってこの部屋に入ってきた？」

「え？　ああ、この羽衣を使って・・・」

「・・・ハア・・・で、何か用か？」

「え？」

「用があるんじゃないのか？」

「あ、いや、特に何も無いが・・・」

・・・しばしの沈黙。

「お前、エルシィについてどう思う？」

「え？」

「前にも言ったが、お前はもう少しエルシィを恨んだっていいんだ。今のお前の状況は間違いなく、エルシィのせいなんだからな」

「いや、エルシィには悪気があったわけじゃないからな。」

お前よりはよっぽどマシだ。　お前なんか、引き受けるつもりで返信してただろ」

「う・・・あれはゲームの話だと思ったんだよ！

でなきゃだれが現実リアルなんかに情緒してやるもんか・・・。

命さえかかってなけりゃ、とっくにあの悪魔を追い出していたところだ」

「・・・さあ、気が済んだだろ。　早く寝ろ」

「お前はどうかんだ？」

「ボクは寝なくなっちゃって平気だ」

そうかい。

俺はそう言って桂馬の部屋を後にした。

・・・。

エルシイを恨む・・・ね。

そんなことできたら苦労しないよな。

エルシイを恨むなんてことはできない。

まず恨む必要もない。

真紀の攻略のおかげで、何かがいろいろと分かった気がする。
・・・いろいろな。

俺は部屋へ向かう。

・・・あ、羽衣返さないと・・・。

・・・ま、明日でいいか。

あ、もう今日なのか。

俺はその日、眠りについた。

その日といってももう翌日になっちゃってたんだけだな。

ある一夜の、物語・・・。

13 出会いはいつも突然に・・・（前書き）

この小説に寄せられた感想をいろいろ見て、
いろいろ反省し、少し考え方を変えようかと思いました。
自分なりに頑張っているつもりなので
どうか応援よろしくお願いいたします。

13 出会いはいつも突然に・・・

「もう二度と恋愛での攻略なんてするかぁー!!」

俺がそう勝手にキレたのは、ある日のことだった。

「うるさいな。今、大事なトコロなんだ。静かにしろ」

「何なんだよあの攻略の大変さ&メンドさは！ お前、よくやっ
られるな！」

「ボクに落とせない女子はいない」

そういうことを言ってんじゃねえのよ俺は！

たった一人を攻略するだけであんなに大変だとは思わなかったぜ・
。

今度からは恋愛以外の方法で攻略する！

絶対に！

「やってやらぁーっ!!」

「ん？ 止まった、バグか？」

くでく

「お前、明日から学校へ来い！」

「はぁ!？」

俺はスロアに詰め寄っていた。

「恋愛で攻略をしない以上、即座に方法を考えねばならない！」

「だから、何よ？」

つまりだな。

「一晩考えた結果、お前が一番マシなんだ！」

「ちよっ・・・マシって何よ！ マシって！」

「事実だ！」

桂馬はいつもゲームしてるし、

エルシィはご覧の通りだし！」

俺は消防車の本を目を光らせながら眺めているエルシィを指差した。

「・・・なんであんなのが駆け魂5匹も捕まえてるんだろ・・・」

「協力者^{バディ}がいいんだろ。」

とにかく明日から学校へ来いっ！」

「急に言われても、手続きとかいろいろあるし・・・」

「なんなら羽衣使って隠れてでも来い！」

「そんなムチャクチャな！」

くでく

「結局くるのかよ」

「お前が来いって言ったんでしょ？」

「そりゃそうだが・・・その制服、どこから手に入れた？」

スロアは、間違いなく舞島学園の制服を着ていた。

「エルシィのを借りて羽衣で作った」

「ふうん、意外と考えてるもんだな」

が、これでいつ駆け魂が出てきても安心だな！

できれば出てこないで欲しいけどな。

〔舞島学園〕

「では・・・この時の少年の気持ちを・・・雨宮。 答えてみる」

「は、はい。 えっと・・・少年は自分の人生に絶望して誘拐をしようとするが・・・」

雨宮もすっかり不器用さが無くなったな。

そう思うと、少しは攻略の意味があったのかもしれないな。

「・・・桂木、この時の少女の気持ちを答えろ」

「・・・すみません、今手が離せないんで」

なんか、こいつこそ心のスキマがごっそり開いてる気がする・・・。

〔図書館〕

「何？ なんで図書館なんか来たの？」

「^{しおり}栞の攻略以来、ずっと勉強しに来てるんだよ・・・」

「栞・・・って誰？」

ん、そういえば栞の攻略はスロアが来る前だったな。

「ま、気にするな。 それよりも勉強するからあっち行ってる」

「何よ、来いだのあっち行けだの・・・」

えと・・・な、なんだこの単語は・・・！

児玉のやつ・・・まさかこれもテストに出さないよな・・・？

まあ、そんなこんなで勉強している俺のそばで、
地獄のような音が聞こえてきた・・・。

ドロドロドロドロドロ・

「・・・・・・3、2、1、GO!」

俺は全速力で逃げた。

もしくはそれより少し遅いくらいの速さで逃げた。
だが・・・。

「逃げんなこのスカ!」

ギュルルル、バシッ!

なんともキレイに羽衣で捕まってしまった。

くそお、羽衣の使い方だけは上手いなこいつ・・・。

「オ、オタク、ドチラサン?」

「昭和のギャグか! いいから来なさい! こっちよ!」

「わぁー! 助けてくれー! これ以上苦しむくらいなら俺は死を選ぶー!」

「うるさいっ! 誤解されるようなこと言わない!」

なんやかんやで俺はスロアに連れられて、駆け魂のもとへ。

「くそっ・・・なんで俺がこんなことに・・・」

「エルシイがメールに返信したから」

「お前がメールを送ったことがそもその元凶だ!」

「え!?! 私はアドレスを調べただけで、お前を協力者^{パディー}に選んだのも、

メールを送ったのも、みんなドクロウ室長だけど・・・」

・・・え?

「ど、どういふこと・・・」

「あ！ あの娘よ！」

話の途中だったが、俺はスロアの指差す方向に目をやった。

そこにいたのは本を運んでいる一人の少女だった。
髪をサイドで結んでいるな。

「・・・図書委員かしら？」

「いや、違うな。 図書委員なら胸に名札をつけてるはずだ」

「・・・じゃ、なんであんなに本を・・・？」

そう、彼女は図書委員でもないにもかかわらず
本を両脇に5冊ずつくらい持っていたのだ。

ドスン

「この本、借りたいんですけど！」

「・・・は、はあ・・・」

受付の図書委員も困っているようだな。

「どうするの？ 最初は出会いが肝心だってこの前言ってたけど・・・」

「何度も言わせるな。 俺はもう恋愛で駆け魂は出さない！」
もうゴメンだな。

「じゃあ・・・どうやって心のスキマを埋めるの・・・？」

「うつ・・・それは・・・だな・・・」

「・・・はつきり言って何も考えてないんだよなあ・・・」
・・・。

「で、次の日」

「うーーーーーん……」

「静かにしろ、ルートが展開できん」

お前、少しはゲームから離れたらどうだ？

「……恋愛以外で心のスキマを埋めるのは大変そうだな……」

俺はひとまず桂馬に言ってみた。

「……そんなことはないぞ」

「……え？」

「エンディングが違うだけで、そこまでの展開はほぼ同じだ。

まず悩みを聞きだすこと。そこから心のスキマを見つけ出せる。

そして埋めるまでの展開。ここを間違えるとエンディングへつながらなくなる。

そして決定打になるのは、エンディングだ」

「……なるほど」

よー分からんが、よく分かった。

要するにどっちも同じってことか。

……なんかやる気沸いてきたぞ。

「サンキューな、桂馬！」

「ま、あんまりほっとくと駆け魂が育つからな」

俺はスロアに言った。

「スロア、あいつの情報を集めろ！ 攻略開始だ！」

「了解！」

13 出会いはいつも突然に・・・（後書き）

作者「ハイ、復活！」

耕也「何で前の2話に前書きと後書きがないんだ？」

作者「いろいろあんだよ」

耕也「ふうん、そうかい。」

つか、お前連載もう一つ始めただろ」

作者「うん」

耕也「お前に二つもできんの？」

しかも二つとも神のみのやつだし」

作者「大丈夫、何とかなるさ」

耕也（最近、イナズマGOの影響受けだしてるからな、コイツ）

桂馬「連載ストップすりゃよかったのに」

14 俺は友達が少ない・・・。(前書き)

耕也「何とも悲しいタイトルなこと・・・」

作者「事実だろ」

耕也「事実です・・・」

14 俺は友達が少ない・・・。

うーむ、攻略するとは言ったものの・・・。
どうやって駆け魂を出そうものか・・・。

「えーと、岡本縁。おかもとゆかり 2月28日生まれ、16歳。

2年C組、部活はなし。 趣味・読書・・・だって」
「まあ読書が趣味なのは、見りゃ分かるけどな」

・・・。。

・・・うーむ・・・困った。

「・・・どうしたの？」

「参ったな・・・いったいどうやって駆け魂を出そうか・・・」

「いっそ恋愛でいいじゃない」

「その恋愛が疲れるから他の手段を決めてるんだろ！」

恋愛はしないと決めたからな！

絶対に！

・・・

だが、あの様子を考えると、会うのは容易だな・・・。

「よしスロア、図書館へ行くぞ」

「図書館」

「俺の予想だと、あいつは図書館にいる。」

あれだけ大量に本があったんなら、おそらく家には持って帰ってない。

つまり、図書館で借りた本を読んでいるんだろ」

「耕也、その推理力を勉強に生かせないの？」

生かせん!!!

「ひととおり探したけど・・・どこにもいないよ？」

「おかしいな・・・なんかのパワポケでそんな理論があった気がするんだが・・・」

「結局それなんだ・・・」

仕方ないだろ。

これしか頼る手段がないんだ。

・・・とはいえ、居ないんじゃ攻略はできないからなあ・・・。
仕方ない、今日のところは帰るか。

俺が回れ右して帰ろうとすると・・・

ドスン

バラバラッ

「あ・・・」

ひとりの少女とぶつかった。

そして、ぶつかった拍子に彼女の持っていた本が床へと落ちた。

「……ん？ この本……」

ふと少女の顔を見ると、

やはり、昨日センサーが反応を示した娘、岡本縁だった。

「ご、ごめんなさい……よそ見してて……」

「あ、こっちこそゴメン」

俺は縁が本を拾うのを手伝う。

「……本、好きなの？」

「うん、本を読んでもなんか落ち着く気がして」

「ふうん……」

その気持ちは分からなくはない。

国語の教科書ですら、たまに見入るときがあるからな。

「じゃあ……」

「あ、ああまたな」

……

「出会いはこんなところかな。まあ、想定外だったけど……」

「なんかどんどん恋愛の方向に行っていない……？」

「？　なんでだよ？」

「……今の娘、ちょっと顔を赤らめてた」

は？

「いやいや、それはないだろ。面白いやつだな」

「……まあ信じないならそれでいいけど……」

で、どうするの

？ 次は」

・・・そう、次が問題だ。

何せ、縁と今会ったのは想定外の出来事だ。

この先のルートは考えてない・・・。

・・・まあ、どうにかなるだろ！ 多分！

（次の日）

「イベントの展開を考えると、やはり今日も図書館にいる！」

「いなかったら？」

「そのときはそのときさ」

で、例のごとく縁を探す俺たちだが、

しばらくして縁ではなく、羽衣をまとったいかにも小市民な輩を発見した。

「・・・何やってんだ・・・エルシィ」

「・・・あ、耕也さん。 消防車の本が追加されたらしいので、見に来てたんですー」

あいつかわらず消防車ですか・・・。

「耕也さんは何を？ ベンきょーですか？」

「ああ・・・えっと、俺が今攻略してるやつが図書館にいるんだよ」

「そーなんですかー。 がんばってくださいね、私はもう少し本をよんでますー」

「消防車限定なんだろ、どうせ・・・」

ま、いいや。

とりあえず、縁を探るか。

ドスン

「つと・・・」

俺は一人の少女とぶつかった。

・・・案の定、縁だ。

「あ・・・昨日の・・・」

「ああ・・・えっと・・・岡本さんか」

俺は胸についている名札を見て言った。

見なくても分かるんだけどな。

「うん、岡本縁だよ。えっと、竹内・・・くん・・・？」

「おう、俺は竹内耕也だ。よろしくな」

なんか、久々にフルネームを言った気がする・・・。

すると縁はフフと笑った。

「二回ぶつかったただけなのによろしくって、変だね」

「そうか？ 二回もぶつかったんなら逆に偶然とは思えないけどな」

「・・・」

・・・あれ？

俺はもしかして、今すごいことを口走ったのでは・・・？

「じゃ、じゃあね・・・！」

「お、おう」

縁は逃げるように走りさった。

（桂馬宅）

「やっちまったああーーーーー!!」

「何? どうしたの?」

「くそお、あんなこと言うんじゃない。これで完全に恋愛ルートに突入だ……!」

「ふうん……。でもさ、そっちのほうが多く早く終わるかもしれないね」

あん?

何でだよ?

俺はスロアに聞いた。

「今日、耕也が例のセリフ言ったとき、明らかに動揺してた……はあ?」

「だから何だよ?」

「ハア……あんたってホントにバカね……」

悪かったな、どうせテストで赤点取るような脳みそしか持ってませんよ。

「つまり、あの娘は耕也に気があるってこと」

「……え?」

「気がある……?」

「あいつが……?」

「たった二回会った……いや、ぶつかっただけのやつが?」

……。

「ないないない。いくらなんでも二回会っただけでそんな……」

「もしかしたら……」

俺の言葉をさえぎり、スロアは言った。

「耕也があこの娘の心のスキマの原因なんじゃないの？」

「は？ 俺が悪いつてのか？」

「そういうことじゃなくて……。」

実際に会ったのは確かに二回だけ。

でも、彼女のほうはずっと耕也を見ていたのかもしれない……

……。

「それでもしも……事情をしらない彼女が、

『耕也が雨宮真紀あまみやまきを攻略するところ』を目撃してしまったとしたら……？」

「……それが原因で駆け魂が巢食った……と？」

「そうよ」

確かに、スロアが言うことは一概には否定できない……。
少なからず原因は俺だ。

……。

・すると、

「なら簡単な話だ」

桂馬が部屋に入ってきた。

「どうのことだよ？」

「恋愛が心のスキマの原因なら・・・その恋愛を成就させてやればいい」

・・・。

つまり・・・

「結局、あいつは恋愛で攻略しないとならないってことだ」

・・・そうか、そうだな・・・。

そしてスロアが桂馬に言う。

「でも、耕也のヤツ恋愛で攻略するのはキツイって・・・」

「いや」

俺はスロアの言葉を遮った。

「ここからは恋愛ルートを受け入れる」

「えっ？」

驚くスロア。

「確かに恋愛以外で攻略しても、どうせ記憶は消えるんだから問題はない。

でも、それじゃ本当に攻略したことにはならないと思うんだ。

・・・だから、縁の心のスキマは『俺が』埋める」

スロアはこの『俺が』の意味を察したようで・・・。

「そう。じゃあ、今から情報を集めてくるわ。
耕也はそれまで計画でも練ってなさいよ」

「了解した」

スロアは飛んでいった。

「・・・ありがとな桂馬」

「気にするな。ほっとけなかったからな。」

それに・・・」

・ ・ ・ それに？

「初めて会ったとき・・・お前とは初めて会った気がしなかった。
そういう点で共感する部分があったのかもしれない・・・」

「・・・そか」

初めて会った気がしなかったか・・・。

そいつは光栄だな。

この日、俺はついに本気で覚悟した。
絶対に恋愛での攻略を成功させてやるって・・・。

14 俺は友達が少ない・・・（後書き）

作者「あー、書くのだりい」

耕也「オイ！」

作者「ウソウソ。やる気は沸いてるんだよ。
最近期限いいから」

耕也「機嫌の字が『期限』になってるぞ」

作者「次回をお楽しみに」

耕也「やっぱスルー!？」

15 片思い Studies・・・(前書き)

白川「よ!」

耕也「何でお前が前書きにいるんだよ!」

白川「後書きの方が良かったか?」

耕也「そーゆー問題じゃねーよ」

白川「何なんだよ俺の扱いは。初登場時はお前の親友ポジションもらって

出番がいつぱいあると思ってたのに! 何だこの有様は!」

耕也「俺にグチるなよ」

白川「俺に出番くれーっ!!!」

15 片思い Studies . . .

（図書館）

「くそー、いない。 気まぐれなのか？」

俺は例のごとく縁を探していた。

しかも一人で。

スロアは昨日、情報を集めに行ったつきり戻ってきていないのだ。

「くそー・・・初めてあいつのありがたみが分かった気がする・・・」

縁も縁で何で出てこないんだ！

普通はうろつきコマンドで会いに行けるだろ！

・・・1時間後・・・

くそ・・・やはり今日はいないのか・・・？

これだけ探しても出てこないしな・・・。

図書館もそろそろ閉館だし、今日のところは帰るか・・・。

コッソ

「あた」

「おっと・・・」

いよいよ察しがつくと思うが、ぶつかってきたのは案の定、縁である。

・・・今日は本を持ってないな。

「・・・あ、竹内くん。ごめんね」

「ぶつかっただけだろ？ 気にすんなよ。」

・・・それより、そろそろ閉館だから出ようぜ・・・？」

俺はこっちを睨んでいる図書委員をチラ見して言った。

「あ・・・、うん」

くでく

「しかし、こんな時間に何やってたんだ？ 今日の本も持っていないみたいだし」

「え？ えと・・・た、竹内くんこそ何やってたの？」

「俺？ えっと・・・」

それこそ縁を探してたなんて言えるか！

・・・ひとまず、ここからはイベントを展開するのみだ。

「まあ時間も時間だし、一緒に帰るか？」

「えっ・・・!？」

「ほら、時間も時間だし。襲われたりしたらアレだしさ」

「う、うん・・・。そだね」

ゝで、下校ゝ

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

会話がまったく弾まねえー！！

なんで俺が攻略する娘はこんなのばっかなんだ！

「・・・・・・・・あの、何か話さないか？」

「あ・・・ごめん・・・。男子と一緒に帰ることなんて、今までなかったから・・・」

・・・・・・・・そりゃそうか。

そもそも、それがスキマの原因なんだからな。

「・・・じゃ次から一緒に帰るか？」

「えっ・・・・・・・・？」

「どうせ図書館で勉強しなきゃいけないし、それまでお前も図書館にいるんだろ？」

「う、うん・・・・・・・・じゃあ、分かった」

「あ、俺こっちだから。　じゃあな」

「うん、また明日」

・・・・・・・・ひとまず、イベント展開成功だ。

（桂馬宅）

「…………イベントの展開はしたものの……………」

「情報がないと意味ねえだろおー！ー！！」

「うるさいな、騒ぐなら外行け外」

「情報がないと攻略ができないのことはないか！」

「知らん」

そもそもお前はどこから情報を手に入れてるんだ……？

……で、スロアの帰宅を待っているうちにもう11時だよ……。

ま、普段も起きてるからいいんだけど。

そして、ようやくスロア帰宅。

「オカエリオソカッタネ」

「う、うん。少しやつれた？」

それはもう。

「で、こんだけ遅かったんだから情報はちゃんと調べてきたんだろ
うな？」

「まあね。まあ半日ほど遊びに行ってたけど」

おい！ ちょっと待て！ 聞き捨てならんぞ、今の発言は！

「岡本縁は、小・中・高で明るくて、結構男子からの人気もあった
みたい」

流しやがったなこの悪魔め。

「クラスだと明るいのか？」

「そのようね。でも、男子と一緒にになる機会がこれでもかっているくらい無くて、

男子との付き合い方が分からないみたい。会話もあんまりしたことなくいらしいわ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・何？」

いやー・・・・・・・・なんかさ・・・・。

「情報って言っても、どうせ家族構成くらいしか調べてねえだろうレベルと思ってたよ」

「よく分からないけど、ものすごく期待されてなかったっていうのはよく分かったわ」

うん、ゴメン。はつきり言って全然期待してなかった。

「だがお手柄だぞスロア。予想以上にちゃんとした情報だ」

「そんなつもりないと思うけど、言葉が凶器になってる・・・・」
ごめんね。

「だが、情報もそろったしイベントも展開した。

ここからはルートを展開していかないといけない。長期戦になりそうだな。」

それに、縁が本当に俺に気があるのかも確かめないといけないしな。すると、スロアが言った。

「そうそう、あの娘・・・・・・・・岡本縁・・・・・・・・だっけ。」

あの娘、結構可愛くて魅力的じゃない？」

「ああ、そうだな」

「でも、あの娘自身はそうは思っていないらしいんだって。

むしろ、面白みのないつまらないヤツとか、自分で思ってるらしいわよ」

「なんかずいぶんと謙虚なやつなんだな」

もうちょつと自身持てよ、自分に。

よし、明日から本格的に攻略を開始するぞ。

（次の日）

「竹内くーん、ちゃんと勉強してるんですかー？ んーふふ」

チッ、いちいち言い方が嫌味なんだよ、児玉のやつは・・・。

「何言ってるんですか児玉先生。この通り、俺のテストの点は上がってますよ」

「前回は23点で今回が25点・・・2点上がっただけじゃ上がったとは言いませんよー！！！」

「・・・・・・なら、次の小テストでは50点以上取ってやるよ！！！！」

（図書館）

「あー、言っちゃったー。いっつもこうなんだ。すぐムキになって何かを言っちゃまうんだよなー、俺って」

・・・致し方ない。

勉強するか・・・っていうか、図書館に来てる目的は本来それだし。

「えーと・・・何・・・？　こんな単語が地球上に存在するのか・・・？」

これは兎玉の陰謀だ・・・。
まったく巻き込むのは桂木くんだけにして欲しいな」

「何やってるの・・・？」

勉強している俺に縁が話しかけてきた。

「えっと、まあなんていうか・・・い、陰謀・・・的な？」
「・・・え？」

ゴメン、ホントにゴメン。　てかごめんなさい。

「お前は何してんの？」

「えっと・・・昨日、一緒に帰るって言ってたから」

「あ、あれか。　悪いけど、勉強終わるまで待っててくれないか？」
ホントに50点以上とらないと、兎玉に何言われるか分からないからな。

俺はいつも100点の誰かさんとは違うんだ。

「うん、分かった。じゃあ、ここで本読んでるよ」

「え？　いや、どっか行ってもいいんだぞ？」

「ううん、ここがいいの」

そう言って縁は、俺の隣に座った。

15 片思い Studies・・・(後書き)

作者「耕也の攻略も様になってきたな」

耕也「そうですね」

作者「何だよそれ。テキトーだな」

耕也「攻略も大変なんだよ。うっかり落とされかけるし・・・」

作者「ほーう」

耕也「ほーうじゃねえ。お前が書いたんだろ」

作者「次回をお楽しみに」

耕也「聞けやあ!!」

16 やっぱ青春・・・（前書き）

作者「ふう・・・何か最近良いことが続くぜ・・・」

耕也「そうかそうか、そりゃ良かったな」

作者「お前テキトーだな、マジで大変な目に遭わせるぞ？」

耕也「すでに遭ってるんですが・・・」

16 やっぱ青春・・・

（図書館）

「うぬぬ・・・」

「・・・どうしたの？」

「おかしいぞコレ！ これってカメって読むんじゃないのか！」

「これ？ これは・・c a m e^{ケイム}って読むんだよ。 c o m eの過去形だよ」

そんなこと知ったことか。

俺は日本人だから英語はできなくてもいいんだよ。

まあでも、こんな俺にわざわざ優しく教えてくれるっていうのは結構ありがたいことだ。

「やっぱり、こういう風に優しく教えてくれる人がいるっていうのはちょっといいよな」

「え？ だってこれ中学の問題・・・。・・・でも、そう言われると嬉しいかな」

縁は照れて顔を隠す。

・・・どうやら第一の問題は解決したようだな。

縁は俺に少なからず好意は抱いているようだ。

「・・・さて、そろそろ出ようか。　もう閉館だし」
「うん、そうだね」

くで、帰りく

「で、俺の友達にいつつもゲームしてるやつがいてさ、授業中もゲームしてるんだぜ」

「へえー、スゴいなあその人」

よかったね桂馬くん。　スゴイってさ。

「私、そんな度胸もないからなあ・・・」

「いや、授業中は真面目に授業を受けるほうが正しいんだよ」

「フフ、そうだね」

もとより縁のほうから好意を持っていたからな、今回は前回に比べてだいぶ楽だ

そろそろ出るかな・・・。

「ふー、・・・やっぱり私って幸せだなー」

それはうらやましい。俺なんか今こうしている時間も地獄だ。

・・・いや、別に縁と一緒にいる時間が、ってことじゃないよ？

とまあ話題を戻して、俺は縁に聞く。

「何でだよ？」

「だって、今こうやってさ・・・ううん、やっぱり何でもないや」

そう言って縁は前を向く。

「いや、気になるから言えって」

「ううんダメ、また今度ねっ」
そう言って縁はこっちに振り向いた。

振り向き様に見せた笑顔に

俺は一瞬、縁に惹かれてしまった。

これが彼女の持つ魅力なのかもしれない・・・。

「じゃあな、また」

「うん、また明日ね」

・・・危ねー、逆に落とされるところだった。

（桂馬宅）

「今日一緒に帰って、なんとなく縁について分かったのかもしれない・・・」

「なんとなくって・・・ダメじゃん」
まあそうだけどな。

「でももうすぐ心のスキマは埋まりそうね」

「そうだな・・・だから、いつでも勾留できるように学校へ来いって言ってるのに」

「少なくとも今はダメ。あの娘こに悪いじゃない」

・・・あの娘こって縁か？

スロアにたずねた。

「そう。最近の様子を見る限り、間違いなく耕也に好意を抱いてるわ。」

「こんなのどこがいいのかわかんないけどね」

コラ最後になんつつた。

「でもこれじゃー分かんないわねー」

「何がだよ。 お前、少しは前に主語をつけて話せよ。あるいは目的語」

「ハイハイ、今言ったのは下手したら耕也が攻略されるかもねって言ったの」

さきほど落とされかけたとは言えまい。

「ひとまずその話は置いて・・・」

「何で置いとくの？」

「明日から学校に來い」

「無視？」

「絶対に來い、いつ駆け魂が出るかも分からんからな」
それに落とされかけたら止めてもらわないといけないし。

「さらに次の日」

「竹内、ここを讀め」

「へーい」

二階堂のやつ、テキトーだな。

「えーと、少年は一枚の紙を取り出し『ボ○メ○ウス・○者・ドラ
○ン、召喚!』と叫んだ」

何だ、この小説・・・。

しかもこれいつのだよ。

もうとっくに次の時代に変わってるだろ。

「ああー終わったあー」

「終わったつつつてもまだ一時間目だぞ、耕也」

俺が会話しているのは白川雄二。

俺の親友、的なやつだ。

「しかも次は英語だ」

うわー、ヤダー！

英語もイヤだけど、児玉もヤダー！！

「あああああつまんねえなあ。最近かのんちゃんのライブもないし、

暇だし、あーあ暇で今にも死にそうだ」

「ならさっさと死にさせボケ」

「お前最近メツチャひどくね！？」

悪いかよ。

かのんのライブがなくて暇だと？

ハ、そんなものまだかわいいもんだ。

俺なんか命がかかってるんだぞ。最近まで忘れてたけど。

「あーあ、いくらかのんちゃんファンといえど、

やっぱり色恋の話とかがないと盛り上がらへんなあー」

どこの人じゃお前は。

「あ、児玉が来た」

「チッ」

「えーではー、ここの文を訳してください。竹内くーん」

「へーい」

何で今日は俺ばっかなんだ。

「えーと、ある少年が言った。『究極〇義！ 正義の〇拳！』」
いやいや、だからこれだいぶ前のやつだし、
てかこんな英文あるかぁー！！

くでく

「おおお・・・やっと昼休みかぁ。 桂馬、外パン買いに行くから
ついてきてくれ」

「やれやれ、ま、それくらいなら行ってやる」
ありがたき幸せ。

「なんと！ もうオムそばパンは終了か！」

「最近、人気が上がったらしいな。相当早く来ないとムリだな。・・・

・よし、帰るか」

いや待てよ。

俺の昼食はどうなるんだよ。

「うううー、また買えませんでしたー・・・」
エルシィが泣きながら戻ってきた。

「何だお前、今日も買いに行ってたのか」

「明日こそは必ず手に入れて見せます！！」
妙なところが小市民なんだよな、こいつ。

「よし、明日は11時くらいに来るか！」

「はいっ！」

そこへ桂馬が冷静に突っ込む。

「その時間、まだ授業中だぞえ？　そうだったつけ。」

「でもコレで昼飯抜きだな」

「もういいだろ？　教室に戻るぞ」

血も涙もねえなこの野郎。

ひとまず、教室へ戻ろうと・・・

コッソ

・・・したところで何者かとぶつかった。皆様のお察しの通り、縁である。

「あ、竹内くん」

「岡本か、よくぶつかるな」

「ホントだね」

・・・あれ、桂馬がいないぞ・・・？

・・・ま、いいか。

どうせ教室に戻ったんだろ。エルシイもないし。

「？　何やってるの？　こんなところで」

「えつとですね、ひとまず買いにきて無くてガックリつてとこだな」
・・・。。。。。。。

「そうなんだー」

ええ！？　分かるの！？

今ので分かったの！？　俺でも自分で何言ってるか分からなかったのに！？

スゴ！　現実^{リアル}女スゴ！

「じゃあ私の昼食分けてあげようか？」

分かってる！ スゴイこの娘！

ホントに理解してる！ スゴ！ 駆け魂の力かこれ！ 駆け魂スゴ！

・・・え？ 昼食？

「いいの？」

「うん、いいよ」

なんていいやつなんだ。

外パンを逃して、残る選択肢が『高い学食をわっざわざ買う』しかないこの俺に、

『昼食をもらう』という選択肢を差し伸べてくれるなんて・・・。

くでく

この屋上は嫌な思い出ししかないんだけどなあ・・・。

悪魔が降ってきたり、

クソゲーをやらされたり、

人が感電するところを目撃させられたり、

悪魔パート2が降ってきたり・・・。

「いつも外パンなの？」

「まあ、ちよっと二ヶ月くらい前から」

エルシイが降ってきてからだな。

縁はひとつの弁当箱を取り出した。

女子高生にはちょうどいいくらい入りそうな大きさだ。

「お口に合うか分かりませんが・・・」

「いえいえ、お構いなく・・・」
何だこのやり取りは。

「これ、岡本がつくったのか？」

「そうだよ。お弁当はいつも自分で」

「ふうん」

偉いもんだなあ。

「じゃ、いただきます」

「ど、どうぞ・・・」

俺は弁当箱に入っている卵焼きを口に入れた。

お、

「美味しいなコレ」

「ホントに？」

「ホントホント。ちょっと甘いけど、俺はこのくらいが好きかな」
もちろんこれは本心だった。

「良かった・・・」

「美味かったよ、ありがとな」

俺は弁当箱を縁に渡そうとした。

「え？ もういいの？」

「おう、あんまり俺が食うと、お前が食べられなくなるだろ」

はつきり言ってお腹はあまりふくれてないが、この際、仕方がない。

「いいよ、私、今日のはあんまりお腹すいてないから。好きなだけ食べたいよ」

「いいのか？」

「うん」

「じゃあ・・・」

そういうことらしいので、俺は遠慮なくもらうことにした。
もちろん、全部平らげた。

でも、やっぱり女子の弁当だからなあ・・・。
あんまり満腹にはならなかったのであった。

16 やっぱ青春……。 (後書き)

桂馬「現実^{リアル}に満足している奴。

どこに満足しているんだ、あんな現実^{リアル}なんかに！」

耕也「怖えな!!」

作者「実は俺の代弁だったりする」

耕也「犯人はお前か!!」

17 **N e v e r E n d i n g L o v e . . .** (前書き)

作者「最近不安なんだよな」

耕也「何がだよ？」

作者「いやー、最終回どんな風にしようかなって」

耕也「最終回って・・・まだまだだろ？」

作者「いやー、こういう時期から考えとかないとさ」

耕也「まあ頑張ってください」

17 Never Ending Love . . .

（図書館）

今日も俺は勉強中だ。

そして隣には縁がいる。

「そういえばいつも英語ばかり勉強してるね。そんなに苦手なの？」

「ああ、それもあるんだけど・・・この前、兎玉に50点以上取って言っちゃったからな」

「ご、50点・・・？」

あれ、もしかしてそれくらい取れて普通なのか？

いや、世の中には20点も取れない人だっているはずだよ、うん。

「あ、違うよ。ここはね・・・」

縁を見ると、・・・なんかかわいそうになってきたよ。

こんなに親身になって教えてくれるほど優しい娘と過ごした記憶が攻略完了と同時に消えちまうんだからな・・・。

「なあ」

「え？ 何？」

「何でこんなに親身になって教えてくれるんだ？

この間までまったく面識がなかったのに」

俺は縁に聞いてみた。

「それは・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・だったんだよ」

俺はこのとき

「私、竹内くんのこと・・・・・・・・」

ずっと・・・前から好きだったんだよ・・・」

初めて女の子から告白を受けた。

その日、俺は縁とは一緒に帰らなかった。
というか、帰られる状況じゃなかったな。
なんというか・・・気まずくて・・・。

〳桂馬宅〵

「はあ！？ 本当に！？」

「ウソ言うか、こんな時に」

俺だっているいろ焦ってるっての。

「・・・ふうん、人間の考えることは分かんないなあ」

「おい、今の発言は縁に失礼だぞ？」

「まあ、皮肉なもんよね・・・」

何？ 俺の存在が皮肉だとしても言いたいのか？

それとも桂馬がいつつも100点取ってることか？

「だって、耕也が告白の返事にNOを出せば、心のスキマが広がって
いずれ駆け魂に乗っ取られるわ」

「じゃあYESで答えりゃいいだけの話だろ？
もとよりNOを出すつもりなんかねえしな」

「はあ・・・あんたってホントにないも分かってないのね
何がだよ。」

俺はスロアに訪ねた。

「だからー、YESを出したら心のスキマが埋まって駆け魂が出る。
そうなるって彼女はもうなっちゃった？」

・・・あぁ、そうか。

「攻略中の記憶を無くす・・・か」

「そう。どうあがいても、あの娘この幸せは一時的なものだけよ」
・・・どうあがいても、ね。

俺はスロアに言った。

「・・・どうせ結果が同じなら、よりいい方を選ぶのみだ」

「あんた、ホントに分かってるの？ 少しは彼女のこと・・・」

「考えてるつもりだよ。・・・明日、駆け魂を出すぞ」

「・・・分かった」

スロアは納得した。

無理もないだろう。

このとき俺はいつになく真剣な顔つきをしていたからだ。

～さらにさらに次の日、舞島学園～

・・・くそ・・・ここまで来てるのに

最後のイベントが見えてこない・・・。

・・・あーもう！

「分からん！！！！」

・・・シーン

やっちゃまったあー！

授業中に思いつき大声出してしまった・・・！

「何だ竹内、どこか分からないところがあるのか？」

「えっと・・・そのう・・・」

バカバカ！ 俺のバカ！ こういうときの行動力がないんだよ俺は！
 こんなんじや攻略なんてできるわけが……。

（昼休み）

「耕也、さつき何があつたんだよ」

白川が話しかけてきた。

「別に。ただ、このままじゃヤバイな、と」

「勉強がダメなのは今に始まったことじゃねえだろ」

いや、俺が悩んでるのはそういうことじゃなくてだな。

「ま、いいけどよ。元気出せって。」

お前は元気がいいのが唯一のとりえなんだからよ。もっと自分を信じて！」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

「
白
川
・
・
」

「何だよ、また毒舌か？」

「ありがとな。お前のおかげで見えたよ」

「
・
・
・
・
・
はあ？
」

そうか、そうだったんだ・・。

きたぞ！

俺は教室を出ようとする。

「お、おい。見えたって何がだよ！」

「エンディングだよ！」

「はあ!？」

選手登録間近だ！

俺は縁を探す。

・・・だが・・・。

「くっそー、見つからない！　いつもならここらでぶつかってくるのに！」

会おうと思ったときに限って出てこないんだよな・・・。

パワポケでもよくある！

・・・そろそろ昼休みも終わる。

これじゃエンディングは・・・。

「あ・・・」

ん？

声がした方を向くと、

縁がいた。

「竹内くん・・・」

「やっと見つけた・・・」

キーンコーンカーンコーン

なぜ今鳴るんだよ！　このチャイムめ！

「あ、チャイム鳴っちゃった・・・。あ、後でね・・・」

「待て！」

俺は縁の腕をつかんでいた。

・・・この状況はむしろちよいどいい。

「え・・・？」

「授業なんてボイコットすればいい！　ここにいろ！」

「あ・・・う・・・ん・・・」

ひとまず俺たちはベンチに座った。

「あ・・・この前の返事なんだけど・・・」

「うん・・・」

・・・・・・・・・・・・。

・・・あーくそ・・・ダメだ。

ここぞというときのセリフが出てこない・・・。

パワポケならAかBなのに・・・！

・・・しばし沈黙が続く。

・・・そしてその沈黙を逆に捉えてしまったのか。

縁は言った。

「・・・どうしたの？　黙りこんで・・・　・・・やっぱり、ダ

メなのかな・・・？」

「そ、そんなことはないんだけど・・・」

・・・くそ、言葉が出てこない・・・。

せっかく珍しく白川のおかげで上手くいくと思ってたのに・・・！

「・・・そっか・・・　やっぱり私なんか、ダメだよね・・・」

・・・待てよ、こんな状況・・・。

前にも一度・・・。

『私なんて・・・全然ダメだよ・・・』

・・・かのんだ。

今、この状況はかのんの攻略の時に似ている気がする・・・。
そして、同じなのは・・・二人とも、自分に自信がないということだ。

「やっぱり私なんてダメなんだよ・・・いいところなんて一つもないし・・・」

「いや、そんなことない！ 君のいいところはいっぱいある！」
「・・・え？」

「こんな俺に親身になって勉強をおしえてくれたし、優しいくて明るいし、それに俺は・・・か、可愛いと思うし・・・！」
「・・・」

「だから、もっと自分に自信を持てよ！
・・・縁は・・・その、とても魅力があるんだから！」
「・・・でも、結局返事は・・・」

「もちろん、

返事はNOだ」

!!!

「・・・俺は今、勉強しないといけないんだ。それにいろいろと厄介ごとに巻き込まれてる・・・。

だから、今は縁とは一緒にはない」

「……今は……？」

「ああ。だから、今言ったことが全部解決したとき……もう一度、俺の方から告白する！」

$$\left[\begin{array}{c} \cdot \\ \cdot \end{array} \right]$$

「だから……それまで待って欲しいんだ……！」

うん……分かった。

約束だよ」

俺と縁はキスをした。

シュウウウ

ボヒユウウウウ！

駆け魂が出た。

「よっし、2匹目！」

ギウルルルルル

・・・ボンッ！

「勾留！！」

・・・どうやら成功したようだな・・・。

～次の日、図書館～

「・・・あの娘、本読んでるよ」

「髪型が変わってるな・・・。」

「どうやら俺のことは忘れてくれたようだな。」

「覚えてたら顔から火が出るほど恥ずかしいからな・・・。」
マジで。

「でも、いくら忘れるからっていつても、よかったの？

あんなこと言って・・・」

「あんなこと？」

「だから、待っててくれるセリフ」

的なじゃなくてそうなんだけどな。

「・・・正直な話、あれはほぼ本心だったよ・・・」
「えっ？」

そう、あれは間違いなく俺の本音。

もしかしたら、

攻略されていたのは俺だったのかもしれないな・・・。

17 Never Ending Love . . . (後書き)

桂馬「このまま耕也の攻略が続けばいいのだが」

耕也「オイ」

作者「それでもいいかもな」

耕也「お前が言う現実味が増すからやめろ！」

作者「うるせーな」

耕也「何かお前感じ悪いよ!？」

18 雨の日が月曜日で・・・（前書き）

作者「やっとちひろ編に突入だ！」

耕也「そかそか」

作者「ちなみに今日は風邪を引いていて、学校は休んでいるのだ」

耕也「風邪引いてるのにパソコンやってんのかよ！」

作者「最近いいことが無いからな・・・」

耕也「またか！」

18 雨の日が月曜日で・・・。

（ある日のこと）

俺は少し早めに起床した。

「ふぁーあ・・・眠い・・・あ、おはよう桂馬。早いな」

「ボクは寝ていない」

「マジかよー!!」

まったく、起きてそうそうツッコませるなよな。

マジで、最近いろいろ大変なんだから。

「耕也さん、おはようございます!」

「おはよエルシィ」

エルシィは俺に会釈をする。

「ところで・・・桂馬・・・何してるんだ?」

「計算だ」

「計算?」

勉強か?

「えーと・・・これが?だとすると・・・」

おいエルシィ、駆け魂の数って残り何匹だ?」

何だ、駆け魂の計算か。

まあ、がんばってるからなあ・・・残り100匹くらいじゃないかな?

「100匹くらいじゃねえか？」

「100匹もいてたまるか。そろそろ1ケタくらいか・・」
いくらなんでもそれはないだろう。

するとエルシイが駆けてきた。

「分かりましたよー神様！」

『6万匹』ぐらいだそうです！」

・・・・・。

カラカラ・・・

あ、ペン落とした。

「・・・・・」

ガン！！

桂馬が机に頭を打ち付けた。

俺も気が遠くなりそうになっただけどな・・。

「おはよう、何してんの？」

スロアが起きてきた。

「・・・えっと、何でもこいつは朝から机で寝てるの？」

「そっとしておいてやれ。」

「触れてはいけない部分だってあるんだ」

「なんとなく察したから、もういい・・・」
スロアは多少引き気味に言った。
何を考えていたのかは定かではない。

「そんなこより知ってるか、駆け魂の数って残り6万匹らしいぞ・・・」

「?・・・だから何?」

まるで自分は関係ありませんよって感じの返事だな!
俺もこないだまでその立場だったけど!

「あーあ、結構苦勞して2匹も出したのに
まだ6万匹もいるのか・・・」

「ハイ、6万匹です!」
笑顔で言われても・・・。

「ま、がんばりなさいな」
お前もだろが・・・。

〵舞島学園〵

あーー、月曜日はヤダなあーー。

「あーあ・・・また今日から一週間勉強かー・・・月曜日は憂鬱です
ー・・・」

同じこと考えてる悪魔がいやがりましたよ。
そんなエルシィに、隣の席の「小阪ちひろ」が言う。

「エリー、それは考え方次第よー?」

こいつはエルシィのことをエリーと呼んでいるらしい。
うーむ、ネーミングセンスがいいのか悪いのか・・・。

そもそもあだ名にネーミングセンスも糞もあるのか？

・・・いつそ桂馬にあだ名つけてみるか・・・？

うーむ何にしようか・・・。

どうでもいいことで悩む俺をよそに話をすすめる小阪。

「月曜を週の始めだと思うから悪いのさー。

たとえば・・・水曜日を週の初めだと思えばいいじゃん」

「お前、エルシィをバカにしすぎだろ。そんなことできねえって」
水曜日を週のはじめだと？

そんな思い込み、できるやつがいるわけないだろ・・・。
もうちょつと現実的に・・・。

「うー！ 今日明日で今週も終わりですー！

ラストスパートがんばろー！ー！！」

「よーし、がんばれー」

「イヤイヤイヤイヤ！！！！？？」

俺はとっさにツツコミを入れた。

「お、竹内じゃん。おっすー」

「おっすー、じゃねえよ！ こちとら驚きの連続だよ！」

「何の話よ？」

忘れてください。

「耕也さん、もうすぐ今週も終わりですよー」

「バカヤロウ！ 週の終わりってのは翌日が休日であるからこそ
意味があるんだよ！！」

例え明日で今週が終わっても、明後日からまた次の週だろうが！」

「うるさいやつ」

悪かったな。

生まれつきこうなの。

しかも今の、完全にド○○ン○○ールだよね!?!
いいの?

そんなパロディー全開でいいの!?!?

そして、桂馬をなだめるエルシィ。

「大丈夫ですよー、駆け魂隊は私たちのほかにもいますからー。ほ
ら、神様のお隣にも」

「俺のことかい?」

まあ、そうだな。

いまや、完全に関係者だ。

もう2匹も出したぜ、駆け魂を!

俺を称えるがいい!!

「桂馬よ、そういうわけだ」

「フン、地区長が駆け魂を逃がしてるような連中だろ? 信用でき
ないな」

「それを言っちゃあ、おしまいだろ」

「だいたいお前は何とも思わないのか! 6万匹だぞ、6万匹!!」

「いやあ、まだ駆け魂狩りの自覚がなくてなあ。

まあ、攻略を機にいろいろ学んだこともあるしな」

でもま、こないだまで第三者だったし・・・、

協力者があんなだし。
パディー

「でも、攻略を通したら、人との付き合い方とか。

そういう面でいろいろ学べたよ」

「・・・・・・ハア・・お前は能天気だな」

そう・・・?

そんなことはないと思うんだけど・・・。

そんな俺を完全無視し困りはてたエルシィは、あろうことか・・・

「ううう・・ちひろさんにもーさまに何か言っただけでございー」

小阪に助けを求めやがったよ、こいつ。

こいつの意見なんか参考にならないって、絶対的に多分。
ところが小阪は・・。

「やなことー」

「ええ？」

参考になるどころか意見すら言わないというね。
新手の技に出たな。

「オタメガ元気付けて何の得があるっていうのさー。 接触してオ
タが映っても困るしー」

こいつ・・・今の発言は人権問題だ!!!

絶対に訴えてやる!!!!!!

行列ができる法律相談所で訴えてやる!

ちよっと問題が発生したけど訴えてやる!

とか言ってみたりする。

で、小阪の発言を聞いた桂馬はその場を立ち去った。
寂しそうに。

「うげー、気持ちわるうー」

イラッ

俺の中の何かがキレた。

つーかシンプルにブチギレた。

「おい!!! 言いすぎだろ!!!!!!」

「な・・何よ・・アンタ・・」

俺は小阪に一括してから、桂馬を追った。
さすがに今のは言い過ぎだったから。

確かに普段の桂馬なら気持ち悪いと言われても仕方ない。

だが今回に関しては何もしてないのにこの有様だ。

友達がバカにされたのが気に食わなかった。

とりあえず、桂馬に追いつき、

「心配すんなよ桂馬、小阪も冗談で言ったんだよ」

俺は友達として、桂馬を慰めた。

だが・・・

「フン、あんな現実女リアルの言うことなんか気にするもんかおう？

意外と平気そう・・・？

「・・・いいか、よく聞け！」

「まあ、今日は聞いてやるよ、仕方ない」

個性なき

現実女リアルに

フラグ無し

けいま。

「なるほど、用は単なる強がりか」

「うるさい！・・・見ろ！この学園を！！」

「あん？」

俺は桂馬に言われて、廊下を見渡す。

しかしそこには特に変哲のない生徒の諸君が数人いるだけだった。

「で、それがどうしたんだよ？」

「今ゲームじゃ学園は、宇宙人だの軍人だの電波だの、個性で溢れているのにも関わらず、この学園は髪の色すら一色だ！」

髪の色って・・・

俺が見た限り髪の色が違ったのはかのんだけだったような気がするんだが・・・

髪の色なんて皆一緒だよ。

「いやーこの学園も個性で溢れてるだろ。

たとえば俺が攻略したやつら。喋らないし、喋らないし、喋らないし・・・」

「喋らないだけか・・・まったく、やっぱり現実リアルはクソゲーだな」
そんな会話をしていると、周りにいた女子がなにやら話し出した。

「何？」

「何かほざいてるわよ」

「ヤダーキモーい」

「マジキモーい」

「ていうかキモーい」

ヒドイ言われようだな・・・

てか、後半全部キモいしか言われてないだろ・・・

ま、このくらいじゃ桂馬はダメージ受けないよな・・・

ほら、結構平気そう・・・

「・・・あんなヤツ・・・モブキャラなんだ・・・」

モブキャラが話すんじゃない・・・くそう・・・」

・・・あ、あれ？

結構気にしていらっしゃる・・・？

「・・・き、気にしてんのか？」

「全然！ あんな現実女^{リアル}、ボクが気にかけることは絶対になぁい！
！！」

おお、言うね。

でも絶対気にしてただろ。

「神にーさまー、待ってくださいーい！！」

「なんだエルシィか」

「大丈夫ですか、にーさま？」

「一応大丈夫だ。でも、絶対心にキテる」

間違いない！

ドロドロドロドロドロ・・・

・・・ゲ！

「か、駆け魂・・・！？」

「・・・待て。 耕也、なぜ耳をふさいでいる？
え？」

「あ、いや、あんまり聞きたくはない音だったもので・・・」

「そんなことボクも一緒だ。でも命がかかってるんなら、仕方ないことだ」

「お前さっきまでめっちゃヘコんでたのに急に立ち直ったな」

「フハハ、何のことだかさっぱりだな」

こりゃ現実逃避かな・・・。

でも自分でも知らないうちに耳ふさいでたもんだから
ビックリしたわ・・・。

そこへ、小阪が走ってきた。

タタタタ・・

・・そして窓の外を少し眺めた後に
また走り去っ・・・

ドカツ！

「痛ってえ！」

「邪魔よ竹内！！」

そう言って去っていった・・。

・・・何なんだあの態度は！！
今にも殴りたい！！！！

とまあ、そのことは置いておいてと。

小阪が走っていったとたんに、センサーが鳴り止んだ。
・・・え？ てことは・・・。

「神様！」

すると桂馬は先ほどの俺のように耳をふさいでうずくまった。

「ま、待て！ 言うなあ！！」

「さっき俺に耳ふさぐな言ったのはどこの誰だ？」

「知らん！！ それはそれ、これはこれだ！！」
・・・ハア、どうしようもないなこりゃ。

「もー！ 神様、いーかげんに・・・」

「どけエルシイ、俺がやってやろう・・・」

「スウウ・・・」

俺は思い切り空気を吸い込み、そして桂馬の耳元で叫んだ。

「小阪が」

次の

驅け魂の

持ち主だ あああああ
――――

「……！」

そのとき、廊下中に俺の声がコダマした。

それから数日、俺は学年中でウワサになるということは

今は関係ないので置いておく

屋上

「あー、恥ずかし・・。 あんなところであんなデカイ声だして・・」

「なら二度とするな．．．。ああくそ、まだ耳がキーンとする．．．！」

お前が現実逃避するからだろ。

これは裁きの剣だ・・○

厨二全開なのは見逃してほしい。

「えーと、小阪しんがちひろ。身長158cm、体重50kg・・・部活・帰宅部、勉強・中くらい、運動・中の上くらい、趣味・特になし、

好きなタイプ・イケメンなら大体・・・だそうですね」

「何だこいつ・・・。ただのワガママ女じゃねえか」
「いっちゃん彼女にしたくねえ女だな。」

「くそう・・・なんて中途半端なパラメータだ・・・。
まさにこいつは・・・現実女^{リアル}中の現実女^{リアル}だ・・・」
「そうですか」

「はあああ・・・大変だなあ・・・」

「俺からすれば、かのんとか楠のほうが大変そうだったけどな。
俺が攻略した娘^こなんかだいぶ楽だったけど・・・」

「その攻略、ルートを決めるのが大変じゃなかったか？」
え・・・？

「まあ、そう言われると・・・そうかもな」

「突出した個性で構成されるゲームキャラにおいて、あーいうヤツ
は中心に來ないんだ！

ヒロインには個性がある。それがプレイヤーの興味を引き、ル
ートの情報にもなる」

普段ならまたゲームかと言うところだが、
俺の今後に役に立ちそうなので聞いておくことにした。

「で、つまりどういうこと？」

「あーいうのは、画面の端とかにまとめて映ってるようなやつなん
だ！

攻略キャラじゃねーの！ ヒロインの可愛さとかを引き立てたり
するのが仕事なんだよ！」

「いや、そんな熱弁されても・・・。
それに、そんなやつばかりじゃないだろ」

・・・・・・まあ、縁とかは可愛かったぞ。 結構。

「ニヤけているぞ」

「え？ いや、気のせいだよ」

「まったく現実女リアルのどこがいいのやら・・・」

こ、こいつは人の心が読めるのか・・・？

だから簡単に攻略できるのか・・・？

「俺はお前と違って現実の娘こにしか興味ないの」

「そういうのは、攻略に差し支えるな」

・・・どうということだ？

俺は桂馬に聞いた。

「もし、攻略した娘をお前が好きになったらどうする？」

・・・え？

「もしそうになったら、これからの攻略に差し支えるな」

「・・・なるほど・・・」

・・・まあ、深くは考えなくても・・・いいよな・・・？

「それより、何かちひろの情報はないのか！ 実家が忍者とか！」

「いや、それはないでござるよ」

「情報がないと、ルートが分からん！」

「いや、そんなこと言われても困るでござるよ」

実家が忍者って・・・おい。

それはないだろう・・・。

ハットリくんじゃないんだから。

すると桂馬は何かのキャラクターみたいな顔をして言った。

「でもルートがあったとしても、アイツだけはヤダ。 何でボクが

攻略しなけりやならん」

「いやいやいやいや。もうちょっとやる気だせよ。

いっつもお前、言ってるじゃねえか。 駆け魂狩りには俺たちの命がかかってるって」

こいつ時々矛盾してるんだよな・・・。

すると桂馬の反論。

「駆け魂を逃がしたハクアの命は無事だった。一回や二回の見逃しはだいじょぶさー」

クツ・・・反論できん・・・。

くそ！ なんでハクア生きてたんだあ！

ってこれは完全に逆ギレか・・・。

逆に今の発言はいかな・・・。

するとエルシイが桂馬に言った。

「・・・じゃあ、神様はちひろさんが駆け魂に乗っ取られてもいいんですか？」

・・・。。。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

お、あの桂馬が考えてる・・・。

これならやる気を出すかもしれないな・・・。

「桂馬、やってやれよ」

「・・・現実リアルはどうしようもないな・・・」

やる気になった・・・のか？

とか考えていたそのとき……。

「好きです」

「え？」

俺たちが声の方を振り向いた。

そこで見た光景。

それは

小阪ちひろが男子生徒に告白をしている様子だった。

何だよ、これは。

最近、告白イベントが多い気がするぞ作者あ！！

18 雨の日が月曜日で……。 (後書き)

耕也「もうこのまま桂馬の攻略話でいいんじゃないか？」

桂馬「前みたいに耕也の攻略話でいいんじゃないか」

作者「お前らどんだけイヤなんだよ」

桂馬「ゲームができないだろ」

作者「ハハ……」

19 99%の雨予報・・・（前書き）

作者「聞いた？ バージョン別で奥さんが違うんだって」

耕也「何の話してるかだいぶ検討つくわ」

作者「じゃいろいろおかしくなるよね？

だって、子孫とか変わってくるし・・・」

耕也「文句なら俺じゃなくLEVEL5に言えよ」

作者「文句じゃないよ。

むしろ楽しみなくらいだ」

耕也「で、何の話なんだ結局」

作者「最近いいことが続くから、何かしよかな」

耕也「もはやスルーが定着しとるな・・・」

19 99%の雨予報・・・

・・・今、何だった？

「桂馬・・・、おい」

俺はふと桂馬の方を見る。

すると桂馬はもう、抜け殻のように突っ立っていた。

「おい、桂馬」

ポツ・・・ポツ・・・

あ、雨降ってきやがった・・・。
すると桂馬が口走った。

「こ・・・このパラメータは、あんまりだろ・・・。」

「・・・現実逃避しかけてるぞ、こいつ。」

エルシィ、ひとまず校舎内に連れて行くぞ」
「は、はい」

「ほっといってくれ・・・。」

あいつを攻略するくらいなら、

ボクはここでノタレ死ぬ・・・。」

「とんでもねえこと言うなあー!!」
分かるけど!!

攻略相手に好きな人がいる辛さは分かるけど!
あと6万匹も駆け魂が残ってる苦しみも分かるけど!

俺とエルシィは桂馬を校舎へ運ぶ。
そのとき、小阪が横を通った。

その目には涙があった。

（桂馬宅）

それ以来、桂馬はしばらく考え込んでいた。

『この雨ですが、明日には止むでしょう・・・』

「ほう、桂馬。雨、明日には止むってよ」

「そうか・・・」

・・・なんか無気力って感じだな。

「何? どうしたの桂木のヤツは」
スロアが2階から降りてきた。

「まあ、いろいろ会ってな。

てかお前、学校どうしたんだ」

「え? あれってあの娘の攻略の時だけじゃなかったの!？」
「当たり前だろ」

あの娘とは岡本縁のことだ。

「えー、じゃあ本格的に制服買わないじゃない!」

「お前はそんなことで悩んでいたのか」

能天気だな、こいつは・・・。

「桂馬、大丈夫だって。お前一人じゃないんだからさ」
「!」

俺は何気なくそういった。

いつもの励ましのように、少し小バカにしたような口調で。

「・・・耕也、今何て言った・・・?」

「は?」

「・・・前に聞いたことがある・・・そのセリフは・・・」

「どういうことだよ」

同じセリフ吐くって、結構強い精神持ったやつなんだろうな。

「お前から・・・聞いたことがある・・・」

「・・・は?」

「・・・ような気がする・・・」

おい!

気がするって、結局そうなのかよ。

ていうか、言ったことあるわけねえだろ。

同じセリフなんざ言ったことないよ。

桂馬には、な。

「次の日、学校」

「竹内くん、おはよー」

「おはよ」

雨宮真紀が俺に挨拶をする。

桂馬はあいかわらず考え込んだままだ。

「ちひろさん、来ませんね神様」

「見りゃ分かる」

「そんな言い方ないんじゃないのか」

「・・・」

泣いていたということはおそらく、フラれたんだろう。

となると心のスキマは広がってるはずだ・・・

早めに攻略を始めたほうがいいと思うのだが。

「何なら俺がやろうか・・・？」

「いや・・・いい」

これだもんな。

じゃあどうするんだよ。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

・・・何か桂馬が栞みたいになってるな・・・

悩んでいると、小阪がきた。

「おはよー、エリー・・・」

「あ、ちひろさん、おはようございます・・・」
やはり小阪は元気がない様子だ・・・。

「昨日は、カッコ悪いとこ見られちゃったな・・・」

「い、いえ、そんな、すみません!」

こいつは常に謝ってるな。

「小阪、なんつーか、その・・・まあ、いろいろあるよ」

「うん・・・」

完全にしくじったな・・・。

「神様・・・」

「桂馬、いいのか? ホントにこのままで」

「・・・これは攻略じゃないぞ、あんまり放っておくと
駆け魂が育つからな・・・」

おお?

「1セリフ限定で、^{リアル}現実に譲歩してやる」

さすが桂馬だ。

口じゃいろいろ言っても、やっぱりこいつは人間だ。
何言ってるか自分でも分からんけど。

「・・・昨日は・・・」

桂馬が何かを言おうとしたとき・・・

「さあーて、じゃあ次の恋に移るかー!!」

「えゝゝゝ」

・・・・・・はああ!?

「いやー、昨日は泣いたなー。

さすがにサッカー部のキャプテンは高望みしすぎかー」

え、何?

今、何が起こったんだ?

「でも、よく考えて見たら、前に告白した人の方が良かったかもない」

「・・・前に告白・・・だと?」

待て、いったいどういうことだ。

「私ってさー、カッコイイなとか思っちゃうと

つつい告白とかしちゃうんだよねー」

何なんだこいつは・・・・。

何か無性に腹が立ったぞ・・・・。

世の中には素晴らしく一途な人だっているのに・・・!

殴りたい。

本気でそう思った。

そう思ったのは俺だけではないだろう。

桂馬がやたらとワナワナしていたからだ。

「ねえエリー、この写メ見てー!」

「え?」

小阪はケータイを開いてエルシィに見せた。

「この人が次の本命!」

やっぱり恋がないと人生張り合いないもんね」
のヤロー……!!!!

「ふざ……」

「そんなの恋じゃない……」
「？」

桂馬が話し出した。

いけ、桂馬。

今回は俺も味方だ!!!!

「ヒロインの恋はもっと重いんだよ！

すぐに忘れたり、乗り換えたり・・そんなのは恋じゃねー!!!!」
思った以上の熱弁でした。

しかもまさかのゲーム理論だよな、これは。
が、今回は俺も加勢する。

「そーだそーだ、言ったれ!!!!」

ガツウウ!!

「ガァ！」

小阪は本を桂馬にぶん投げた。
そして顔面HIT。

「よくもやったなコノヤロー！

やはりお前なんか心配するだけ損だったな!!!!」

「うるっさいなー!!」

あんたたちには関係ないでしょ!!!!」

突如口論が始まったもんだから、

クラスの人間全員がこっちに注目している。

「関係ないけど関係ある!!」

世の中にはとんでもなく一途な人間だっているんだ!!
簡単に終わらせてんじゃねー!!」

「何よさつきから!!」

「フン、現実^{リアル}女のレベルをまた思い知ったよ」
「?」

「部活にも入らず、頑張ることもない」

「そーだそーだ!!」

「その癖、人を罵り、口を開けば誰がイケメンだと
色恋の話ばかり・・・」

「・・・そーだそーだ」

・・・?

「お前らみたいな連中が現実^{リアル}を汚染しているんだ!!」
・・・かつこよく言い切ったけど・・・、
それってさ・・・。

「桂馬、お前それ、墓穴掘ったんじゃ・・・」
「何?」

「それって、あんたのことじゃん」
「・・・え?」

・・・うん、だよな?

俺もそう思ったもん。

「あんたも帰宅部だし」

「うゝ・・・」

「人の悪口ばかり言ってる」

「うゝっ・・・」

「頭の中はゲーム一色!」

「うゝうっ・・・!」

「人のこと言えた義理か!!」

「この底辺ゴキブリ男!!!!」

「ウガアアアアア!!!!」

「何これ、コント?」

「白川か。とりあえず、そっとしておけ」

「はい?」

見事に言い返された桂馬。

「桂馬・・・大丈夫か?」

その姿は台所でよく見かけるあの姿に。

「カサカサカサカサカサカサ・・・」

「あ、にーさま!!」

「行っちゃったよ、アイツ」

ゴキブリと化して移動するって・・・
これも駆け魂の影響なのか・・・?

つか、俺たちが攻略する女子ってホントに
ロクなのいないよな・・・。

「・・・何よ、あんたも何か文句あるの？」

「いえ、何でもないです」

「にーさま・・・」

「ざまあないわよ、あんなヤツ」
おっかねえ。

この日、桂馬は現実世界と決別したとかしなかったとか。

（桂馬宅）

「それ以来、神様は現実^{リアル}に対して心を開かなくなってしまいました」
「何で説明口調なんだ？」

「耕也さん、どうしましょー・・・」

「とりあえず、あれだ。励ましていこう」

・・・といっても、桂馬のヤツ

家でも部屋からまったくてこないんだよな・・・。

「にーさまー！」

「桂馬！ 出て来い！！」

するとドアの下からこんな紙が。

うるさい

どっか行け。

「うう・・・」

「諦めるな・・・まだ手段はある」

「何？桂木は落ち込むのがマイブームなの？」
スロアが言った。

つか、どんなマイブームだよ。

「まったくもう・・・」

桂木母も呆れているではないか。

心配くらいしてあげようよ・・・。

「二人とも、ご飯くらい食べるように言ってよ」
ラジャー
「了解！」「分かりました！」「私はどーでもいいんだけど・・・」

するとエルシイは七輪で何かを焼き始めた。

「ほーら、今が旬の『メイカイサンマ』ですよ」

「何それ！？それも三途の川で釣ったのか？」

「そうですよ」

三途の川って意外と魚いるのね。

「私も三途の川で何か釣ってこようかな・・・」

「もうこれ以上、この家に災難を持ち込まないでくれ・・・」

「ほーら、いい匂いですよ」。

出てきましょ」

「出てくるかな・・・」

するとまたもや紙が。

今すぐやめろ！

「うう・・・」

「もう1枚あるぞ？」

ゲーム機に匂いがうつる！

「何か、より一層ゲームのことしか
考えなくなったな、アイツ」

「神様・・・」

「もうアイツ終わりね」

桂馬はしばらく出てこないままだった。

「こうして、神にーさまは『神ニート様』になったのです」
「上手いこと言ったつもりか！？」
「ハア・・・」

そしてまたしばらくして・・・。

カーカーカーカー

「桂馬の部屋の周りにカラスがいっぱいいるんだけど？」
「不吉です・・・」

「あの子、死ぬのかしら・・・」

「いやいやいや！」

仮にも息子なんだから！！」
すると・・・

ガチャ

桂馬が家から出てきた!!

「にーさま! 学校ですか!？」

「やっと出てきたか。よし、一緒に行くか」

「・・・・・・・・」

「大丈夫かしら・・・」

くでく

桂馬と学校に行き始めて結構たつが・・・
今日ほど会話しないのは初めてだな・・・。

「桂馬、そろそろ話くらいしないか？」

「・・・・・・・・」

「聞いてないな、あれは・・・」

「そんなー・・・」

く学校く

「へー、エリーとも話さないんだ・・・」

小阪が言う。

「そーなんですー・・・」

「小阪、何とかしろよ」

「あんたたちの方からつつかかってきたんでしょー!？」
「そりゃあそうだけど・・・」
だってムカついたんだもん。

「何なの？これじゃ私が悪いみたいじゃない」

「違うのか？」

「うるさい!! 私が悪くない!!」

すると会話に入ってきた人物がいた・・・。

「なにになに？ どうしたの？」

高原歩美。

桂馬が初めて攻略した相手だ。

そういや小阪と仲良かったような良くなかったような・・・。

「オタメガのやつがさー、先にケンカふってきたのに

私が悪いって、エリーと口聞かないのよ」

「高原、こいつの言ってることは合ってるけど合っていないぞ」
「どっちなの？」

「私は悪くないって言ってんでしょ」

「でも桂馬もそう思ってるわけだからなあー・・・」

「ふーん・・・桂木、そんなに落ち込んでるのか・・・」

「歩美さん、にーさまに何か言っておいてください!」

「うーん・・・」

何だかんだで歩美は桂馬に声をかけてみることに。
俺とエルシィと一緒にいるけどね。

桂馬の近くまで行ってみると、
なぜか桂馬の周りは人で囲まれていた。
桂馬はなぜか倒れていた。

「何だ何だ？」

「何？ 行き倒れ？」

「え？ ここ学校だよ？」

「だよね・・・？」

人はいろいろ言うものの、
桂馬を心配する人は誰もいない。
悲しすぎんだろ・・・。

そこへ歩美が桂馬に話しかけた。

「立ちなよ」

話しかけた瞬間、桂馬の顔が変わった気がした。

「こんなところで寝てると、私に轢かれるよ」

しばし沈黙が続いた。

1999%の雨予報・・・（後書き）

耕也「どーでもいいが、これの続編はあるの？」

作者「未定！」

耕也「胸張って言うなよ」

作者「いやいや、終わってもないうちから続編考えてどーすんだよ」

耕也「いやいや、やってたよね!？」

作者「とにかく未定なんだよ。

あ、その前にこれ完結できるかな・・・」

耕也「オイ！ 問題発言！」

桂馬「騒がしいヤツらだ」

20 Sing In The Rain . . . (前書き)

作者 「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお

おおおおおおおっしゃああああああああああああ
ああ

ああああああああああああああああああああああ
ああ

あああああああああああああああああつつつ!!!!
」

耕也 「ハイ壊れたー」

作者 「人生生きてりやいいことあるな」

耕也 「お前はいいことがないと生きていけないのか!!」

作者 「うん」

耕也 「うん、て!!」

20 Sing In The Rain . . .

これまで口を開かなかった桂馬が
ようやく発した言葉・・。

「あー、良かった。話があったのよあんに」

あ、これは歩美ね。
で、桂馬が言った言葉。

「あ・・・歩美・・」

ようやく話した言葉なのに、
それを言った途端、桂馬の顔面には強烈な蹴りが浴びせられた。

「あ、歩美って呼ばないでよ！ 私たちそんなに仲良かったっけ・・

「?」
「……………」

そうか、攻略時の記憶は無くなってるんだったな。
それより上手いこと話をしてくれると助かるんだが……

「ねえ桂木、ちひろとケンカしたんだって……?」
歩美は桂馬に疑問をぶつけた。

ん?

「歩美って桂馬のこと『桂木』って呼んでたっけ?」

「え? さあ…………。攻略の影響なのかも…………」

「ホントに使えんね、お前は」

情報がまったくもないもんね、こいつは。

はい、戻るよ。

疑問をぶつけた歩美に対し、桂馬は言った。

「知ってるか…………」

争いは同じレベルの者同士でないと発生しない…………

つまり、ボクが現実リアルと争うことはあり得ない…………」

…………もうどうでもいいけど、

歩美も何言ってるのこイツみたいな顔で見てるんですけど…………

「ボクと現実リアルには接点がないからな。

ボクはケンカなんかしていない」

・ ・ ・ あそこまでへこんどいてよく言うよな。
・ ・ ・ バタ。

「あ、にーさま倒れました」

「人が倒れたってのに前軽いな」

「竹内だって結構動揺してないじゃん」
「免疫ついてるんで。」

「ていうか、お前もだろ。歩美。」

「桂馬くーん？」

「・ ・ ・ ・ ・ 」

「・ ・ ・ お腹減ってるの？」

歩美は桂馬に聞いた。

「そりゃそうだろうな。」

「家でも何も食ってないからな。」

「高原、それが正解みたいだ」

「ふうん」

「フン、ボクが空腹だと？ まさか。
食事ならさっきたらふく食べたよ」

「ゲームノナカデ・ ・ ・ ・ ・ 」

「エルシィ担架」

「ええ？急に言われても・ ・ ・ ・ ・ 」

「しょうがないなあ・ ・ ・ 」

そう言って歩美は桂馬の襟を掴んで引っ張っていった。
「……とりあえずそっとしておこうか。」

（教室）

「桂馬、結構落ち込んでたぞ」

「ふーん……」

興味無さげに答える小阪。

「歩美は？」

「桂馬が腹減ってたらしいから、食堂にでも連れて行ったんじゃないのか？」

「……そうなんだ」

「……少しは桂馬のこと心配したらどうなんだよ？」

「……私は悪くないから……」

「……ゴキブリは言い過ぎたかもしれないけどさ」

「……思ったよりは気にしてるんだな。」

うむ、よろしい。

「エルシィ、桂馬を探しに行くぞ」

「は、はい！」

思ったより桂馬は早く見つかった。

俺たちが行こうとした方向から
歩美が駆けてきたからだ。
そこにいるってことは容易に想像がつく。

「あ、いましたよ!!」

「何してんだよこんなところで」

「神様、元気になったみたいです！ 良かった〜!!」

「・・・おい」

何だ？

またキレるか？

「攻略した女子の記憶は消えるんじゃないかったか？」

「え？ はい、消えます・・・」

「何かあったのか？」

「・・・いや、消えるんなら別にいいけど・・・」

これは何かあったな。

歩美と何を話していたのか気になるところだが
とりあえず今はいいだろう。

そこへエルシイが言う。

「記憶を失ったといっても、昔に戻ったわけじゃないですよ！

歩美さんの心のスキマは埋まっています！

歩美さん、前より輝いてますよ!!」

「・・・」

「エルシイもたまにはいいこと言うな」

「たまにはって何ですか〜!」

たまにはだよ。

言葉の意味のままだよ。

「フ、フン、前と同じだよ・・・。現実リアルがそんな簡単に変わるか・・・

！」

「えー！変わってますよー！」

「お前もひねくれてるな」

「フン、何とでも言え」

この流れならいけるんじゃないか。

「とりあえず、小阪も助けてやれよ。あいつもあいつで・・・」

「イヤだ、ベンベン！！」

こっちが言い終わる前に拒否りやがった！

大体なんなんだベンベンて！

「もう現実^{リアル}には関わらないって言っただろ！」

特に人をゴキブリ呼ばわりするような現実^{リアル}女にはな！」

「ひねくれるを超えて性格悪いわお前！！」

その日、桂馬は掃除係らしいので、

俺は一人で帰ることになった。

桂馬がいなくて結構物足りないもんだ。

「歩美・・・？」

俺の目の前には練習着姿の歩美がいた。

いたというか、走っている。

陸上部のランニングだな。

・・・アレ？

こいつ掃除係じゃなかったっけ？

桂馬と・・・。

・・・そして歩美は俺の横を通り過ぎ、
学校方面へと走っていった。

・・・気になるけど、まあいいや。
そしてまた俺は前を向い・・・

え・・・。。。。。

俺は突然の出来事に目を疑った。

「耕也・・・か・・・？」

「・・・父さん！？」

俺の目の前にいたのは俺の父親、
たけうち しゅんじ
竹内俊治だった。

「ここが俺の今の家だ」

「結構デカイ家なんだな・・・」

俺は父さんの家に来た。

いろいろ聞きたいこともあったし、
今どうしてるかとかも気になったから、
家に来た。

「ほら」

「お、サンキュ」

父さんはお茶を出してくれた。

俺はお茶を一口飲み、言った。

「もう大丈夫なのか、借金は」

「ああ、もう2年くらいまえに全額返済した」

「そか」

なら言ってくればよかったのに。

そう言いたかったが、父さんにもいろいろ事情があるんだろう・・・。

「耕也は今どうしてるんだ。一人でさびしくないか」

「え？ああ、今はちよつと友達の家に住させてもらってんだよ。

友達も親もいい人だし、大丈夫だよ」

「そうか。なら良かった」

・・・この人は、ホンキで俺を心配していたんだろう。
なんとなくだがそう思った。

で、父さんがこんな疑問を。

「？ お前、首に何つけてるんだ？」

「えゝ!？」

しまった。

一番答えに困る質問だ。

関係者ではない父さんに話すわけにもいかない・・・。

「えっと、ほら、あれだよ。『ゲ○マニ○ム』的な・・・？」

「・・・そうなのか？ なら別に気にしないが・・・。

いや、しかしホントに懐かしいな」

「ホントにな」

懐かしい時間だった。

もうしばらくこうしていたかったよ。

「しかし、あれだな。お前、よく学校が違う友達とよく遊んでたよ

な」

「え？ そうだっけ？」
ぜんぜん記憶にないや。

「そうだぞ。同じ学校の子とは全然係わり合いがなかっただろ。
俺も不思議に思ったもんだ」

そんな時期があったとは……。
俺全く覚えてねえや……。

「特に、何かお前が一方的に興味持ってる子がいたろ」

「えー？ そのころはまだ女とか興味ねーよ」

「いや、男の子だったよ。向こうは興味なさげだったけどな」

「男はもっと興味ねーよ！！！！今も昔も！」
いきなり何言い出すんだこの親父！

「興味持ってるって、別に普通に気になってる程度だって」
「ああ……そーいうことね」

「何て言ったっけな……あの子……名前……そうそ
う……！」

「桂木桂馬くんって言ったっけな」

・・・・・・は？

「な、何を言ってるんだよ父さん」

「違ったっけか？ たしか、毎日ゲームしてた子だと思ったんだけど・・・」

毎日ゲーム・・・桂木桂馬・・・

確かに桂馬だ・・・。

でも父さんは桂馬のことは知らないはず。

つまり・・・父さんの言うことはホントだということか・・・？

「お前、その子に興味持って、常に観察してただろ。面白かったぞ、見てて」

「あ・・・そうなんか・・・」

桂馬が言ってた『初めて会った気がしなかった』ってのは・・・
ホントに初めて会ったわけじゃなかったってことだったのか・・・？

「・・・そう考えると、スゴイめぐり合わせだな」

「何がだ？」

「俺が今居候してる家、その桂馬の家なんだよ」

「え？」

俺は父さんの家を出た。

別に家がわかってりゃ、いつでも会えるし。

今日は桂馬と話したい気分だし。

たまたま興味を持って近づいてみたら、

そいつが幼馴染みだった・・・。

ギャルゲーでもなかなか無い設定だな・・・。

男と男の時点で無いか。

でもまあ、気にする必要はないよな。

俺が桂馬の友達（向こうがそう思ってるかは定かではない）だということには

変わりはないしな。

でも、その日俺は桂馬にそのことについては話すことはなかった。いつか話す日が来ると思うが・・・今では無かったのだろう。

～次の日 学校～

その日、桂馬からあることを聞かされた。

「ちひろさんの告白を手伝うことになった？」

「ああ・・・」

「昨日までケンカしてたのに、何がどうなってそんな話になったんだ？」

「まあ、あれだ。なんだかんだで、だ」

何があったのだろうか。

この話と、歩美が掃除をしていなかったことを考えるとすぐに答えは見つかった。

「まあ良かったんじゃないか？」

「何が良いというんだ・・・」

「だって、小阪の恋を成就させてやれば

心のスキマが埋まって駆け魂が出てくるだろう？」

「・・・・・・」

桂馬は言われて今気づいたみたいな顔をしていた。
俺もスロアに言われて思ったんだけどな。

「そうか・・・その手があったか・・・」

少し考え込んだ桂馬はヒャッホウと叫んだ。

「やったー！ 別にボクが相手じゃなくてもいいんだー！！」

「わーい！ 神様元気になったー！」

「もうお前ら漫才だよな、全体的に」

もう慣れ過ぎて訳わかんないけどな。

～で～

俺たちは視聴覚室的な部屋にいた。

「と、いうわけで、しょーがないからお前のしょーもない恋を応援してやる。

図が高いぞ。私はお前の落とし神だ」

「いよっ、Fallen God!!」

「耕也、それ意味変わってくるぞ」

そうなの？

あれ？

やっぱり英語はダメだ俺。

こりゃ50点なんて絶対無理ですな。

すると、せつかくやる気になった桂馬に小阪が言う。

「バーカ、あんなの冗談に決まってるでしょ。

誰がオタメガの力なんか借りますかっての」

「黙って言うことを聞け。幸い、ここには現実で成功しているやつリアルがいる。

そいつからまず話を聞こうと思う」

なるほどなるほど。

して？ その人物とは？

「耕也、何か話せ」

……俺!?

いやいやおかしいだろ!

俺はすぐさま桂馬に反論した。

「ちよっと待てよ! そういうの無茶振りって言うんだけど!？」

「そうか。よし、話せ」

軽めに流された!!?

「何？ 竹内って彼女いたっけ？」

「え？ いや、いないけど・・・」

「なら成功してないじゃん」

・・・。

くそう、今の言葉はけっこうキタ・・・。

「いいから黙って話を聞け」

「お前も無茶が過ぎるぞ!!」

結局、俺が攻略した娘^こについてとか、攻略の方法とかを詳しく話させられたとき。ハハハ。

そんなこんなで1時間が経過した。

「で？ これがどうしたっての？」

「フン、哀れなヤツだ。いずれボクに感謝することになるぞ
ずいぶんとえらそうだな。

俺だぞ。

さっきまで話してたのは。

「エルシィ」

「はい！」

「お前もだ」

「何で俺もなんだよ！」

俺たちはとりあえずホワイトボードに大きな紙を貼り付けた。

何だこれ・・・『ユータくん』・・・？

小阪が今好きな人か？

そして桂馬は説明を始めた。

「今回攻略するユータくんは、ボクも属性が特定できない特殊キャラだ」

「お前、今回もゲーム理論なんだな」

「何よ属性って？」

「いいから黙って僕の話聞いて！！」

偉そうに。

「出会い、印象付け、好感度上げ、告白の必須イベント。

これさえ抑えておけば、成功率はグーンと上がる」

ふむふむ、何か参考になりそうだから

ここは黙って聞いておこう。

そしてエルシイが何かシール？ を貼った。

「何してんだお前」

「ユータくんの行動ルートです！」

「ユータくんの？」

「そうだ。できれば短期決戦に持ち込みたい」

早く駆け魂を出したいからだろ。

そして桂馬は小阪を指差して断言した。

「3日だ！ 3日で告白イベントを成功させてやる！」

おお、言い切った。

なんかカッケー。

桂馬がカッコ付けたところで小阪は・・・

ガラッ

「アホらし。 帰るわ」

「おい!!!!?」

俺は止めようとするが、桂馬が小阪に近づく。

ジャアアアア

ドオオン!!

「!?!」

え? 何? 今何したの!?

ドシイン!!

うわ!

何か最近ぶつかる描写が多いぞ作者!
つか言葉でちゃんと説明しろ!!

「アツチイイ!!」

「わ!ユ、ユータくん!?!」

小阪がぶつかった人物がユータくんか。
いやいや、何かお茶かかってるけど!?

そして小阪が戻ってきた。

「何すんのよオタメガ!!!!」

これは仕方が無い。

完全に桂馬が悪いよ、今のは。

「解説しよう」

何か解説始めたんですが・・・。

「恋愛は植物に例えられる。

出会いのインパクトが強いほど幹は太くなり……」

「こんなんで仲良くなれるか！」

桂馬の話をさえぎり小阪は文句を言った。

「エルシィ、帰る？」

「帰ってもいいんでしょーか……」

「だって俺らは関係ないだろ、絶対」

「そうかもしれないけど……」

隣で口論始まってるし。

「悪印象もあとで好印象に変換可能だ！

今はとにかくユータくんにお前を認識させる！」

「……」

初めて小阪が押されていた様子だった。

ドサツ

「桂馬、何だこれは？」

誰もが目にしたらそういうだろう。

机の上に置かれたのは大量の紙だった。

絶対に1000枚は軽く超えてるよな……。

「ユータくんに予想される行動ルートとこの先のルートの展開予想、
そしてそれに対応する会話パターンだ」

ふーん、まあこれ考えたのもすごいな。

これならいけそうな気が・・・

「明日までに覚えて来い」

・・・しない。

「はあ！？ ムリでしょこんなに！」
反論する小阪。

「やれ。これが攻略への最短ルートだ」
いやいや、長くなってでももうちよつと
楽な方を選ぼうよ・・・。

結局その日はそれで終わったのであった。

20 Sing In The Rain . . . (後書き)

耕也「で、そのようないいことがあったんや」

作者「言うと思うか？」

耕也「思わないな」

作者「じつは昨日さ．．．」

耕也「言うんだ!？」

作者「言って欲しくないのか」

耕也「いいよいいよ、言ってくれ」

作者「いやあ、実は」

桂馬「ゲームが出来ないな、これじゃ」

作者「というわけ」

耕也「分からん!!!」

21 雨の日の憂鬱・・・。(前書き)

耕也 「・・・・・・」

作者 「・・・・・・」

耕也 「何か喋れよ」

作者 「・・・・・・」

耕也 「・・・・・・」

作者 「・・・・・・」

耕也 「・・・・・・ハア」

21 雨の日の憂鬱・・・

（学校）

俺たちがいつものようにのんびり（一人はゲームに熱中）していると小阪が教室へ走ってきた。

「オタメガ！」

何だ何だ？

また何かやらしたのか桂馬・・・。

小阪の発言は俺の予想とは逆の言葉だった。

「さっきユータくんに話しかけられた！スゴイじゃんあんた！！」
マジで！？

「スゲーな桂馬、さっそく効果が出始めてるぞ」

「・・・それより、ちゃんと覚えてきたのか？」

桂馬は小阪に尋ねた。

「あ・・・えっと・・・」

こりゃ覚えてないな。

絶対に。

「わ、私もいろいろ忙しくってさー・・・」

「言い訳が苦しすぎるぞ、お前・・・」

まったくどうするんだ・・・と思ったのもつかの間。

これまた予想を覆す発言が。

「・・・んなことだろうと思った。仕方が無い、今日はサポートしてやる」

おお!?

「どうしたんだお前」

「何がだ」

「初登場時より明らかにいい人になってるぞお前」

「どういう意味だ」

桂馬の額に怒りマークが見えたので、この話題は流す。

くでく

なんやかんやで小阪（桂馬の命令により）はユータくんを呼び出し、会話をすることに。

俺と桂馬とエルシィは羽衣で隠れてうしろから小阪をサポートする。ま、サポートするのは桂馬だけだけど。

桂馬がセリフを読み上げ、それを小阪が言う。

小阪越しにユータくと桂馬が会話しているだけじゃないかと思っただが、

あえて口にはださなかった。

くでく

またもネオ視聴覚室。

「はー、ユータくんといっぱい話せたー」

「ほとんど桂馬の力を借りてだけだな」

「うるさいなー、話せたからそれでいいでしょー」
へいへい、悪かったですねそりゃ。

「印象付けは完了だ。ここからは強気で攻める！」
おお、やる気みなぎってきてるな。

この分ならもうホントに3日でいけるぞ！

だが小阪は

「えー！？ 今日はどういーよー。話せて楽しかったし・・・」
「目的は告白だろ。成功させたかったら、ちゃんと聞いてろ」

「桂馬さあ、もうちょっと愛想良くできないのか？」

「話しかけるな。今は忙しい」

普段ならゲーム中に使うセリフだ・・・。

つか、桂馬絵描いてるのか・・・？

・・・そういえば桂馬の絵って・・・

「あっはははは！！」

案の定、小阪は爆笑しだした。

「アンタ絵ヘター!!!」

「うるさい!!!」

「これユータくん!? 勘弁してー!!!」

大爆笑だな、もう。

でも・・・マジおもしろいわこの絵。

「耕也何してる!」

「記念に写メをと思って」

「ふざけるなあ!」

おそらくこの時間は今までで一番和かっただろう。

そして、小阪は着実にユータくんを攻略していったのだ。

それこそ桂馬の力で。

くで、ある日く

「今日もやるの?」

「攻略に休みはない」

「少しぐらい休んだらどうだよ」

「家で休んだだろ」

そういうことじゃなく・・・。

「というかお前は関係ないんだから、別にいなくてもいいんだぞ? 逆にエルシィはなぜいないんだ」

「いなくてもいいだとオ!?」

お前なあ、この前いつも逃げるなどか一緒にいるとか言ってたくせに・・・!」

「気にするな。ボクは気にしていない」
ほざけこのゲーム脳がア!!

「お前は今から体育館でバスケの練習してろ。
ユータくんはこの前までバスケ漫画にはまっていた。
そこから話題を作って何か話せ」

「バスケ漫画って何の？」

「そんなのボクが知るか！」

「あ、服は制服のままでいい」
「・・・・・・・・・・」
?

「小阪、桂馬が話してんだろ。ちゃんと聞いてんのか？」
「・・え？ あ、ごめん。アハハハ・・・・・」
こいつ・・・・・マジメにやる気あるのか・・・？

「まったく・・・・・もう一度言うぞ。今度はちゃんと聞けよ」
「う、うん・・・・・」

「・・・・・・・・桂馬の話が一区切りついたところ
小阪が話を切り出した。

「そういやさー、昨日のテレビで言ってたんだけど
アメリカじゃ雨降ってても傘ささないんだって」
「・・・・・・・・・・はあ？」

「何言ってるんだよお前は」

「え？何って、だからアメリカじゃ・・・」

「お前さ、桂馬がちゃんとやってくれてんのに
何でいきなりアメリカの話なんだ。何だ？ 雨とかかってんのか？」

「・・・・・・・・雨か・・・」

・・・・・・・・小阪の様子、最近少しおかしい気がする・・・。
・気のせいだろうか・・・。

ついに桂馬が吹っ切れた。

「何がアメリカだ！ ボクはそんなものどうでもいい！」

「え！？ あんたテレビ見ないの！？」

流行りものとか、おいしいものの情報とかどーすんの！？」

「現実^{リアル}の情報なんて必要ない！うちのモニターは全てゲーム専用だ
！」

「おかげで俺はテレビ見られないんだけどね・・・」

「ふうん・・・・・・・・」

桂馬は立ち上がり小阪に言った。

「告白は明日の放課後だぞ」

しばしの沈黙の後、小阪は小さく頷いた。

・・・やはり様子がおかしい気がした・・・。

「兎玉のヤロー!!!!!!」

「何だってんだお前は！」

俺は白川と英語の勉強をしていた。

そして図書委員が俺に『図書館ではお静かに』的な睨みを利かせてきたので

俺は『以後気をつけます』という意味で軽く会釈をした。

「つか、お前もお前で何であんな無茶な賭けに出たんだ？」

「おい。俺がテストで50点取るのが無茶な賭けだとも言うのか？」

「英語なら」

英語ならか。

なら仕方ない。英語はホントにダメだもんね俺は。

「家で勉強したらどうだ？」

「……そうだな。そろそろ閉館だろうし……」

さっきから図書委員が睨んでるし……。

くでく

俺たちは靴箱へ靴を取りに行った。

「どーすんだお前。50点」

「くそう、こーなりや意地だ！ 意地で50点、いやこの際100点取ってやる！」

「ムリムリ」

「お前！ 自分でどーするか聞いておいてそりゃねえだろ！？」

「だってどーでもいいし。俺英語は常に80点代だし」
白状者!!!!

でも、コイツは極度のかのんファンだということを除けば
普通の人なんだよなあ。

ある意味羨ましい限りだ。

すると白川が言った。

「あ、俺職員室に呼び出し喰らってたんだった」

「はあ? さっさと行ってこいよ、何したんだ?」

「さあ? 昼休みに呼び出し喰らったんだけどさ」

「へえ、昼休みか」

イヤイヤイヤイヤ!!!!

昼休みって!? 今が6時12分だから・・・えっと・・・

「5時間は経過してるぞ!」

「ヤバイな、軽く怒られるなこりゃ」

「軽くねえよ! 一切軽くねえよ!」

「うるさいなお前は」

「お前は何でそんなにお気楽なんだ!?

いいからとっとと行って来い! 待っててやるから」

「おう、サンキュ」

白川は靴を履き替え、階段を駆け上がっていった。

「・・・ハア」

何であんなのと仲がいいんだろうか・・・。

俺はそばの階段にゆっくりと腰を下ろした。

「まったく・・・いろいろとヒドイもんだ」

「何をそんなに悩んでんの？」

「だからあ、白川がトンデモナクアホで……え!？」

いつの間にか横にはスロアがいた。

……え!？」

いつの間にいたの!？」

「お前、いつからいた!？」

「たった今来た」

「へ、へえ……そう。何で？」

「え？」

俺は何で今来たのかという意味で聞いた。

「だって、耕也が学校来いって言うから」

「今じゃねえよ! 何で今くるんだよ!」

俺が学校来いって言ったのは、エルシィみたく編入してこいって意味だ!……!」

「あ? そうなの？」

たりめーだカスヤロー!……!……!

そう言っってやりたかったが、さすがに女の子なのでやめておいた。

「まあ、いいじゃん。よし、用事がすんだから帰るか」

「待てよ、白川待ってるんだよ」

「あんな冴えないのほっときなよ」

ヒドイ!

いくらホントのことでもヒドイ!

そりゃ冴えないけど、いいやつなんだよ。 たまに。

「何してるの？」

「だからあ、白川を待って……え?」

今考えたら、スロアの声じゃなかったな。
俺はそう思って声がしたほうを向いた。

そこにいたのはおそらく部活中であろう高原歩美がいた。

「こんなところで、何してるの？」

「高原……。お前こそ何してんだ」

「私は、まあ休憩」

ふうん、休憩ね。

別にどーでもいいのだが。

「……。？ その娘誰？」

「え？」

歩美はスロアの方を指差して言った。

「……そういやスロアのこと知らないんだっけ……。だから早めに学校に來いって言ったのに……！」

俺はとっさに言った。

「えっと……。こいつは……。お、俺のいとこだよ」

「はあ！？」

スロアは愕然としてこっちを見つめる。

仕方ないだろ、これが良作だ。

いとこなら顔が似てなくても疑われないからな。

なんならはとこでもいいぞ。

「いとこ……。？ 竹内の？」

「あ、うん。 えっと……。雨崎スロアって言うんだ」

「はあ！！？？」

スロアはますます俺を見つめてくる。

「何よ『雨崎』って!?!」

「仕方ないだろ、パワポケにそういうキャラがいて、パツと浮かんだんだよ」

「またパワポケ!?!」

「そーだよ、文句あつか! だからとっとと学校来りゃ良かったんだよ」

「スロア・・・? 変わった名前・・・」

「あー、えっと、まあ桂木エルシイと同じ要領なので気にしないで」「何でエリーが出てくるの?」

「えっと・・・それは・・・」

「まずいぞ、こいつ結構手ごわい・・・!」
「つかこいつもエリーって呼んでんのかよ。」
「まったくネーミングセンスがない・・・。」

「と、とにかく、ウチのクラスに編入することになったから」「はあ!!!!!!?」

「もうそれはいい。」

「何で私がここに通うの!?!」

「前から言ってただろ、これは裁きの剣だと思え」

「何なのソレ?」

「・・・一方、歩美はそれ以上勘ぐることは無かった。」

「まあいいや。よろしくね」

「あ、うん。えっと・・・」

「高原歩美」

「あーそうそう。よろしく、・・・歩美」

バカ悪魔。

『あーそうそう』って下手したら疑われるだろが。

ま、とりあえずこれでスロアはもう逃げられないな。
これでいつ駆け魂が出てきても安心だぜい。

「・・・・・・・・・・」

・ ・ 何かスロアが『覚えてろ』みたいな目で見ているが、気にしないでおこう。

しばらくして歩美はここからが本題だとばかりに俺に聞いてきた。

「ねえ竹内、あんた桂木と仲いいんでしょ？」

「え？ ああ、まあな」

あいつと仲良くできるのは俺くらいだろう。

「桂木って、普段どんななの？」

「は？」

「べ、別に深い意味は無いんだけど。何かその、気になって」
深い意味が無いのは分かってるよ。

あんなの興味ないだろ普通に。

攻略の記憶は無くなってるんだし・・・・。

「普段どんななの・・・って言われても・・・」

「まああんな感じよね。常にゲームしてるし、単なるバカ」
お前に言われりゃ世話ないな。

「・・・だよねー！　アイツ普段もあんなのかー！」

「じゃあ、私練習あるから、じゃあね」

「ああ、頑張ってな」

・・・・・とりあえず、帰ってからスロアに何かされそうだな・・。

21 雨の日の憂鬱・・・（後書き）

耕也「俺はまったくもって作者にイラついている」

作者「・・・・・・・・・・」

耕也「コイツ、いやなことがあったって理由で喋らねえんだ」

作者「・・・・・・・・・・」

耕也「・・・・・・・・・・はあ」

桂馬「もうこの小説打ち切っていいんじゃないのか」

耕也「それはダメだろ!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8763t/>

God Only Knows ? !

2011年12月3日16時57分発行